一橋大学ア式蹴球部
100年史

Vol.2
戦記

酉松会

はじめに

勝っては泣き、負けては泣いた・・

『100 年史 Vol.1 沿革』に続く本書は、
一橋大学ア式蹴球部の
リーグ戦を中心とする 100 年戦記 である。

昭和 15 年・・・苦難の時代に我が部は、
関東リーグ１部２位という偉業を成し遂げた。
当時の新聞には、こんな記述があったという。

「商大は技の劣勢を
　果敢なる闘志と
　　旺盛なる団結力で覆した」

その伝統は、今も生きている。
いつの日か再び関東リーグの舞台に立ち、
大先輩の記録を塗り替えてくれることを願う。

目 次

はじめに

祝 辞 …… 3

武田 厚（東大 OB）/ 伊藤 隆（神戸大 OB）/ 寺川博之（大阪市大 OB）

戦 歴 …… 6

戦 記 …… 9

草創期　大正10年 ～ 大正12年 …… 10

ア式蹴球東京カレッジリーグ　大正13年 ～ 昭和９年 …… 11

関東大学サッカーリーグ　Ⅰ期　昭和10年 ～ 昭和42年 …… 22

東京都大学サッカーリーグ　Ⅰ期　昭和43年 ～ 昭和48年 …… 56

関東大学サッカーリーグ　Ⅱ期　昭和49年 ～ 昭和51年 …… 65

東京都大学サッカーリーグ　Ⅱ期　昭和52年 ～ 令和２年 …… 69

酉松会 会則 …… 142

酉松会 会員名簿 …… 144

祝 辞

武田 厚　一般社団法人 東京大学 LB 会理事長　昭 45 卒

この度は一橋大学ア式蹴球部創部 100 周年を迎えられましたこと、
まことにおめでとうございます。東京大学運動会ア式蹴球部と
LB 会を代表して心よりお慶び申し上げます。

考えてみますと一橋大学と東京大学は、「ア式蹴球部」を正式名称とする
数少ない大学であり、長年にわたって良きライバルでもありました。
サッカーというスポーツが、日本国内でまだ十分に普及していなかった戦後しばらくは、
両校が共に関東大学リーグで活躍していました。

遠い昔の話になりますが、1966 年の秋、私が１年生の時のリーグ戦のことです。
当時、関東大学リーグ２部で戦っていた両校が相まみえる前日の練習で、主将が
「明日の一橋戦は絶対に勝つぞ、いいな」「みんな、気合い入れていくぞ」と、いつになく
荒っぽい調子で、全員にカツを入れたことが思い出されます。しかも、その試合に私も途中から
出ることになり懸命にプレーしたのは言うまでもありません。そして、そういう４年生の思いは
そっくりそのまま次世代に継承されていき、私なども「一橋戦は必勝」という気構えが自然と
身についたものです。しかし、恐らくそのことは一橋大学でも同様なのではないかと思われます。

時は下りまして昨年、2020 年のことです。
昨シーズンはコロナ禍で極めて変則的なリーグ戦となりましたが、両校が対戦するまでに東大は
上位グループ、一橋大学は下位グループに決定していました。東大側は東京都リーグ１部復帰を
目指してほぼ勝負あったかの如き雰囲気だったのですが、結果は真逆で、一橋大学が完勝したの
です。正に東大戦にかける意気込みが痛いほど感じられたものです。東大に勝ったということで
一橋大学の OB の方々は大いに盛り上がったと、後日聞き及びました。そういう OB たちも
毎年交流を続けていて、ゲームは真剣で白熱した戦いをするものの、試合後は、和気藹々、
互いに懇親を深めています。100 周年を期して小平のグラウンドが人工芝になったとのこと、
今後は小平と本郷と交互に交流戦が行われることになりそうで楽しみであります。

サッカー界がＪリーグを頂点に国民的スポーツとして普及した今日、
国立大学が大学リーグの頂点を臨むのは至難の業であることは重々承知の上で、
なお且つ両校とも関東大学リーグへの復帰を目指して切磋琢磨し、50 年前にそうであったように
両校が関東大学リーグで対戦できることを切に願っております。一橋大学ア式蹴球部と酉松会の
益々のご発展を祈っております。同時に、一橋大学、東京大学両校の現役、OB の、より一層の
交流を祈念してお祝いのご挨拶といたします。

伊藤 隆　神戸大学サッカー部 OB クラブ会長　昭 57 卒

一橋大学ア式蹴球部が創立 100 周年を迎えられましたことを、
神戸大学サッカー部並びに OB クラブを代表して心からお祝い申し上げます。我々神戸大学サッカー部は 4 年前の 2017 年に 100 周年を迎えましたが、一橋大学ア式蹴球部酉松会緒方会長様はじめ、多くの方々から心温まるご祝意を頂きましたことをこの場を借りて深く御礼申し上げます。

4 年前に発刊した「神戸大学サッカー部 100 年史」によると、
三商大戦が初めて記録に登場するのは 1947 年（昭和 22 年）です。ただし当時の OB の記録に「三商大戦の復活」という表現が使われていますので、戦前から対抗戦はやっていたのでしょう。以降、今日に至るまで 70 年以上、何らかの理由で中止になった年や記録の残っていない年もありますが（今年 2 月の三商大戦もコロナの影響で中止）、営々と旧高等商業学校日本一を決めてきたわけです。また、大市大とは 1930 年（昭和 5 年）に関西学生蹴球リーグ 1 部で対戦した記録が一番古く、以降何度も同じリーグに所属し、また三商大戦を通じて対戦してまいりました。このように学生サッカーの黎明期から、お互いに多くの対戦をして切磋琢磨してきたのが三商大です。

今般の一橋大学ア式蹴球部創立 100 周年記念事業で、
我々神戸大学サッカー部 OB クラブが大いに刺激を受けたことがあります。
一橋大学ア式蹴球部酉松会が中心となり多額の寄付金を集められ、サッカー部グラウンドの人工芝化を実現されたことです。我々も六甲台グラウンドの人工芝化が、いつかは実現したい夢ですが、道のりは険しいのが現実です。またコーチに元日本代表 J リーガーの戸田和幸氏が就任されていますが、酉松会のバックアップがあったから実現できたことと拝察申し上げます。
我々神戸大の OB も頑張らなければならないと決意を新たにしているところです。

日本代表が毎回サッカーワールドカップに出場し、サッカーの裾野が拡大し、
日本サッカーのレベルが我々の時代とは比べようがないくらいに進歩している昨今、体育会のクラブ活動もある程度の資金力が必要な時代になっています。過度の商業主義や勝利第一主義の学生スポーツとは一線を画しつつ、学生は学業とクラブ活動の両立を図り、OB は物心両面において手厚い支援を行うという、国公立大学の学生スポーツのあるべき姿を一橋大学ア式蹴球部並びに酉松会は体現されていると感じます。神戸大サッカー部にとりましても学ぶところが多く、今後とも親しく交流させて頂ければと思っております。

末筆ながら一橋大学ア式蹴球部の益々のご活躍を祈念するとともに、
同じような環境下で活動する両部が三商大戦等を通じて刺激し合いながら、
共に成長していくことを願っております。

寺川 博之　大阪市立大学サッカー部 OB・烏球会会長　昭 54 卒

一橋大学ア式蹴球部創立 100 周年を迎えられることを
心よりお祝い申し上げます。

貴部とは神戸大と共に「旧三商大戦」として
長い定期戦の歴史がありますが、私の現役時代を振り返ると、
まず思い出されるのが一橋大学の真っ黒な土のグラウンドです。
入部して初めての遠征が旧三商戦で一橋グラウンド。たまたま夕立に見舞われ、
ユニフォームが真茶色になり、なかなか色が戻らなかったものです。
肝心の試合は貴校にも神戸大にも勝利した記憶がなく、悔しい思い出だけが残っています。

その後の旧三商戦について幾つかの世代に取材しましたが、
20 年ほど前から各大学の生協を利用して親睦会を催すようになっており、酔った勢いで
噴水に飛び込んだりとか、グラウンドでは熱戦を、終了後は熱い交流を続けさせてもらっており、
サッカーという共通のプラットフォームに立つ者同士、これからも是非、有意義な交流を
続けさせてもらいたいものです。

さて、熱戦が繰り広げられたグラウンドですが、
一橋大も大阪市大もお世辞にも良質なグラウンドとは言えませんでしたが、奇しくも本年３月に
両校とも「全天候型グラウンド」に生まれ変わることになりました。人工芝グラウンドは我々に
とって長年の「悲願」でありましたが、貴部におかれては大学からの支援を一切受けずにＯＢ、
現役、関係者のみで寄附を募り準備に何年もかけてようやく悲願を達成されたとお聞きしました。
創立 100 周年に合わせてこの大事業を成し遂げられたことは、偏に OB 会の結束力・底力以外の
何物でもないと感服いたします。大阪市大も関係する体育会クラブ、全学同窓会、大学等の協力で
ようやく竣工にたどり着きましたが、これからは良質なグランドで旧三商戦を戦えるだけでなく、
現役諸君には更に上を目指すべく、鞭を入れたいところです。

大阪市大は来年（2022 年）４月より大阪府立大学と統合し、
「大阪公立大学」として新たな歴史を刻んでいくことになります。市大サッカー部については
府大サッカー部と合併し、人工芝になった市大のグラウンドをホームとして新チームを編成し、
戦っていく予定になっています。旧三商戦については市大の伝統を引き継ぐ形で継続して
いきますので、引き続きご厚誼賜りますようお願いいたします。

貴部と酉松会ＨＰを拝見しましたが、一橋サッカー部の歴史が
一目瞭然に分かるよう編集されており、さすが一橋大学と感心しきりです。
過去、クラブ存続の危機もあったそうですが、それも乗り切り連綿と歴史を積み重ねられている
「一橋大学ア式蹴球部」。これからも 50 年、100 年と輝かしい歴史を積み重ねられることを
祈念してお祝いの言葉とさせて頂きます。

戦 歴　大正 10 年度（1921）～ 昭和 20 年度（1945）

草創期			
大正 10 年（1921）	**初試合** vs 早稲田高等学院		△　0 - 0
大正 11 年（1922）	**専門学校蹴球リーグ** 最下位		0 勝 3 敗　1 東高師　2 東大　3 早高　4 商大
大正 12 年（1923）	～ 関東大震災 ～		
ア式蹴球東京カレッジリーグ			
大正 13 年（1924）	2 部	5 位：1 勝 4 敗	1 一高　2 明治　3 外語　4 青学　5 商大　6 東歯
大正 14 年（1925）	2 部	5 位：2 勝 3 敗	1 農大　2 明治　3 外語　4 青学　5 商大　6 東歯
大正 15 年（1926）	2 部	3 位：2 勝 2 分 1 敗	1 慶応　2 明治　3 商大　4 青学　5 外語　6 東歯
昭和 2 年（1927）	2 部	4 位：2 勝 1 分 2 敗	1 明治　2 農大　3 明薬　4 商大　5 外語　6 青学
昭和 3 年（1928）	2 部	4 位：2 勝 1 分 2 敗	1 農大　2 法政　3 東高　4 商大　5 明薬　6 外語
昭和 4 年（1929）	2 部	4 位：1 勝 3 分 1 敗	1 一高　2 東高　3 法政　4 商大　5 明薬　6 青学
昭和 5 年（1930）	2 部	最下位：勝敗不詳	1 農大　2 東高　3 成城　4 法政　5 明薬　6 商大
昭和 6 年（1931）	3 部	最下位：0 勝 1 分 4 敗	1 立教　2 国学院　3 中央　4 日歯　5 商船　6 商大
昭和 7 年（1932）	4 部	優勝：3 勝 2 分 0 敗	1 商大　2 日大　3 拓大　4 外語　5 東歯　6 成蹊
昭和 8 年（1933）	3 部	優勝：5 勝 0 敗	1 商大　1 中央　3 日歯　4 国学院　5 慈恵　6 東工
昭和 9 年（1934）	2 部	優勝：5 勝 0 敗	1 商大　2 商船　3 明治　4 東高　5 成城　6 法政
関東大学サッカーリーグ Ⅰ期			
昭和 10 年（1935）	1 部	5 位：1 勝 4 敗	1 早稲田　2 東大　3 文理　4 慶応　5 商大　6 立教
昭和 11 年（1936）	1 部	5 位：2 勝 3 敗	1 早稲田　2 慶応　3 文理　4 東大　5 商大　6 農大
昭和 12 年（1937）	1 部	最下位：0 勝 5 敗	1 慶応　2 東大　3 早稲田　4 明治　5 文理　6 商大
昭和 13 年（1938）	2 部	優勝：5 勝 0 敗	1 商大　以下順位不詳：千葉医　拓大　慈恵　立教　法政
昭和 14 年（1939）	1 部	5 位：1 勝 2 分 2 敗	1 慶応　2 早稲田　3 東大　4 明治　5 商大　6 農大
昭和 15 年（1940）	1 部	2 位：3 勝 2 敗	1 慶応　2 商大 & 早稲田　4 東大 & 文理　6 明治
昭和 16 年（1941）	1 部	4 位：1 勝 2 分 2 敗	1 東大 & 早稲田　3 慶応　4 商大　5 立教　6 文理
昭和 17 年（1942）	1 部	最下位：1 勝 1 分 3 敗	1 東大　2 早稲田　3 明治　4 慶応　5 立教　6 商大
昭和 18 年（1943）	2 部	優勝：3 勝 0 敗	1 商大　以下順位不詳：法政　農大　東工
昭和 19 年（1944）	～ 戦時休止 ～		
昭和 20 年（1945）	～ 戦時休止 ～		

戦 歴　昭和 21 年度（1946）～ 昭和 55 年度（1980）

関東大学サッカーリーグ Ⅰ期			
昭和 21 年（1946）	1 部	5 位：1 勝 4 敗	1 早稲田　2 東大　3 文理　4 慶応　5 東産大　6 立教
昭和 22 年（1947）	1 部	最下位：0 勝 5 敗	1 早稲田　2 慶応　3 東大　4 文理　5 千葉医　6 商大
昭和 23 年（1948）	2 部	最下位：0 勝 5 敗	1 立教　2 法政　3 中央　4 慈恵　5 日医　6 商大
昭和 24 年（1949）	3 部	優勝：7 勝 0 敗	1 一橋　以下順位不詳：国学院　日大　東歯　東工　駒沢　虹陵　専修
昭和 25 年（1950）	2 部	4 位：2 勝 3 敗	4 一橋　以下順位不詳：慈恵　千葉大　日医　農大　明治
昭和 26 年（1951）	2 部	4 or 5 位：3 勝 1 分 2 敗	4 or 5 一橋　以下順位不詳：法政　日医　東工　慈恵　千葉大　農大
昭和 27 年（1952）	2 部	4 位：2 勝 1 分 3 敗	1 青学　2 法政　3 東工　4 一橋　以下順位不詳：農大　千葉大　慈恵
昭和 28 年（1953）	2 部	5 位：1 勝 5 敗	5 一橋　以下順位不詳：横浜市大　千葉大　法政　農大　東工　青学
昭和 29 年（1954）	2 部	5 位：2 勝 4 敗	5 一橋　以下順位不詳：東工　法政　横浜市大　農大　学芸　青学
昭和 30 年（1955）	2 部	6 位：1 勝 1 分 4 敗	6 一橋　以下順位不詳：農大　日大　法政　青学　横浜市大　学芸
昭和 31 年（1956）	2 部	5 位：1 勝 2 分 4 敗	5 一橋　以下順位不詳：武蔵　法政　日大　日体大　学芸　青学　横浜市大
昭和 32 年（1957）	2 部	5 位：2 勝 2 分 3 敗	1 日大　2 東大　3 上智　4 青学　5 一橋　6 日体大　7 学芸　8 武蔵
昭和 33 年（1958）	2 部	4 位：3 勝 1 分 3 敗	1 日大　2 東大　3 防衛大　4 一橋　5 日体大　6 上智　7 武蔵　8 青学
昭和 34 年（1959）	2 部	4 位：2 勝 2 分 3 敗	1 東大　2 日大　3 防衛大　4 一橋　5 日体大　6 成城　7 武蔵　8 上智
昭和 35 年（1960）	2 部	6 位：1 勝 2 分 4 敗	1 成城　2 防衛大　3 日大　4 東大　5 日体大　6 一橋　7 武蔵　8 上智
昭和 36 年（1961）	2 部	7 位：0 勝 3 分 4 敗	1 日大　2 東大　3 上智　4 成城　5 武蔵　6 防衛大　7 一橋　8 日体大
昭和 37 年（1962）	2 部	3 位：3 勝 4 敗	1 東大　2 成城　3 一橋 & 上智 & 防衛大　6 農大　7 自由　8 武蔵
昭和 38 年（1963）	2 部	6 位：2 勝 1 分 4 敗	1 日体大　2 上智　3 東大　4 成城　5 防衛大　6 一橋　7 自由　8 農大
昭和 39 年（1964）	2 部	7 位：2 勝 5 敗	1 法政　2 順天堂　3 上智　4 成城　5 東大　6 防衛大　7 一橋　8 自由
昭和 40 年（1965）	2 部	6 位：2 勝 1 分 4 敗	1 法政　2 上智　3 東大　4 農大　5 成城　6 一橋　7 順天堂　8 防衛大
昭和 41 年（1966）	2 部	最下位：1 勝 1 分 5 敗	1 日体大　2 農大　3 成城　4 順天堂　5 上智　6 東大　7 青学　8 一橋
昭和 42 年（1967）	3 部	3 位：3 勝 2 分 2 敗	3 一橋　以下順位不詳：関東学院　防衛大　学習院　自由　学芸　千葉大　成蹊
東京都大学サッカーリーグ Ⅰ期			
昭和 43 年（1968）	1 部	2 位：6 勝 1 分 2 敗	1 自由　2 一橋　以下順位不詳：都立大　学習院　亜細亜　専修　成蹊　武蔵　東工　商船大
昭和 44 年（1969）	1 部	5 位：4 勝 1 分 4 敗	1 拓大　2 成蹊　3 学習院　5 一橋　以下順位不詳：明治　亜細亜　専修　東工　都立大　自由
昭和 45 年（1970）	1 部	5 位：3 勝 3 分 3 敗	1 亜細亜　5 一橋　以下順位不詳：専修　拓大　学芸　学習院　成蹊　明学　駒沢　自由
昭和 46 年（1971）	1 部	4 位：3 勝 2 分 2 敗	1 駒沢　2 成蹊　3 青学　4 一橋　以下順位不詳：明学　亜細亜　自由　学習院
昭和 47 年（1972）	1 部	7 位：2 勝 5 敗	1 明学　2 青学　3 駒沢　7 一橋　以下順位不詳：自由　学習院　亜細亜　成蹊
昭和 48 年（1973）	1 部	4 位：4 勝 1 分 3 敗	1 明学　2 青学　3 立教　4 一橋　5 駒沢　6 専修　7 自由　8 成蹊　9 学習院
関東大学サッカーリーグ Ⅱ期			
昭和 49 年（1974）	2 部	7 位：3 勝 4 敗	1 日大　2 順天堂　3 国士舘　4 拓大　5 青学　6 東大　7 一橋　8 成城
昭和 50 年（1975）	2 部	最下位：0 勝 2 分 5 敗	1 順天堂　2 国士舘　3 青学　4 明治　5 拓大　6 東大　7 立教　8 一橋
昭和 51 年（1976）	2 部	7 位：1 勝 1 分 5 敗	1 国士舘　2 明治　3 青学　4 順天堂　5 東大　6 立教　7 一橋　8 拓大
東京都大学サッカーリーグ Ⅱ期			
昭和 52 年（1977）	1 部	7 位：2 勝 5 敗	1 駒沢　2 立正　3 学芸　7 一橋　以下順位不詳：成蹊　亜細亜　国学院　明学
昭和 53 年（1978）	2 部	優勝：6 勝 1 分 0 敗	1 一橋　2 帝京　3 学習院　以下順位不詳：成城　東工　大東大　東経　国学院
昭和 54 年（1979）	1 部	6 位：2 勝 2 分 3 敗	1 青学　2 学芸　3 成蹊　4 立教　5 東大　6 一橋　7 自由　8 帝京
昭和 55 年（1980）	1 部	5 位：0 勝 6 分 1 敗	1 明学　2 学芸　3 立教　4 東大　5 一橋　6 成蹊　7 学習院　8 自由

戦 歴　昭和 56 年度（1981）～ 令和 2 年度（2020）

東京都大学サッカーリーグ Ⅱ期			
昭和 56 年 (1981)	1部	最下位：0勝7敗	1 亜細亜 2 学芸 3 慶応 4 学習院 5 立教 6 東大 7 成蹊 8 一橋
昭和 57 年 (1982)	2部	4位：2勝4分1敗	1 東洋 2 上智 3 帝京 4 一橋 5 大東大 6 成城 7 自由 8 東工
昭和 58 年 (1983)	2部	最下位：0勝3分4敗	1 帝京 2 亜細亜 3 国学院 4 東経 5 成城 6 成蹊 7 大東大 8 一橋
昭和 59 年 (1984)	3部A	優勝：6勝1敗	1 一橋 2 東工 3 電機大 4 日大農獣 5 武蔵 6 水産大 7 農工 8 都留文
昭和 60 年 (1985)	2部	5位：3勝1分3敗	1 東大 2 立教 3 亜細亜 4 帝京 5 一橋 6 成城 7 日大文理 8 武蔵工
昭和 61 年 (1986)	2部	6位：2勝5敗	1 日大文理 2 帝京 3 立教 4 明学 5 亜細亜 6 一橋 7 大東大 8 成城
昭和 62 年 (1987)	2部	3位：2勝3分2敗	1 明学 2 創価 3 一橋 4 玉川大 5 亜細亜 6 東洋 7 帝京 8 立教
昭和 63 年 (1988)	2部	5位：2勝2分3敗	1 亜細亜 2 東洋 3 創価 4 帝京 5 一橋 6 国学院 7 武蔵 8 玉川大
平成 1 年 (1989)	2部	最下位：0勝2分5敗	1 創価 2 帝京 3 武蔵 4 立教 5 上智 6 東洋 7 国学院 8 一橋
平成 2 年 (1990)	3部A	優勝：5勝1分1敗	1 一橋 2 東工 3 農工 4 東経 5 日大農獣 6 高千穂 7 明薬 8 水産大
平成 3 年 (1991)	3部A	5位：1勝4分2敗	1 農工 2 東工 3 東経 4 電通大 5 一橋 6 日大農獣 7 日大商 8 高千穂
平成 4 年 (1992)	3部A	2位：4勝2分1敗	1 東工 2 一橋 3 東経 4 日大農獣 5 農工 6 電通大 7 日大商 8 水産大
平成 5 年 (1993)	2部	7位：1勝2分4敗	1 上智 2 亜細亜 3 成蹊 4 大東大 5 成城 6 日大文理 7 一橋 8 学習院
平成 6 年 (1994)	3部B	優勝：5勝2分0敗	1 一橋 2 自由 3 都立大 4 高千穂 5 武蔵 6 武蔵工 7 工学院 8 桜美林
平成 7 年 (1995)	2部	5位：3勝1分3敗	1 日大文理 2 東経 3 東大 4 立教 5 一橋 6 帝京 7 明学 8 日大農獣
平成 8 年 (1996)	2部	5位：3勝4敗	1 国学院 2 帝京 3 立教 4 大東大 5 一橋 6 東大 7 成蹊 8 東工
平成 9 年 (1997)	2部	最下位：0勝3分4敗	1 学習院 2 大東大 3 朝鮮 4 立教 5 創価 6 東大 7 都立大 8 一橋
平成 10 年 (1998)	3部A	優勝：6勝1敗	1 一橋 2 武蔵 3 明星 4 東工 5 山梨学院 6 電通大 7 武蔵工 8 水産大
平成 11 年 (1999)	2部	6位：2勝1分4敗	1 帝京 2 立教 3 東大 4 大東大 5 成蹊 6 一橋 7 日大商 8 日大文理
平成 12 年 (2000)	3部B	2位：5勝1敗	1 日大文理 2 一橋 3 外語 4 工学院 5 玉川大 6 桜美林 7 都立大　高千穂（棄権）
平成 13 年 (2001)	3部B	5位：2勝2分3敗	1 成蹊 2 桜美林 3 玉川大 4 外語 5 一橋 6 山梨学院 7 都立大 8 工学院
平成 14 年 (2002)	3部B	7位：1勝2分4敗	1 朝鮮 2 玉川大 3 大東大 4 桜美林 5 山梨学院 6 外語 7 一橋 8 農工
平成 15 年 (2003)	4部C	優勝：6勝1分0敗	1 一橋 2 日大商 3 二松学舎 4 日獣畜 5 水産大 6 商船大 7 明薬 8 電通大
平成 16 年 (2004)	3部B	4位：3勝2分2敗	1 理科大 2 東大 3 玉川大 4 一橋 5 大東大 6 電機大 7 山梨学院 8 工学院
平成 17 年 (2005)	3部B	優勝：6勝1分0敗	1 一橋 2 桜美林 3 日大生資 4 大東大 5 山梨学院 6 杏林 7 東工 8 明星
平成 18 年 (2006)	2部	4位：5勝2分2敗	1 東経 2 玉川大 3 東大 4 一橋 5 日大生資 6 上智 7 山梨 8 首都 9 桜美林 10 理科大
平成 19 年 (2007)	2部	9位：1勝3分5敗	1 立教 2 学習院 3 明学 4 成城 5 東大 6 上智 7 日大生資 8 創価 9 一橋 10 日大商
平成 20 年 (2008)	3部	3位：4勝3分1敗	1 首都 2 外語 3 一橋 4 日大商 5 大東大 6農工 7 東工 8 杏林 9 明星　東薬（棄権）
平成 21 年 (2009)	3部	3位：7勝2敗	1 山梨学院 2 大東大 3 一橋 4 日大商 5 創価 6 東工 7 農工 8 自由 9 都留文 10 杏林
平成 22 年 (2010)	3部	3位：7勝2敗	1 日大商 2 創価 3 一橋 4 日大生資 5 東工 6 外語 7 自由 8 ICU 9農工 10 明薬
平成 23 年 (2011)	3部	2位：6勝1分2敗	1 首都 2 一橋 3 日大生資 4 東工 5 外語 6 桜美林 7 都留文 8 ICU 9 海洋大 10 自由
平成 24 年 (2012)	2部	7位：4勝5敗	1 東経 2 帝京 3 上智 4 日大文理 5首都 6 武蔵 7 一橋 8 創価 9 日大商 10 成城
平成 25 年 (2013)	2部	4位：8勝6分4敗	1 成蹊 2 大東大 3 武蔵 4 一橋 5 上智 6 玉川大 7 学習院 8 日大文理 9 首都 10 日大生資
平成 26 年 (2014)	2部	8位：6勝1分11敗	1 学習院 2 立教 3 玉川大 4 武蔵 5 創価 6 帝京 7 成城 8 一橋 9 日大文理 10 上智
平成 27 年 (2015)	2部	5位：9勝1分8敗	1 東経 2 帝京 3 東大 4 武蔵 5 一橋 6 日大生資 7 玉川大 8 成城 9 創価 10 首都
平成 28 年 (2016)	2部	2位：11勝3分4敗	1 成蹊 2 一橋 3 武蔵 4 上智 5玉川大 6 学習院 7 成城 8 日大生資 9 理科大 10 山梨大
平成 29 年 (2017)	1部	9位：3勝3分12敗	1 明学 2 立教 3 大東大 4 東経 5山梨学院 6 成蹊 7 国学院 8 武蔵 9 一橋 10 帝京
平成 30 年 (2018)	2部	5位：7勝4分7敗	1 東大 2 帝京 3 亜細亜 4 成城 5 一橋 6 玉川大 7 首都 8 武蔵 9 山梨大 10 理科大
令和 1 年 (2019)	2部	4位：9勝2分7敗	1 朝鮮 2 成蹊 3 亜細亜 4 一橋 5玉川大 6 武蔵 7 成城 8 首都 9 日大商 10 日大文理
令和 2 年 (2020)	2部	6位：5勝2分6敗	1 亜細亜 2 東大 3 上智 4 玉川大 5 武蔵 6 一橋 7 成城 8 理科大 9 都立大 10 東工

戦 記

蹴球祭　於神宮競技場　昭和十年十月六日

中央ハ一部昇進ノ優勝カップヲ返還スル神野兄

右ロ野七ツ目ノ斜メニヤ、傾キタル旗ガマーキユリーノ赤旗。一旗手・角田

對法政戰前半のーシーン〔於神宮〕

〔10番を脱へるは鈴村・蹴らんとするは角田〕

草創期

大正 10 年度　(1921)

★創立メンバー：兵藤世平治（本 2）/ 進藤静太郎（予 3）/ 松本正雄（予 2）/ 川村 通（予 2）
明石 毅（予 1）/ 高橋朝次郎（予 1）

【試合メンバー】

FW　王・干・兵藤・呉・張
BK　明石・高橋・吉野・進藤・川村
GK　松本

【初試合】　商大 vs 早稲田高等学院　△ 0 - 0　於東京高等師範学校グラウンド

【記事】

商大蹴球部の前身ともいうべき「蹴球団」は、大正 10 年 6 月、兵藤世平治氏を「親方」として産声をあげた。馳せ参じたのは 川村 通、明石 毅、高橋朝次郎、松本正雄、進藤静太郎 の諸氏と助っ人の中国人留学生であったと川村氏の遺稿に記されている。第 1 戦は、これも旗揚げしたばかりの早稲田高等学院（早大予科）で、結果は 0 ： 0 のドロー。

この年、大先輩の田中虎之輔氏を口説き 50 円の寄付を仰いだ。当時の大卒銀行員の初任給に匹敵する額で、よちよち歩きを始めた商大蹴球団にとってはありがたい寄付だったに違いない。

大正 11 年度　(1922)

この年に日本初のサッカーリーグである「専門学校蹴球リーグ」ができ、4 強の 1 つとして、我が校の名が記されている。すなわち、東京高等師範学校、東京帝国大学、早稲田高等学院、東京商科大学である。試合は全て東高師で行われ、本来は 6 試合だがメンバーが揃わないために棄権が多く、実際に行われたのは 3 試合のみ。残念ながら商大は 3 戦全敗で、最下位に終わる。

【戦績】

1月29日	高師 ○　不戦　● 東大	早高 ○　不戦　● 商大
2月 5日	東大 ○　1 - 0　● 早高	高師 ○　不戦　● 商大
2月12日	高師 ○　6 - 1　● 早高	東大 ○　7 - 2　● 商大

→ 〈番外〉東大・早高連合 ○　3 - 2　● 高師

【順位】　1 高師　2 東大　3 早高　4 商大

ア式蹴球東京カッジリーグ

大正 12 年度　(1923)

★新入部員：瀬社家 力

【記事】
９月１日、関東大震災で、商大の神田校舎が全焼する。

大正 13 年度　(1924)

★全一橋主将：進藤静太郎（本 3）/ 予科主将：林（予 3 台湾出身）/ 予科委員長：三宅定夫（専 3）
★新入部員：伊東健吉 / 近藤豊太郎 / 城島鎮雄 / 星野弘一 / 森 緑 / 渡辺 弘 / 渡辺村吉
神戸 / 田口 / 田部 / 吉田

【試合メンバー】
本３ 進藤　本２ 松本・川村　本１ 高橋　専３ 三宅　専２ 藤井
予３ 林・王（共に台湾出身）・呉（中国人留学生）　予２ 瀬社家

【戦績】 東京２部：５位　１勝４敗

外語	青学	一高	東歯	明治
● 1 - 2	● 0 - 4	● 0 - 4	○ 3 - 1	● 1 - 3

＊大正 13 年度～昭和４年度までの記録は主として
『蹴球』創刊号の渡辺 弘の記事を基礎とする
・・試合日と会場不詳

【１部 順位】１ 早稲田　２ 東大　３ 高師　４ 法政　５ 慶応　６ 農大
【２部 順位】１ 一高　２ 明治　３ 外語　４ 青学　５ 商大　６ 東歯（東京歯科医専門学校）
・・１部６位と２部１位は自動的に入替

【記事】
この年、新しくできた石神井の予科グラウンド（ラグビーと共用）で練習を開始する。
そして秋、大学・高等専門学校 12 校による「ア式蹴球東京カレッジリーグ」が誕生する。
大正 14 年１月から記念すべき第１回のリーグ戦が行われ、２部の商大は５位に終わった。
当時はクラブチームの域をようやく出たか出ないかの程度であって、我が校においても平素練習に出ていない人たちが出場している。対明治、一高、外語の３戦に出場した者は延べ 19 名で、３戦すべてに出ているのは５名のみ。２戦出場は３名。残り 11 名は１戦しか出ていない。

大正 14 年度　(1925)

★主将：瀬社家 力（予 3）
★新入部員：恵藤勤一 / 津田弘精 / 豊田達治 / 半沢貞治 / 平松宣夫

【試合メンバー】
予３　瀬社家　予２　伊東・神戸・近藤・城島・星野・森・渡辺村
予１　恵藤・津田・豊田・半沢・平松　専１　山下　本２　高橋・・渡辺 弘が忌欠のため出場

【戦績】　東京２部：５位　２勝３敗

青学	外語	明治	農大	東歯
○ 2 - 1	● 1 - 3	● 1 - 3	● 1 - 2	○ 1 - 0

＊試合日・会場不詳

【順位】1 農大　2 明治　3 外語　4 青学　5 商大　6 東歯

【記事】
この年から予科が主力となり、本科は指導役となる。
本科生と専門部にとって神田から石神井に通うのは、かなり重荷だったと推察する。
また、この年からアストラクラブ（暁星 OB）の川村・足立両氏をコーチに招き、
さらに７～８月にかけ千葉県保田で約１か月間の合宿を行い、団結力の強化を図った。
東京カレッジリーグが 18 校による「３部制」となり、秋季開幕が恒例となる。

大正 15 年度　(1926)

★主将：瀬社家 力（本１）/ 予科主将：渡辺村吉（予３）
★新入部員：栗山健三 / 小林昌一 / 酒井孝吉 / 高橋啓次郎 / 高橋重弥 / 西川善一郎 / 黄

【試合メンバー】
本１　瀬社家　専２　沢田・山下　予３　城島・田口・森・渡辺村
予２　恵藤・半沢・津田・豊田　予１　黄・酒井・高橋啓・西川

【戦績】　東京２部：３位　２勝２分１敗

青学	明治	外語	慶応	東歯
△ 1 - 1	○ 1 - 0	△ 1 - 1	● 0 - 2	○ 6 - 2

＊試合日・会場不詳

【順位】1 慶応　2 明治　3 商大　4 青学　5 外語　6 東歯

大正 10 年
「蹴球団」第 1 回の
対外試合を終えて
於東京高等師範学校

後列
？・松本・？・進藤・高橋
前列
？・？・明石・？・
兵藤・川村

大正 13-14 年頃
送別会に臨む 1 時間前の
和やかなる集い
於石神井予科の仮校舎前か
（部員名は確認できず）

大正 14 年 秋
於石神井予科グラウンド

後列
恵藤・津田・伊東・渡辺村
近藤・瀬社家・豊田
前列
平松・清水・渡辺弘・松本
川村・城島

昭和 2 年度　(1927)

★予科委員長：豊田達治（予 3）　　一橋会よりの予算 125 円になる
★新入部員：西田嘉兵衛 / 勝田一郎 / 橋本林三 / 大熊 / 佐野 / 高橋義 / 前田 / 山根

【試合メンバー】
本１　渡辺村　専３　山下　予３　安野（半沢改め）・恵藤・豊田
予２　栗山・黄・小林・酒井・高橋啓・西川　予１　高橋義・西田・前田

【戦績】　東京２部：４位　２勝２敗１分

明治	農大	明薬	青学	外語
● 1 - 3	△ 0 - 0	● 1 - 2	○ 3 - 2	○ 5 - 0

＊試合日・会場不詳

【順位】1 明治　2 農大　3 明薬　4 商大　5 外語　6 青学

【記事】
この年、早稲田の本田氏よりコーチを受けた。

昭和 3 年度　(1928)

★新入部員：長瀬東作 / 吉村豊三 / 石田 / 岡田 / 牧野 / 篠原

【試合メンバー】
本２　渡辺　本１　安野・豊田　予３　栗山・黄・酒井・西川
予２　高橋義・西田・山根　予１　篠原・長瀬・吉村

【戦績】　東京２部：４位　２勝１分２敗

農大	法政	東高	外語	明薬
△ 0 - 0	● 2 - 3	● 1 - 2	○ 3 - 2	○ 1 - 0

＊試合日・会場不詳

【順位】1 農大　2 法政　3 東高　4 商大　5 明薬　6 外語

昭和４年度　(1929)

★新入部員：後藤博基 / 二階堂謹二
阿部 / 上野 / 岡部 / 小橋 / 佐原 / 高野 / 田中 / 仁木 / 丸尾 / 吉野

昭和３-４年頃　於石神井予科グラウンド（部員名は確認できず）

【試合メンバー】
本２　豊田　本１　栗山　予３　高橋義・西田　予２　長瀬・吉村
予１　岡部・後藤博・佐原・田中・二階堂謹・丸尾

【戦績】　東京２部：４位　１勝３分１敗

青学	法政	一高	東高	明薬
△ 2-2	△ 0-0	● 0-8	△ 1-1	○ ?

＊試合日・会場不詳

【順位】１ 一高　２ 東高　３ 法政　４ 商大　５ 明薬　６ 青学

【記事】
浦和高校と定期戦が始まる。東大の岸山氏のコーチを受ける。

昭和５年度　(1930)

★予科委員長：長瀬東作　　一橋会より 201 円 70 銭になる
★新入部員：神野光司（清一郎改め）/ 荒瀬 / 水野

？・？・二階堂謹・？・？・後藤博・？・？・？・？・？
？・？・豊田
？・？・西田・神野・長瀬・？

【戦績】　東京２部：最下位　→　東京３部 降格

農大	東高	成城	法政	明薬
?	?	?	?	?

＊順位以外の記録なし

【順位】1 農大　2 東高　3 成城　4 法政　5 明薬　6 商大

【記事】
商大本科が、神田から国立へ移転する。
この年のリーグ戦の記録は全くない。練習も 11 人を欠くことが多く、練習もせずに試合に出る人が出始めて再び昔のクラブチーム化していったらしい。この頃より「専門部」は国立にグラウンドを持ち独自のチームを作ったらしい。世は金解禁 ～ 不景気 ～ 大学は出たけれど、の時代になる。

注）商大には予科と本科の他に、附属商学専門部（高等商業学校に相当する課程）と附属商業教員養成所があり、共に就業年限が３年であった。以下、それぞれに所属する部員には、(専) (養)を付けることにする。

昭和６年度　（1931）

★新入部員：浅枝彦太郎 / 荒井文雄 / 角田 昇 / 鈴木 彰 / 田島輝重 / 森田昭之
斎藤 / 世良 / 橘 / 掘

於石神井予科グラウンド（部員名は確認できず）

【試合メンバー】

本２　西田・高橋　　本１　長瀬・吉村　　予３　後藤博・佐原・二階堂謹
予２　荒瀬・神野・水野　　予１　浅枝・荒井・角田・鈴木・橘・堀

【戦績】　東京３部：最下位　０勝１分４敗　→　東京４部 降格

国学院	日歯	中央	立教	商船
● 1 - 8	△ 3 - 3	● 0 - 6	● 1 - 5	● 0 - 5

＊試合日・会場不詳

【順位】１ 立教　２ 国学院　３ 中央　４ 日歯　５ 商船　６ 商大

【記事】

東京カレッジリーグが「５部制」となる（各部６校）。
長瀬が病んで後半戦に出場できず。

９月に満州事件始まる。これが第２次大戦に繋がるとは国民の誰が予測していたか。
徴兵検査 – 兵役というものが、我ら青年にとって、うっとおしいものであったのは事実だ。
誰もが兵役を免れたがっていた。

昭和７年度　(1932)

★主将：二階堂謹二（本１）/ 予科主将：荒瀬（予３）/ 予科委員長：神野光司（予３）
★新入部員：浅田英三 / 大掛隆之 / 重見敏之 / 林田 毅 / 村井恒典

大掛・荒井・村井・鈴木・田島・重見・角田・荒瀬・林田
浅枝・長瀬・後藤博・西田・二階堂謹・神野・森田

【試合メンバー】
本２　長瀬　　本１　後藤・二階堂謹　　予３　荒瀬・神野
予２　浅枝・荒井・角田・鈴木・田島・森田　　予１　大掛・村井

【戦績】　東京４部：優勝　３勝２分０敗　→　東京３部 昇格

外語	東歯	拓大	日大	成蹊
○ 4 - 0	○ 6 - 1	△ 3 - 3	△ 1 - 1	○ 5 - 0

＊試合日・会場不詳

【順位】１ 商大　２ 日大　３ 拓大　４ 外語　５ 東歯　６ 成蹊

★「三商大戦」が始まる：　vs 大阪商科大学 ● 3 - 5　/　vs 神戸商業大学 ○ 4 - 2

昭和 8 年度　(1933)

★主将：二階堂謹二（本 2）/ 予科主将：浅枝彦太郎（予 3）/ 委員長：田島輝重（予 3）
★新入部員：枝村藤三郎（青山師範より養成所へ）/ 水島　茂（名古屋高商より本科へ）
岩崎寛貞 / 熊沢博文 / 後藤虎雄 / 小西正夫

於石神井予科グラウンド

？・岩崎・児玉・熊沢・後藤虎・森田・後藤博・二階堂謹・角田・大掛・浅田・鈴木
浅枝・荒井・村井・神野・水島・長瀬・重見・田島

【試合メンバー】
本３　長瀬　本２　二階堂謹・後藤博　本１　神野・水島
予３　浅枝・荒井・角田・森田・田島　予２　大掛・鈴木・村井

【戦績】　東京３部：優勝　５勝０敗　→　東京２部 昇格

国学院	日歯	中央	慈恵	東工
○ 5 - 1	○ 6 - 4	○ 2 - 0	○ 8 - 1	○ 8 - 1

＊試合日・会場不詳

【順位】１ 商大　２ 中央　３ 日歯　４ 国学院　５ 慈恵　６ 東工

【記事】
商大予科が石神井から小平へ移るが、まだグラウンドは使用できず、しばらくは国立の陸上競技場で練習した。また翌年から夏の国立合宿の宿泊所は、下宿屋「一橋館」に定着した。

注）「一橋館」は大学通り沿いにあり、現在は喫茶店「白十字」になっている。

昭和 9 年度　(1934)

★主将：二階堂謹二（本 3）/ 協会庶務：後藤博基（本 3）/ 委員長：神野光司（本 2）
予科主将：鈴木 彰（予 3）/ 予科委員長：大掛隆久（予 3）
★新入部員：池尾隆二 / 狩森正雄 / 菅瀬十朗 / 二階堂晴三 / 米山大三 / 長谷川

【試合メンバー】
本３　二階堂謹　本２　神野・水島
本１　浅枝・荒井・角田・田島・森田　養１　枝村
予３　大掛・鈴木・村井

【戦績】　東京２部：優勝　５勝０敗　→　東京１部 昇格

東高	商船	明治	成城	法政
○ 2 - 0	○ 11 - 3	○ 3 - 1	○ 3 - 1	○ 9 - 0
10/1 石神井	11/3 石神井	11/9 石神井	11/17 石神井	11/22 神宮

【順位】1 商大　2 商船　3 明治　4 東高　5 成城　6 法政

＊神宮の芝生に全勝の喜びを味わう

重見・浅田・ ? ・角田・大掛・荒井・浅枝・枝村・後藤博・神野
森田・村井・鈴木・田島・二階堂謹・水島

【記事】・・ 二階堂謹二（主将）

昭和６年、予科キャプテンをやっていた小生は１年先輩の長瀬と一脈相通じ肝胆照らす仲となり、何としても強固なる学校代表チームを創るべきだと夜を日に継いで熟議を重ね相擁して心を砕く。我が蹴球部には、残念ながら歴史浅くして伝統的なものがない。強権、強制、即ち自己の恣意を抑制、犠牲にする事も已むを得ないのではないかと強く識れども、自由束縛を厭う人は次々と離脱する。この激動の真只中、四部への陥落という最も悲惨な運命に否応なしに叩き落とされて了う。

翌昭和７年、国立箱根土地グラウンドに於ける夏季合宿時、集合したメンバーは僅か 13 名のみ。併し救いは、残存部員何れも一騎当千の筋金入りのサッカーメンバーであった。之が火の玉となり再興の念に燃え猛練習を重ね、裏にあってはマネージャー後藤が協会との折衝巧みに慣れた石神井清水組グランドを主たる試合場に選び、且つ審判員には、我等チームの癖を熟知の早大の幸田氏を当てる等、五十歩百歩の４部級のチームには見逃し得ない有利な条件となる。涙なくしては語れぬ苦戦に苦戦を強いられたるも、優勝という大偉業を辛くも捷（か）ちとることができた。

昭和８年に入るや新人も漸増し、養成所新入生の枝村（青山師範の名選手として誉れ高き人）を専門部マネージャーとの曲折ある苦辛の折衝を経てオール一橋の名の下に獲得。及び水島（名古屋高商の主将）の入部を得て、嫌が上にも意気軒昂。再び三部優勝という栄誉を確保した。学内に於いても蹴球部の存在が認められ、無理なく優秀部員も集って来る。

昭和９年度には、部内にて紅白試合が出来る状態にさえなる。何の為に蹴球をするか等の問題は今や昔の夢と化し、堂々学校代表選手の自負を持ち、敢えて強制なくとも積極猛練習に参加する。斯くて秋のリーグ二部戦では破竹の勢抑え難く、向う処敵なく悠々全勝優勝を果たす。

戦い終わり、二部優勝一部昇格祝賀会が中野で盛大に開かれ、先輩現役一堂に会し大いに戦勝を祝ったが、小生、生憎リーグ戦後喜びのあまり新マネージャー神野と日本橋「魚がし」で一杯飲み過ぎ、暴飲暴食の嵩（かど）にて急性黄疸となり上記祝賀会には出席叶わず、記念写真にも片隅に一片の顔写真が貼り付けられた。憶えば已むなき人災にて、笑いを呼ぶエピソードである。

関東大学サッカーリーグ　Ⅰ期

昭和 10 年度　(1935)

★主将：水島 茂（本 3）/ 監督：神野光司（本 3）/ 委員長：重見敏之（本 1）
予科主将：小西正夫（予 3）/ 予科委員長：熊沢博文（予 3）
★新入部員：荒川守之助 / 石割知之 / 金井雄吾 / 清水睦美 / 高橋道太郎 / 早野広太郎
堀尾貞一 / 吉沢貞雄 / 吉田富彦 / 山田秀

【試合メンバー】
本３　水島　本２　浅枝・荒井・角田・田島・森田　本１　大掛・鈴木・林田・村井
予３　岩崎・小西・後藤虎　予１　金井・清水・早野　養２　枝村

【戦績】　関東１部：５位　１勝４敗

早稲田	慶応	立教	東大	文理
● 1 - 7	● 1 - 5	○ 4 - 3	● 2 - 5	● 1 - 2
10/6 神宮	10/28 小平G	11/7 石神井	11/15 神宮	11/23 石神井

【順位】１　早稲田　２　東大　３　文理　４　慶応　５　商大　６　立教

【記事】
「ア式蹴球東京カレッジリーグ」が大学と高専に分離し、現在に続く「関東大学サッカーリーグ」が編成された。
また本年は初めて小平グラウンドが公式リーグ戦に使用され、その意味でも記念すべき年となる。

商大は浅枝、森田、小西、枝村が負傷や病気のため若い予科１年生の起用をはかる。この新人群が後年の黄金時代を築くことになる。ただ部員が 30 名を越す大所帯となって全員が試合に出る機会も少なくなり、部の運営・練習方法などに新たな工夫が必要となった。一方、昨年度の優勝で部員の自信が高められ、商大サッカー部の伝統がようやく芽生え始めてきた。

翌年、学期末試験中に 2. 26 事件が起き世情が騒然としたが、部生活には影響を与えなかった

昭和 11 年度 （1936）

★主将：浅枝彦太郎（本 3）/ 委員長：重見敏之（本 2）
　予科主将：二階堂晴三（予 3）/ 予科委員長：米山大三（予 3）
★最高学年：荒井文雄 / 角田 昇 / 田島輝重 / 森田照之
★新入部員：折下 章 / 片山光夫 / 鈴木英二 / 松岡義彦 / 茂木利孝 / 大上戸 / 桜井
　　宮城 / 渡辺

荒井・浅枝・角田・田島・森田

【試合メンバー】

本３　浅枝・荒井・角田・森田　　本２　大掛・鈴木・林田・村井　　本１　後藤虎・小西
予２　金井・高橋・早野・吉沢　　予１　片山

【戦績】　関東１部：５位　２勝３敗

早稲田	慶応	農大	東大	文理
○ 6 - 4	● 0 - 4	○ 3 - 2	● 0 - 3	● 2 - 7
9/26 神宮	10/4 東高笹塚	11/1 東大本郷	11/8 明治和泉	11/28 明治和泉

【順位】１ 早稲田　２ 慶応　３ 文理　４ 東大　５ 商大　６ 農大

【記事】

ベルリン五輪に主力選手を多数送った早稲田の留守部隊を初戦で破り、
農大に逆転辛勝し、１部に残る。

昭和 12 年度 （1937）

★主将：鈴木 彰（本 3）/ 委員長：重見敏之（本 3）
予科主将：吉沢貞雄（予 3）/ 予科委員長：堀尾貞一（予 3）
★最高学年：浅田英三 / 大掛隆久 / 林田 毅 / 村井恒典
★新入部員：居川達一 / 藤塚亮策 / 水島 行 / 宮沢 力 / 村木杉太郎 / 山田久寧
岡田 / 栗原 / 清水和 / 渋谷 / 建部 / 渕上 / 根本 / 山形

浅田・林田・大掛
重見・村井・鈴木

【試合メンバー】

本３	大掛・鈴木・林田・村井	本２	後藤虎・小西	本１	菅瀬・二階堂晴
予３	金井・高橋・早野・吉沢	予２	片山・桜井・松岡		

【戦績】 関東１部：最下位 ０勝５敗 → 関東２部 降格

東大	明治	早稲田	慶応	文理
● 1 - 4	● 0 - 2	● 0 - 4	● 0 - 7	● 2 - 4
10/4 神宮	11/4 東大本郷	11/13 東高笹塚	11/20 神宮	11/27 神宮

【順位】１ 慶応 ２ 東大 ３ 早稲田 ４ 明治 ５ 文理 ６ 商大

【記事】

初戦の東大との試合を病気療養中の長瀬がそっと観戦し 、“ちっとも走ってないじゃないか”と嘆いていた由。いくばくもなく長瀬倒るの悲報は、彼を親しく知る我々本科生に大きな衝撃を与えた。残りの４戦を何とかものにしようとまさにジタバタしたが、焦りの方が先に立ったのか、力不足か、２部転落という結果になってしまった。本３がダラシなかったからという批判も敢えて受けよう。

昭和 13 年度 （1938）

★主将：後藤虎雄（本 3）/ 委員長：米山大三（本 2）
　予科主将：鈴木英二（予 3）/ 予科委員長：折下 章（予 3）
★最高学年：岩崎寛貞

村木・金井・片山・藤塚・青木・山田久・池尾・清水睦・居川・吉岡・堀尾・折下・松岡
山本・橋本・瀬藤・石割・吉沢・三觜・萩原・水島
渕上・早野・菅瀬・後藤虎・岩崎・米山・狩森・二階堂晴・茂木

【試合メンバー】

FW　金井（本 1）・清水（本 1）・片山（予 3）・桜井（予 3）・松岡（予 3）・橋本（予 1）
BK　岩崎（本 3）・後藤虎（本 3）・二階堂晴（本 2）
　　荒川（本 1）・早野（本 1）・堀尾（本 1）・鈴木（予 3）
GK　吉沢（本 1）

【戦績】　関東２部：優勝　５勝０敗　→　関東１部 昇格

千葉医	拓大	慈恵	立教	法政
○ 5 - 2	○ 6 - 1	○ 4 - 1	○ 2 - 0	○ 5 - 1
10/3 慈恵医大	10/23 慈恵医大	10/30 青山師範	11/6 青山師範	11/13 青山師範

＊他校の順位不詳

【記事】

前年は全敗して２部に落ちたが、今シーズンは二階堂・米山がチーム団結の支えとして、また早野・吉沢の BK 陣、金井・片山・清水・松岡の FW 陣、彼らレギュラー諸君のめざましい活躍で１部復帰を果たすことができた。初戦の千葉医大戦で、フルバックを務めた主将の後藤がオウンゴールで先制点を与えてしまった苦い記憶は、今は懐かしい思い出として残っている。ただ活躍したメンバーのうち、あるいは戦場に倒れられ、あるいは不幸にも病に臥されたことはまことに惜しみても余りあり、筆舌に尽くし難い。

昭和 14 年度 （1939）

★主将：二階堂晴三（本 3）/ 委員長：米山大三（本 3）
予科主将：水島 行（予 3）/ 予科委員長：藤塚亮策（予 3）
★最高学年：池尾隆二 / 狩森正雄 / 小西正夫 / 菅瀬十朗

狩森・池尾・米山・二階堂晴・菅瀬

【試合メンバー】

FW 菅瀬（本 3）・金井（本 2）・清水（本 2）・片山（本 1）・松岡（本 1）・桜井（本 1）

BK 二階堂晴（本 3）・荒川（本 2）・早野（本 2）・堀尾（本 2）・鈴木（本 1）・渕上（予 3）

GK 吉沢（本 2）

【戦績】 関東１部：５位 １勝２分２敗

慶応	東大	早稲田	明治	農大
● 1 - 7	△ 1 - 1	● 0 - 5	○ 4 - 2	△ 1 - 1
10/1 神宮	10/8 東大	11/5 神宮	11/19 東大	11/25 東伏見

【順位】１ 慶応 ２ 早稲田 ３ 東大 ４ 明治 ５ 商大 ６ 農大

【記事】

当時のサッカーの大きな課題は、何といっても３B システムの導入であった。
サッカー先進国で開発されたこのシステムは、上位各チームが競って採用し、急速に普及した。
それまでは中盤のサイドハーフは相手方のインナーをマークし、終盤はウイングをマーク。
このため中盤と終盤の分かれ目の引き継ぎから起こる FB とのマークチェンジのズレが、ともすると失点につながるトラブルを起こしていた。しかしこの３B システムでは、サイドハーフはインナーフルバックはウイングを終始マーク。センターハーフは下がって相手 CF をマーク、また両サイドハーフは進んで攻撃に参加するという合理的な戦法で、練習もこの新しいシステムのマスターが最大の課題であった。そして、ひと試合ごとに成果を上げていった。

昭和 15 年度 （1940）

★主将：早野広太郎（本 3）/ 委員長：折下 章（本 2）/ 会計委員長：吉田寅彦（本 3）
予科主将：青木育郎（予 3）/ 予科委員長：瀬藤俊雄（予 3）
★最高学年：荒川守之助 / 石割知之 / 金井雄吾 / 清水睦美 / 高橋道太郎 / 堀尾真一 / 吉沢貞雄

金井・早野・吉田・清水
吉沢・荒川・高橋・堀尾

【試合メンバー】

FW　金井（本 3）・清水（本 3）・吉田（本 3）・片山（本 2）・山本（本 2）・松岡（本 1）・土屋（予 3）
BK　早野（本 3）・荒川（本 3）・鈴木（本 2）・渕上（本 1）・松浦（予 1）
GK　吉沢（本 3）

【戦績】 関東１部：２位　３勝２敗

東大	慶応	早稲田	文理	明治
○ 1 - 0	● 1 - 3	○ 2 - 1	● 2 - 4	○ 4 - 0
10/6 神宮	10/19 神宮	10/27 御殿下	11/10 東伏見	11/17 御殿下

【順位】 1 慶応　2 商大 & 早稲田　4 東大 & 文理　6 明治

【記事】

本年度は、我がサッカー部の歴史の中でも特筆すべき年であった。
関東１部のリーグ戦で、早慶東明文の強豪に伍して善戦し、優勝の慶応に次いで２位を早大と分け合ったのである。最上級生が９人、２年生以下にも松岡・松浦をはじめとする優秀な選手が多数いて、部員総数も 50 名を越す大世帯であったことが、この好成績の最大の要因といえる。
卒業即軍隊生活ではあったが、楽しい学生生活が送れたのは、まだ米国との戦争が始まらず、日本国内に多少の余力が残っていたせいであろう。

昭和 16 年度 （1941）

★主将：鈴木英二（本 3）/ 委員長：折下 章（本 3）/ 会計委員長：山田久寧（本 2）
予科主将：太田賢三（予 3）/ 予科委員長：古賀文之介（予 3）
★最高学年：片山光夫 / 堀尾真一 / 松岡義彦 / 茂木利孝

折下・鈴木・松岡
片山・茂木

【試合メンバー】

FW 片山（本 3）・松岡（本 3）・山本（本 2）・土屋（本 1）・永倉（予 1）
BK 鈴木（本 3）・村木（本 2）・瀬藤（本 1）・太田（予 3）・古賀（予 3）・松浦（予 2）
GK 居川（本 2）

【戦績】 関東１部：４位 １勝２分２敗

東大	慶応	早稲田	文理	立教
△ 0 - 0	● 1 - 2	● 0 - 4	○ 2 - 0	△ 0 - 0
9/28 神宮	10/4 神宮	10/19 神宮	10/25 神宮	11/2 日吉

【順位】 1 東大 & 早稲田 3 慶応 4 商大 5 立教 6 文理

【記事】

第１戦 vs 東大：前半は互角に戦うもハーフタイム直前に村木が蹴られてほとんど動けなくなり、後半から松岡を HB に下げ、執拗に相手を潰して引き分けに持ち込む。第２戦 vs 慶応：前半は FW が快調に相手を圧倒し土屋のヘディングで先制点を奪うも、後半ラスト近くに２点入れられ涙をのむ。第３戦 vs 早稲田：夜来の雨でグラウンドが滑り、風も強く、終止押されて惨敗する。第４戦 vs 日大文理：終始攻勢を続け圧勝。第５戦 vs 立教：双方凡戦に終始し引き分ける。

12 月 8 日、太平洋戦争に突入。激動の世界の幕をあける。
多くの OB が命を落とされて哀惜の念に堪えない。

昭和 17 年度 （1942）

★主将：村木杉太郎（本 3）/ 委員長：藤塚亮策（本 3）/ 会計委員長：山田久寧（本 3）
予科主将：松浦 巌（予 3）/ 予科委員長：西内硯男（予 3）
★最高学年：居川達一 / 水島 行 / 宮沢 力 / 山本孝次

山田・藤塚・山本
村木・水島・居川・宮沢

【試合メンバー】

FW　山本（本 3）・瀬藤（本 2）・土屋（本 2）・安田（本 1）・永倉（予 2）
BK　水島（本 3）・宮沢（本 3）・村木（本 3）・太田（本 1）・鷲埜（本 1）・松浦（予 3）
GK　居川（本 3）

【戦績】 関東１部：最下位（立教と同率） １勝１分３敗 → 関東２部 降格

早稲田	東大	慶応	立教	明治
○ 4 - 2	● 0 - 5	● 0 - 5	△ 1 - 1	● 1 - 4
4/29 神宮	5/17 一高駒場	5/23 神宮	6/6 神宮	6/21 ?

【順位】 1 東大 2 早稲田 3 明治 4 慶応 5 立教 6 商大
★最下位決定戦：vs 立教 ● 0 - 2 6/28 於東大御殿下

【記事】

昭和 17 年に入ると戦時色も深まりつつあり、大学の卒業は 9 月 30 日に繰り上げられる。これに伴い毎年秋に行われていたリーグ戦が、春開催となった。３月末から合宿に入り３試合ほど練習試合をして４月 29 日からリーグ戦が始まるという、慌ただしい空気のうちに部生活が進んでいった。東京に空襲警報が初めて出された４月 19 日に明大と練習試合をしたのも思い出のひとつである。初戦の早大戦では先制を許したが、FW 永倉がハットトリックを決めて逆転勝利。しかし、第２戦以後 FW 山本と HB 松浦が病気で欠場し、ベストメンバーが組めず惨敗が続く。立教との最下位決定戦にも破れ２部に転落することになったことは、先輩後輩に対して誠に申し訳ないことであったと今でも無念さがこみ上げてくる。

昭和 18 年度 （1943）

★主将：前期 瀬藤俊雄（本 3） 後期 太田賢三（本 3）
マネージャー：前期 西内硯男（本 2）） 後期 西内硯男（本 3）
★最高学年：前期 土屋五郎 後期 青木育郎 / 安田興三郎 / 鷲埜和夫
・・注）修業年限の６ヶ月短縮に伴い、春に繰り上げられたリーグ戦の終了時点で主将は交代した。

【試合メンバー】
FW 瀬藤（本 3）・土屋（本 3）・安田（本 2）・永倉（予 3）・奥村（予 3）
BK 太田（本 2）・鷲埜（本 2）・金原（本 1）・松浦（本 1）・高柳（予 2）
GK 加藤春（本 3）

【戦績】 関東２部：優勝 ３勝０敗 → 関東１部 昇格

法政	農大	東工
○ 7 - 0	○ 4 - 0	○ 5 - 1
5/2 小平G	5/15 小平G	5/23 元住吉農大

＊戦時下のため参加できたのは４校のみ / 他校の順位不詳

【記事】
春のリーグ戦は圧倒的な力で優勝し、１部復帰の目標を達成することができた。
10 月 2 日、文科系学生の徴兵猶予の特典は全面的に停止され、学園は俄かに戦時色が濃くなった。
10 月 21 日には、関東大学リーグ戦が行われた神宮競技場（現国立競技場）に於いて、
折からの豪雨をついて「出陣学徒壮行会」が行われた。運動部に対しても種々の制約が加えられ、
先ずバレー、ホッケー、野球等が禁止され、続いてラグビーを除く、その他の外来スポーツが
禁止された。サッカー部は 18 年冬に「滑空班（グライダー部）」として転身し、再び球を蹴る日に
備え体力増強につとめた。

部の存続については、松本大先輩をはじめ酉松会先輩諸兄と
再三にわたる熱心な議論が重ねられたが、部員は続々と入営し、
また勤労奉仕に駆り出される等、チーム編成ができなくなり、
部の存続は事実上不可能となった。戦場に赴いた先輩に対して
我々銃後に残った者は彼らが大切に育ててきた青春の拠り所を
失くしてしまったという悔恨の情を拭うことができなかった。
そして、先輩の戦死の報を聞くたびに胸の痛みを覚えた。

昭 18 年 春

安田・西内・松岡・高橋三善・松浦・川端・奥村・荒川・加藤春・永倉・金原
鷲埜・床宿・土屋・瀬藤・太田・高柳

昭和 19 年度 （1944）

学徒動員により学部学生の大半は入営してしまい、予科校舎は陸軍電波学校に接収されたため、学生は国立の学部、専門部の校舎に集中した。従って予科の一橋寮も 19 年春に専門部講堂を寮に改造して移転することになり、寮生は隊伍を組んで小平の寮を去り、国立まで徒歩で移動した。運動部の練習の本拠は国立の陸上競技場と野球場となったが、一般の学生も新入生も入営前の貴重な時間を運動部の活動に割こうという雰囲気は全くなかった。練習に集まる者は予科で球を蹴った者ばかりで、それも球を蹴ることは許されず、ランニングや柔軟体操程度で意気は全く上がらなかった。校内でも軍人の姿が見受けられるようになり、夏休みを過ぎる頃になると本格的な勤労動員が行われ、学校生活も部活動も完全に停止した。

９月、東京商科大学は「東京産業大学」に改称。
すでに 18 年に戦局の悪化から予科はさらに６ヶ月修業年限が短縮されて２年間となり、
10 月 1 日以降に入営した者は１年間の課程を履修したものと見なされ、進級が認められていた。
そして年末になるや東京も B29 の爆撃や艦砲射撃にさらされ、我々の会員も多数被災した。

昭和 20 年度 （1945） 終戦を迎えて

満州事変から 10 年近くにわたる戦争も「終戦の詔勅」と共に終結をとげ、
戦場に銃をとった兵士たちは続々と帰国してきた。市中にはカーキ色の軍服を着た復員兵が溢れ、
爆撃による焼跡には闇市が立ち、街はにわかに活気がよみがえる。しかし社会環境はまさに無法
状態で、警察力は無に等しく暴力団が幅をきかし、進駐軍によってようやく秩序が保たれていた。
進駐軍物資（烟草・チョコレート・缶詰等）は高値で取引され、GHQ・RTO・PX など見慣れない
標識が散乱した。ボロをまとった戦災孤児がうろつき駅や地下道には浮浪者が充満し、夜になれば
街角には女たちが進駐軍相手に春をひさぐといった有様であった。都内に焼け残った主要な施設は
殆ど接収され、“OFF LIMIT” の看板は我々に敗戦を否応なく印象づけた。懐かしい神宮競技場も
中をのぞくことすらできなかった。

陸軍電波学校に接収されていた小平の予科校舎は黒い迷彩が施され、
周辺の松の大木は切り倒されたものも多く、グラウンドには探照灯等の兵器が放置され、
反射鏡の破片が散乱し、とても練習ができる状態ではなかった。周囲の雑木林も昔日の面影はなく
林の中に飛び込んだボールを探しに行く時に悩まされた女郎蜘蛛も住み家を追われ、どこかに姿を
消してしまった。我々が戦前に青春を楽しんだ、国木田独歩の『武蔵野』に書かれた風情は全く
失われ、荒涼としていた。在学中に戦線に駆り出された前後５年分くらいの学生が、一時に国立の
校舎に帰ってきたために、ただでさえ少人数の学園はたちまち超満員となり、かなり早く学校へ
行かないと席も取れず、長い間講義に飢えていた学生が廊下にまで溢れ出ていた。

終戦後２～３ヶ月経過する頃、虚脱状態から抜け出すように運動部復活の声が出始め、
練習場と用具の確保に各部は苦労したが、サッカー部はようやく陸上部の部室の一部を確保し、
国立の陸上競技場で練習を開始した。今から考えると想像できないような苦労を重ねたが、
太陽の下でスポーツをすることは何物にも代えがたい喜びであった。しかし、この戦争は個人の
境遇も大きく変え、永久に学園に、グラウンドに戻らなかった友人が少なからずいたことは、
はなはだ心残りであった。

昭和 21 年度　(1946)

★主将：松浦 巌（本 3）/ マネージャー：佐藤裕之（本 2）
★最高学年：奥村一郎 / 加藤春樹

【試合メンバー】

FW　奥村（本 3）・小島（本 2）・佐藤裕（本 2）・鈴木哲（本 2）・永倉（本 2）・若杉（予 3）
BK　松浦（本 3）・蛯子（本 2）・加藤省（本 2）・外岡（本 2）・高柳（本 2）
GK　加藤春（本 3）・森重（本 1）

【戦績】　関東１部：５位　１勝４敗

早稲田	東大	文理	慶応	立教
● 1 - 3	● 0 - 8	● 1 - 2	● 0 - 5	○ 2 - 0

＊全試合 御殿下 G / 試合日不詳

【順位】１ 早稲田　２ 東大　３ 文理　４ 慶応　５ 東産大　６ 立教

【記事】

戦後初の「関東大学リーグ戦」は、神宮競技場が進駐軍に接収されていたため、
東大の御殿下グラウンドで再開された。我が部はいずれの試合も善戦するが、得点に結びつかず、
守備のもろさから勝ちを失う。しかし２部降格をかけた最後の立教戦は優勢のうちに進み、
久しぶりの快勝で１部に留まることができた。

終戦後わずか１年でリーグ戦が復活したことは驚くべきことであったが、
各校はメンバーの編成に非常に苦労したようだ。戦争の長い間のブランクを埋めるため
大学院に籍を置いた学生も多かったが、今年度は大学院在学生も出場することができた。

我が校は他校に比し質量とも劣勢であったため、松浦主将の発案で陸上競技部の部室の２階を借り、
９月中旬から約１ヶ月の合宿を行った。ガラス戸のガラスがあちこち割れていて、
雨が吹き込むのには閉口したが、戦力の向上とチームワークの養成には大いに役立った。
食料はサツマイモを主体にしたもので絶えず飢餓感に襲われていたが、弾丸も飛んでこず
空襲もないグラウンドで球が蹴れるという喜びは、すべての困難を克服していった。

昭和 22 年度　(1947)

★主将：永倉真平（本 3）/ マネージャー：佐藤裕之（本 3）
★最高学年：加藤 省 / 小島 壽 / 鈴木哲夫 / 外岡諒三郎 / 高柳 晋

後列　森重・松本・森
加藤省・鵜飼・高柳
蛯子・高橋敬・鈴木哲
中列　堤・永倉
前列　佐藤裕・吉沢・木滑
石川・外岡

【試合メンバー】
FW　鈴木哲（本 3）・永倉（本 3）・森（本 1）・吉沢（予 3）・丸山（専 3）
BK　加藤省（本 3）・佐藤裕（本 3）・高柳（本 3）・松本（予 3）・四宮（予 2）
GK　森重（本 2）

【戦績】　関東１部：最下位　０勝５敗　→　関東２部 降格

早稲田	慶応	東大	文理	千葉医
● 0 - 12	● 2 - 4	● 0 - 7	● 0 - 5	● 1 - 2

＊全試合 御殿下 G / 試合日不詳

【順位】１ 早稲田　２ 慶応　３ 東大　４ 文理　５ 千葉医　６ 商大

★6 月 29/30 日、昭和 18 年から中断していた「三商大戦」が復活：
vs 大阪商科大学 ○ 5 - 0　/　vs 神戸経済大学 ● 0 - 8　於西宮

注）大阪商科大学は昭和 24 年に創設された「大阪市立大学」に編入され、
神戸商業大学は昭和 19 年に「神戸経済大学」と改称した後、昭和 24 年「神戸大学」に包括される。

【記事】
東京産業大学から旧名の「東京商科大学」に戻る。
戦後の急激なインフレと政治的不安定による社会の混乱は、フルメンバーによる練習の継続を益々困難にし、また中核的存在であった RH 松浦の卒業した穴は攻守に弱点となり、松本合宿で病に倒れた LB 外岡の欠場と共に大量失点につながった。試合メンバーはその都度変わり、予科生・専門部生の出場により、やっと試合ができるという有様だった。このため先輩の努力に報いることができず、戦後わずか２年にして２部に転落することになった。

昭和 23 年度　(1948)

★最高学年：蛯子義父 / 森重利直

【試合メンバー】

FW　石川（本 1）・松本（本 1）・渡辺俊（本 1）・井田（予 3）・鵜飼（予 3）

BK　蛯子（本 3）・森（本 2）・小林（予 3）・篠宮（予 3）・吉沢（予 3）・堤（予 2）・針谷（予 2）

GK　森重（本 3）・木滑（予 3）・高橋敬（予 2）

【戦績】　関東２部：最下位　０勝５敗　→　関東３部 降格

法政	立教	日医	慈恵	中央
● 0 - 2	● 0 - 7	● 0 - 1	● ?	● ?
10/10	10/17	10/24	11/6	?

＊全試合 小石川運動場

【順位】１ 立教　２ 法政　３ 中央　４ 慈恵　５ 日医　６ 商大

【記事】

前年のレギュラー部員８名が卒業してしまったので技量も低下し、部員数も極度に減少して、わずか３～４名の本科生と８名の予科生とで辛うじてメンバーを揃え、試合に臨むという始末。この年はアルバイト、食糧難など経済的社会的悪条件も重なって、全員そろって練習することも極めてまれであった。それどころか試合のたびに集まった顔ぶれを見た上でその都度ポジションを決めるという有様だった。従って誰がキャプテンであったかも必ずしも明確ではなく、いわば主将不在の不毛の年度で、一時は部の存続すら危ぶまれる最悪の事態に立ち至った。しかし予科生が主体となり、よく耐え、よく忍んでリーグ戦を戦い抜いたので、これ以上弱体化することはなく、翌年に飛躍の可能性をつないだ。

昭和 24 年度　(1949)

★主将：渡辺俊夫（本 2）

★最高学年：森 一美

【試合メンバー】

FW　石川（本 2）・松本（本 2）・渡辺俊（本 2）・井田（本 1）・富山（不詳）・相川（不詳）

BK　小林（本 1）・吉沢（本 1）・堤（予 3）・針谷（予 3）・石井弘（新 1）

GK　高橋敬（予 3）

昭和 24 年 10 月 15 日　３部秋季リーグ戦の開会式

左列　渡辺俊・松本・吉沢・針谷・石井弘
右列　田原・石川・井田・堤・小林・高橋敬

【戦績】　関東３部：優勝　７勝０敗　→　関東２部 昇格

国学院	日大	東歯	東工	駒沢	紅陵	専修
○ 2 - 1	○ 2 - 0	○ 3 - 2	○ 1 - 0	○ 4 - 0	○ ?	○ ?
10/15	10/22	10/29	11/5	11/12	11/19	11/26

＊試合会場と
他校の順位不詳

【記事】

本年より学制改革が行われ、６：５：３：３ から ６：３：３：４ に移行し、
それに伴い東京商科大学は「一橋大学」に改称された。

新制１年生が４名入部したが、病気休学者もいて、昨年同様メンバーを集めるのに苦労したが、高校時代の経験者である富山・相川両君に臨時出場を要請した結果、ようやくリーグ戦のためのフォーメーションを組むことができた。学部・予科・新制・臨時メンバーと従来あるいは将来共に到底考えられない混成チームとなったが、３部転落の憂き目を何とか晴らしたいという全員の猛烈なファイトが盛り上がり、５戦５勝２不戦勝の戦績をあげ、ついに待望の２部昇格を果たすことができ、全く感無量の一言に尽きた。特に３部の中にはヤクザ風の者もおり、試合を投げてグラウンドに座り込む奴もいて、全くサッカーを侮辱するものと憤慨に堪えず、３部脱出は、一橋サッカー部のプレスティッジの為にもよかったと思った。

昭和 25 年度　(1950)

★主将：渡辺俊夫（本 3）　/ マネージャー：石川正和（本 3）
★最高学年：松本由之

【試合メンバー】
FW　石川（本 3）・松本（本 3）・渡辺俊（本 3）・井田（本 2）・斎藤（新 2）・高田菊（新 2）
BK　小林（本 2）・吉沢（本 2）・針谷（本 1）・堤（本 1）・田原（新 2）
GK　高橋敬（本 1）

【戦績】　関東２部：４位　２勝３敗

慈恵	千葉大	日医	農大	明治
● 0 - 5	● 0 - 3	○ 5 - 0	○ 3 - 1	● 0 - 7
10/7 東大	10/14 八幡山	10/29 武蔵野	11/5 東大	11/18 武蔵野

＊他校の順位不詳

★昭和７年に始まった「三商大戦」は、学制改革で大阪商科大学がなくなったため一旦幕を閉じる。

【記事】
食料・衣服等を始めとする社会環境は、本年に至りようやく安定の兆しが見え始めた。
それにつれて部員数も増加し、総勢 24 名の大世帯になって部活動もやっと軌道に乗った。従って久方ぶりの大人数の夏季合宿は、前年度の２部昇格もあり活気に満ちたもので、グラウンドに出たボールの数はここ数年ぶりに多かった。特にこの合宿で記憶に残っているのは有力メンバー２名が部をやめたいと申し出て、長時間にわたり無い頭脳を絞り哲学論、人生論を戦わした末、ようやく部に踏み留まることに決定し、無事合宿の成果をあげたことである。しかしリーグ戦になると、２部には強豪が多く２勝３敗と奮わなかったが、全員ベストを尽くした結果であり、今後の発展の礎ができたと思う。

昭和 26 年度　(1951)

★主将：吉沢弘泰（本 3）/ マネージャー：篠宮 清（本 3）
★最高学年：井田登也 / 鵜飼 質 / 木滑 勇 / 小林達夫

【試合メンバー】
FW　井田（本 3）・斎藤（新 3）・高田菊（新 3）・高末（新 2）・宮田（新 2）・高田勝（新 1）
BK　吉沢（本 3）・篠宮（本 2）・堤（本 2）・針谷（本 2）・石井弘（新 3）・田原（新 3）
GK　高橋敬（本 2）・田中（新 2）

昭和 26 年 6 月 18 日
三商大戦 vs 神戸 ● 0 – 3 於 武蔵野サッカー場
大阪市立大学（旧大阪商科大学）は不参加

【戦績】 関東２部：4 or 5 位　３勝１分２敗

法政	日医	東工	慈恵	千葉大	農大
● ?	○ 5 - 0	● ?	△ 2 - 2	○ ?	○ ?
10/13	10/21	10/28	?	11/18	11/23

＊主な会場は武蔵野サッカー場
他校の順位不詳

★「三商大戦」が復活するが、参加は神戸大学のみで大阪市立大学は昭和 28 年まで不参加。

【記事】

最上級生の責任ある立場となって話し合ったことは、技術面での欠陥は、気力と相手を上回る動きとチームワークで補おうということであった。練習は１日おき、午後１時半から日没まで、国立のグラウンドで行った。日曜は練習マッチとして OB 戦をできるだけ組み、実戦と先輩を頼りにチーム力をアップするようにした。当時の食糧事情は、麺類とコッペパンはあったが、米飯は配給制であり、各自が袋に入れて合宿に参加したと思う。

メンバー編成は色々苦労したが、両ウイングに俊足の井田・高木・高田勝、CF にシュート力のある高田菊、両インナーはキープ力のある宮田・斎藤、両サイドハーフは活動量のある吉沢・田原、CH と両バックは堅実型の篠宮・堤・石井、GK は長身の高橋という布陣に決めた。吉沢主将が今でいうゲームメーカーで、精力的に駆け回っていたのが印象に強い。

いよいよ本番を迎えた秋のリーグ戦。グラウンドは三鷹の武蔵野サッカー場が主で、土のグラウンドとしてはよく整備されていたが、風が吹くと砂塵が舞い上がり、ひどかった。我がチームは“FW はボールと一緒にゴールに飛び込め、バックとキーパーは体を張ってゴールを死守せよ”ということで、90 分間駆け回ることを武器に戦った。結果は力足りず４位か５位に終わる。責任者として数々の反省が残ったが、全員が一生懸命戦い抜いたという清々しさも残すことができた。これで卒業する２人と OB も一緒に松本先輩のお宅でお酒をご馳走になったが、１年間の疲れがドッと出て、２人とも翌朝までダウンしてしまったことを思い出す。

昭和 27 年度　(1952)

★主将：堤 光義（本 3）/ GM：斎藤 隆（新 4）/ マネージャー：高橋敬蔵（本 3）
★最高学年：針谷 操（本 3）/ 石井弘志（新 4）/ 高田菊夫（新 4）/ 田原洋二（新 4）

石井弘・高田菊・田原・斎藤
堤・針谷・高橋敬

【試合メンバー】

FW　斎藤（新 4）・高田菊（新 4）・高末（新 3）・宮田（新 3）・石井徹（新 2）・橋本（新 1）
BK　堤（本 3）・針谷（本 3）・石井弘（新 4）・田原（新 4）・神代（新 3）・志摩（新 1）
GK　高橋敬（本 3）

【戦績】　関東２部：４位　２勝１分３敗

農大	青学	東工	法政	千葉大	慈恵
○ 2 - 1	● 0 - 1	● 0 - 2	● 1 - 3	△ 2 - 2	○ 2 - 1
10/12 武蔵野	10/19 武蔵野	10/26 武蔵野	11/9 武蔵野	11/15 東大	11/23 武蔵野

【順位】１　青学　２　法政　３　東工　４　一橋　他校の順位不詳

【記事】

この年から、ようやく小平分校のサッカー専用グラウンドで練習できるようになる。
また本年度は、旧制大学最後の本科３年生と新制大学の４年生が共に最高学年生となる珍しい年であった。両者が卒業する来年以降は、新制の４学年生だけとなる。

昭和 27 年 春　国立からグラウンドを小平へ移した時の OB 戦

後列　？・福江・？・高田勝・宮田・高橋・筑井・松丸・中岡・橋本・仲沢・
中路・石原・佐竹・嶋田・大石・志摩

中列　田中・高末・森・山下・神代・石井徹・高田菊・石井弘・馬場

前列　加藤省（昭 23 卒）・高柳（昭 23 卒）・吉沢（昭 16 卒）・二階堂晴（昭 15 卒）・吉田（昭 16 卒）・
松浦（昭 22 卒）・吉沢（昭 27 卒）・堤・高橋敬

昭和 27 年度 新入生

橋本・桃井・志摩・福江・筑井
松丸・石原・高橋・中岡

昭和 28 年度 （1953）

★主将：神代祥男（4）/ マネージャー：森 康全（4）
★最高学年：高末 隆 / 田中豊二 / 宮田幸三 / 山下誠一

森・山下・神代
宮田・高末・田中

【試合メンバー】

FW 高末（4）・宮田（4）・石井徹（3）・石原（2）・中岡（2）・橋本（2）・日方（1）
BK 神代（4）・高末（4）・宮田（4）・山下（4）・高田勝（3）・石原（2）・志摩（2）
馬場（2）・福江（2）・松丸（2）・桃井（2）・佐竹（1）・嶋田（1）・中路（1）
GK 田中（4）・高田勝（3）

【戦績】 関東２部：５位 １勝５敗 ＊全試合 於武蔵野市民グラウンド

横浜市大	千葉大	法政	農大	東工	青学
● 1 - 4	○ 6 - 2	● 0 - 2	● 0 - 3	● 1 - 2	● 0 - 4

＊試合日・他校の順位不詳

【記事】

昨年のレギュラー陣から７名が卒業したので、技術面もさることながら、精神面と体力面とチームワークで何とかリーグ戦を乗り切ることを目標に、春夏２回の合宿や連日の猛練習を行ってリーグ戦に臨んだ。しかし相手は技術レベルが上回る大学ばかりで力及ばず、１勝をあげるだけに止まり、２部キープの責任だけは何とか果たし、後輩にバトンタッチした。

昭和 29 年度　(1954)

★主将：高田勝巳 (4) / マネージャー：石井 徹 (4) / サブマネージャー：馬場 猛 (3)

仲沢・馬場・林・志摩・日方・中岡・嶋田・ ？ ・中路・中田・岩坂・福江
橋本・ ？ ・松丸・高田勝・石井徹・森下・佐竹・浅井・清水裕

【試合メンバー】

FW　高田勝 (4) ・中岡 (3) ・橋本 (3) ・浅井 (2) ・日方 (2)

BK　志摩 (3) ・馬場 (3) ・福江 (3) ・松丸 (3) ・桃井 (3)

GK　嶋田 (2)

【戦績】　関東２部：５位　２勝４敗

東工	法政	横浜市大	農大	学芸	青学
○ 5 - 4	● 1 - 2	● 2 - 4	● 0 - 4	○ 4 - 3	● 3 - 4

＊試合日・会場・他校の順位不詳

★「三商大戦」が完全復活：vs 大阪市立大学 ● 0 - 2　/　vs 神戸大学 ● 0 - 1　於大阪市立大学

【記事】

春季シーズン最後の三商大戦において、不運も重なったが大阪市大にも敗れたため
秋のリーグ戦はポジションを大幅に変更し、春の不振挽回を期した。しかし攻撃力に比べ守備が
弱く、完敗を喫した農大戦以外は点を取ってもすぐ取り返されるパターンの連続だった。最終戦の
青学戦も２点先行したが、バックスラインを次々と簡単に破られて４点を取られ、必死の反撃も
及ばず破れた。限られたメンバーで戦うため、攻撃力を強くすれば守備が弱くならざるを得ず、
特に志摩を攻撃に使うか守備に使うか、その選択が難しかった。

昭和 30 年度 （1955）

★主将：志摩憲一（4）/ GM：橋本昭一（4）/ マネージャー：馬場 猛（4）
★最高学年：中岡敬雄 / 福江睦郎 / 松丸鉱市 / 桃井昭二

＊三商大戦 優勝
試合メンバー
於小平 G

中田・中路・浅井・佐竹・嶋田・日方
橋本・福江・志摩・馬場・中岡

【試合メンバー】

FW 中岡（4）・橋本（4）・浅井（3）・日方（3）・中田（2）・檜山（2）
BK 志摩（4）・馬場（4）・福江（4）・佐竹（3）・中路（3）
GK 嶋田（3）

【戦績】 関東２部：６位 １勝１分４敗

農大	日大	法政	青学	横浜市大	学芸
● 0 - 1	● 1 - 2	● 0 - 1	△ 1 - 1	● 1 - 2	○ 3 - 1

＊試合日・会場・他校の順位不詳

【記事】

小平グラウンドで行われた三商大戦で、大阪市立大学を４-０で一蹴。関西１部の神戸大学にも数少ないチャンスを生かして２-０で快勝し、復活後、初優勝した。また国公立戦も決勝まで勝ち進み１部の強豪、教育大（現筑波大）と対戦。一歩も譲らず延長戦にもつれ込んだが、惜しくも１点を許し惜敗した。この春の好成績から待望の１部復帰を胸に、練習にも一段と熱が入った。そして迎えた秋季リーグ。初戦の農大戦は、後半の立ち上がりに CK を押し込まれて失点。試合終了間際に PK を得て、キッカー橋本がゴール右隅に低いライナー性のシュートを放つが、相手 GK が指先で弾き出しそのまま負けてしまった。この初戦のつまづきが大きく響き、一橋は勝利を忘れたかのように１点差の敗戦を続け、学芸大戦が唯一の白星、青学大と引き分けるという予想に反した無残な成績で、誠に悔いの残る１年であった。

昭和 31 年度 （1956）

★主将：日方大三郎（4）/ GM：林 祐三（3）/ 主務マネージャー：嶋田英司（4）
★最高学年：浅井浩夫 / 佐竹明和 / 中路 信

最前列ユニ　浅井・中路・佐竹・嶋田

【試合メンバー】

FW　浅井（4）・日方（4）・清水裕（3）・中田（3）・檜山（3）
BK　佐竹（4）・中路（4）・岩坂（3）・大石（2）・酒井（2）・鈴木（2）
GK　嶋田（4）・森下（3）

【戦績】　関東２部：５位　１勝２分４敗

武蔵	法政	日大	日体大	学芸	青学	横浜市大
○ 3 - 1	● 1 - 5	● 0 - 2	△ 2 - 2	● 2 - 3	● 0 - 2	△ 2 - 2
10/14	10/21	11/3	11/11	11/18	11/23	11/25

＊試合会場・
他校の順位不詳

【記事】

この年から関東大学リーグが、１部８校、２部８校となる。
前年度１部昇格をめざして奮闘した７名の先輩を送り出したためチーム力がかなり低下したことは否めない。このため４年生は、春に大量 24 名の新入部員を獲得し今年のリーグ戦を勝ち抜くことと将来の一橋サッカーを担う新人を養成することを２大目標にしたが、リーグ初戦には勝ったものの苦戦の連続で、６戦終わって６位。最終戦の結果次第では下との入替戦も覚悟せねばならぬ事態となるも学芸が破れ５位に踏み止まることができた。この憂鬱な気分を吹き飛ばしてくれたのが 12 月の国公立戦だった。各校とも４年生抜きで行われ、一夏鍛えた１年生部員諸君の活躍も素晴らしく、外語大を４- 0、東工大を５- 0、東大を５- 3 で破り、優勝の栄冠を得た。小金井の霜柱でぬかるむ学芸大グラウンドで、試合に出たレギュラーも応援するサブも、一心同体となって東大を圧倒する様子を見て、これで俺たちも卒業していけるなと感慨深く、今でも懐かしく思い出す。

昭和 32 年度　(1957)

★主将：中田鉄弥（4）/ 副主将：岩坂朔郎（4）　/ マネージャー：林 祐三（4）
★最高学年：清水 裕 / 檜山博隆

高田（昭 30 卒）・？・中田・林・檜山・飯沼・小林・小澤
大石・小杉・小島・三田
酒井・鈴木・古河・岩坂・？・清水裕・韓

【試合メンバー】

FW　清水（4）・中田（4）・檜山（4）・酒井（3）・小野（2）・古河（2）・韓（1）
BK　岩坂（4）・大石（3）・鈴木（3）・小杉（2）・斎藤（2）・田中（2）
GK　村上（1）

【戦績】　関東２部：５位　２勝２分３敗

日大	東大	青学	武蔵	日体大	学芸	上智
● 1 - 2	● 1 - 3	● 0 - 4	○ 3 - 2	△ 2 - 2	○ 1 - 0	△ 1 - 1
10/20 日吉	10/27 日吉	11/3 武蔵野	11/9 東大農	11/16 東大農	11/24 武蔵野	11/30 東大農

【順位】1 日大　2 東大　3 上智　4 青学　5 一橋　6 日体大　7 学芸　8 武蔵

【記事】

５月初旬に主将の中田が膝を捻挫して戦列を離れ、
主将代行の岩坂もリーグ戦中途で足を骨折するという不運なシーズンであった。リーグ戦前の１部との練習試合で農大に 11 失点、慶応に 10 失点、早稲田に９失点で大敗し先行きが心配されたが、第１戦の日大戦では新人のレフトインナー韓が得意のドリブルでバックと GK をかわしてゴール。敗れはしたものの優勝候補の日大と互角に戦い、第２戦以降も２年・３年の活躍で、青学戦以外は善戦・接戦であった。GK に起用された村上は、新人ながら全戦に出場した。

昭和 33 年度 （1958）

★主将：鈴木久弥（4）/ マネージャー：駒井 康（4）
★最高学年：大石 仁 / 酒井敏行

三田・今村・小澤・飯沼・小林・秋山・柿澤・石原・日巻
久保田・土井・高柳・村上・有田・ ？ ・清水邦・笹田
斎藤・鎗田・鈴木久・駒井・小野

【試合メンバー】
FW 酒井（4）・鈴木（4）・小野（3）・古河（3）・三田（3）・高橋（2）
BK 大石（4）・小杉（3）・斎藤（3）・田中（3）・鎗田（3）・韓（2）
GK 村上（2）

【戦績】 関東リーグ２部：４位 ３勝１分３敗

日大	上智	防衛大	青学	武蔵	東大	日体大
△ 2 - 2	○ 2 - 0	● 0 - 3	● 0 - 2	○ 1 - 0	● 0 - 1	○ 2 - 0
10/19 御殿下	10/26 東大農	11/3 御殿下	11/9 御殿下	11/16 御殿下	11/22 小石川	11/30 御殿下

【順位】1 日大 2 東大 3 防衛大 4 一橋 5 日体大 6 上智 7 武蔵 8 青学

【記事】
春の国公立大会は３試合で 15 得点をあげ無失点で優勝し、秋のリーグ戦に大きな期待がかけられた。しかし、上智戦でポイントゲッターの酒井が鎖骨脱臼で離脱。その影響もあって防衛大・青学に為すところなく敗れた。第５戦の東大戦はアジア競技大会（６月に東京で開催）のために新設された「小石川蹴球場」で行われ、しかも有料試合だった。前後半とも優勢で多くのシュートを放ったがゴールを割ることができず、右 CK からの失点で惜敗した。ところで本年は、日本サッカーにとって特筆すべきことが２つあった。１つは我が国初のサッカー専用グラウンド「小石川蹴球場」が造られたこと。もう１つは早大が日本で初めて４-３-３システムを採用したことである。1964 東京五輪以降のサッカーブームの素地は、この年に作られたように思われる。

昭和 34 年度 （1959）

★主将：古河 洋（4）/ 副主将：鎗田良昭（4）/ GM：三田達也（4）/ マネージャー：石原良三（4）
★最高学年：小杉泰夫 / 小野輝夫 / 田中高峯 / 斎藤哲雄

【試合メンバー】

FW 小野（4）・古河（4）・今村（3）・小林（3）・高柳（3）・岡田（1）
BK 小杉（4）・斎藤（4）・田中（4）・鎗田（4）・今村（3）・韓（3）・梅田（2）
GK 村上（3）

【戦績】 関東２部：４位 ２勝２分３敗

日体大	上智	武蔵	成城	日大	東大	防衛大
○ 3 - 0	○ 1 - 0	△ 1 - 1	△ 1 - 1	● 1 - 4	● 0 - 8	● 1 - 6
10/18 東大農	10/25 御殿下	11/1 東大農	11/8 御殿下	11/15 御殿下	11/23 御殿下	11/29 御殿下

【順位】1 東大 2 日大 3 防衛大 4 一橋 5 日体大 6 成城 7 武蔵 8 上智

【記事】

最上級生のほとんどが２年生からリーグ戦に出ている経験者で、加えて大型新人の岡田が入部し前年度に勝るとも劣らない好チームだった。日体大と上智を連破して順調な滑り出しだったが、武蔵と成城に引き分けてからチームのムードが一変。後半の日大・東大・防衛大の３戦は計 18 失点で大敗した。２ヶ月にわたるリーグ７戦を勝ち抜くことの難しさを、嫌というほど味合わされた。

昭和 35 年度 （1960）

★主将：今村秋夫（4）/ GM：日巻久匂男（3）/ マネージャー：小澤純一（4）
★最高学年：飯沼八洲彦 / 韓 英澤 / 小林成古 / 笹田泰正 / 高柳雄一 / 土井 鼎 / 村上信勝

【試合メンバー】
FW 韓（4）・大野（3）・久保田（3）・瀬戸（3）・伊藤（2）・岡田（2）・野上（2）
BK 今村（4）・小林（4）・高柳（4）・土井（4）・梅田（3）
GK 村上（4）

【戦績】 関東２部：６位 １勝２分４敗

日大	日体大	成城	武蔵	上智	東大	防衛大
△ 2 - 2	● 0 - 5	● 0 - 2	△ 0 - 0	○ 2 - 1	● 1 - 4	● 0 - 3
10/15 御殿下	10/22 東伏見	10/29 東伏見	11/6 東伏見	11/13 御殿下	11/19 御殿下	11/26 御殿下

【順位】1 成城 2 防衛大 3 日大 4 東大 5 日体大 6 一橋 7 武蔵 8 上智

【記事】
BK 陣のレギュラーが６名も卒業したので、FW の高柳と小林を BK に下げ、
FW は韓と岡田を中心に、２～３年生の成長に期待した体制となった。高田勝先輩を中心に OB も
チームの弱体化を心配され、橋本昭一先輩（昭 31 卒）が監督に就任した。しかしリーグ７戦の
得失点は５対 17、無得点試合４と得点力の無さが浮き彫りになった。成城大が優勝したが、
各校の実力差があまりなかっただけに悔やまれるシーズンであった。

昭和 36 年度 （1961）

★主将：梅田 清（4）/ GM：秋山和夫（4）/ マネージャー：久保田秀一（4）
★最高学年：大野章雄 / 柿澤光郎 / 韓 英澤（現 川村英夫）/ 瀬戸 泰 / 清水邦男

久保田・柿澤・瀬戸・大野
清水邦・梅田・秋山

【試合メンバー】
FW 大野（4）・瀬戸（4）・岡田（3）・野上（3）・池田（2）
BK 梅田（4）・久保田（4）・清水擴（3）・吉田（3）・石綿（2）
GK 柿澤（4）

【戦績】 関東リーグ２部：７位 ０勝３分４敗

日大	東大	成城	防衛大	武蔵	上智	日体大
● 0 - 3	● 1 - 2	● 1 - 2	△ 1 - 1	△ 0 - 0	● 0 - 4	△ 2 - 2
10/15 東大農	10/21 東大農	10/29 東大農	11/4 東大農	11/12 御殿下	11/18 御殿下	11/25 御殿下

【順位】1 日大 2 東大 3 上智 4 成城 5 武蔵 6 防衛大 7 一橋 8 日体大

【記事】
リーグ戦は１勝もあげることができず日体大と同率で７位となり、改めて７-８位決定戦を行うことになった。最下位は３部リーグの１位チームと入替戦を行う。両チームとも文字通り決死の戦いとなり一進一退を繰り返したが、FW 池田ミドルシュートによる値千金の１点を得て勝利した。まさに薄氷を踏む思いで先輩の遺産である２部の座を守った次第である。

昭和 37 年度 （1962）

★主将：岡田紀雄（4）/ GM：石井暢生（4）/ マネージャー：菊池英輔（4）
★最高学年：伊藤光生 / 韓 英澤（現 川村英夫）/ 清水 擴 / 野上圭一 / 細野宣昭 / 吉田弘司

菊池・吉田・清水擴・細野・岡田・韓・伊藤・野上・石井暢

【試合メンバー】

FW 伊藤（4）・岡田（4）・韓（4）・野上（4）・池田（3）・大橋（3）
BK 岡田（4）・清水擴（4）・細野（4）・吉田（4）・石井光（3）・永山（3）・古川（2）・清水征（1）
GK 森岡（3）・山田（2）

【戦績】 関東リーグ２部：３位 ３勝４敗

東大	農大	成城	上智	防衛大	武蔵	自由
● 0 - 2	○ 3 - 1	● 1 - 4	● 0 - 6	○ 3 - 1	○ 2 - 0	● 0 - 4
10/13 御殿下	10/20 御殿下	10/27 御殿下	11/3 御殿下	11/11 御殿下	11/18 御殿下	11/25 御殿下

【順位】１ 東大 ２ 成城 ３ 一橋・上智・防衛大 ６ 農大 ７ 自由 ８ 武蔵

【記事】

春のシーズンは出足が好調で、国公立大会では積年の宿敵である東大を準決勝で破り、決勝では１部の教育大を破るという大番狂わせを演じ優勝した。戦後の一橋サッカー部の歴史において特筆大書されてよいことと自負している。春夏ともに地方での合宿は行わず練習条件の良い小平グラウンドでやり、特にリーグ戦直前のレギュラー合宿は我々の意欲を示すもので、当時の興奮状態、緊張が今でも伝わってくるようである。残念ながら１部昇格はならなかったが、２部のベストイレブンに選ばれた岡田キャプテンを中心にまとまりがよく、復活した韓や２年の古川、１年の清水など下級生にも大いに助けられた。他校からは体当たりでくる恐い集団と言われた如く技よりも敢闘精神で保っていた泥臭いチームであったといえよう。

昭和 38 年度 （1963）

★主将：池田 致（4）/ GM：斎藤国雄（4）/ マネージャー：中村 肇（4）
★最高学年：石井光雄 / 石綿浩之 / 大橋祥勝 / 永山在紀 / 原賀英明 / 松島源吉
森岡義久 / 菊池英輔

石綿・菊池・永山・大橋・池田・原賀・斎藤・松島・石井光・森岡・中村

【試合メンバー】

FW 池田（4）・大橋（4）・村林（3）・清水征（2）・田中（2）・相良（2）
BK 石井（4）・石綿（4）・永山（4）・原賀（4）・松島（4）・朝来野（3）・古川（3）・斎藤泰（2）
GK 森岡（4）・山田（3）

【戦績】 関東リーグ２部：６位 ２勝１分４敗

上智	防衛大	成城	東大	日体大	自由	農大
● 2 - 4	○ 2 - 0	△ 5 - 5	● 1 - 2	● 1 - 2	● ?	○ 2 - 1
10/6 御殿下	10/20 小平G	10/26 御殿下	11/2 御殿下	11/9 御殿下	11/17 御殿下	11/23 御殿下

【順位】1 日体大 2 上智 3 東大 4 成城 5 防衛大 6 一橋 7 自由 8 農大

【記事】

昨年に続き、国公立大会と三商大戦で優勝。
国公立では教育大が試合日を間違えて不戦敗になり、優勝を拾った。夏は北軽井沢で走ることに重点をおいた一次合宿、小平で組織プレイを主体とした二次合宿を行いリーグ戦に備えた。
北軽井沢では浅間の峰を仰ぎ見ながら、GM 斎藤の冷酷とも思える笛で
徹底したダッシュの練習に汗を流したことが、今となっては良い想い出である。
リーグ戦は１点差に泣く惜敗が多く、雨中の成城大戦は前半大きくリードされるも
後半 FW 大橋と清水の大活躍で引き分け、最終の農大戦では大橋が貴重な決勝点をあげて辛勝。
入替戦という不名誉な大事には至らず４年一同安堵と無念の思いで小平のサッカー生活を終えた。

昭和 39 年度 （1964）

★主将：古川和正（4）/ GM：寺西重郎（4）/ マネージャー：白石治紀（4）
★最高学年：朝来野紀生 / 村林昌二 / 山田充夫

寺西・白石・古川
山田・村林・朝来野

【試合メンバー】

FW 相良（3）・田中（3）・村林（3）・市川（2）・三浦（2）・高峯（1）
BK 朝来野（4）・古川（4）・斎藤泰（3）・清水征（3）・堀江（3）・槇田（2）
GK 山田（4）・栗又（2）

【戦績】 関東２部：７位 ２勝５敗

東大	防衛大	法政	成城	自由	順天堂	上智
● 0 - 1	● 2 - 4	● 1 - 2	● 1 - 3	○ 3 - 1	○ 2 - 1	● 2 - 4
10/31 御殿下	11/？御殿下	11/？御殿下	11/？御殿下	11/？御殿下	12/？御殿下	12/？御殿下

＊初戦以外の試合日不詳

【順位】１ 法政 ２ 順天堂 ３ 上智 ４ 成城 ５ 東大 ６ 防衛大 ７ 一橋 ８ 自由

【記事】

前年のレギュラーが５～６人卒業で抜けたため、春のシーズンはフォーメーション作りが間に合わず、三商大戦は万年ドンジリだった大阪市大が優勝した。攻めと守りの強化を図るため、実力のある朝鮮大学と定期戦を含め３試合を行う。３連敗したが、少しずつ差を縮めることができた。リーグ戦は東京五輪開催のために遅れ 10 月 31 日開始となった。初戦から４連敗したが、ようやく第５戦・６戦と２連勝し、２部の地位を維持した。最終ゲームが終わったのは、12 月中旬の肌寒い日であったと記憶する。

昭和 40 年度 （1965）

★主将：清水征四郎（4）/ 副主将：田中好輔（4）/ マネージャー：堀江正郎（4）
★最高学年：斎藤泰敏 / 相良保彦

前列ユニ　堀江・斎藤・田中・清水征・相良

【試合メンバー】

FW　相良（4）・清水征（4）・伊藤（3）・三浦（3）・高場（2）・高峯（2）・丸山（2）・清水幸（1）
BK　斎藤泰（4）・田中（4）・堀江（4）・有田誠（3）・市川（3）・槇田（3）・松崎（2）
GK　栗又（3）・中澤（1）

【戦績】　関東２部：６位　２勝１分４敗

順天堂	法政	成城	上智	東大	防衛大	農大
● 0 - 3	● 0 - 6	○ 4 - 2	● 0 - 3	△ 1 - 1	● 1 - 2	○ 3 - 1
10/9 駒沢第二	10/16 駒沢第二	10/23 御殿下	10/31 御殿下	11/7 御殿下	11/15 御殿下	11/20 駒沢第二

【順位】1 法政　2 上智　3 東大　4 農大　5 成城　6 一橋　7 順天堂　8 防衛大

【記事】

４年生が５名と少なく試合の中心メンバーであったことから、GM を設ける余裕がなく、主将が練習の笛を吹き、副主将以下の４年生が、これを補佐・代理するという体制をとった。本年の戦績は決して誇れるものではないが、清水征四郎主将の獅子奮迅の活躍で支えられたものであることは特記されるべきであろう。負ければ最下位の可能性大という最終節の農大戦、IR 清水が CF にまわり、右サイドを IR 三浦・OR 高峯で固め、左サイドは OL 相良を IL に、また OL には１年生の清水幸男を起用し、点を取ることに主眼を置いたギャンブルに出た。この作戦が成功し、タイトロープにも似た切ない緊張からの開放感と勝利の美酒を同時に味わえたのである。

昭和 41 年度 （1966）

★主将兼 GM：三浦侯宣（4）/ 副主将：有田 誠（4）/ マネージャー：小林純一（3）
★最高学年：市川彰夫 / 栗又俊二 / 相良保彦 / 槇田元生 / 丸山克久

最前列　丸山・槇田・有田誠・三浦・相良・栗又・市川

【試合メンバー】
FW　三浦（4）・丸山（4）・高場（3）・高峯（3）・土井（1）
BK　有田誠（4）・市川（4）・槇田（4）・馬場（3）・松崎（3）・天野（2）・有田稔（2）
GK　栗又（4）・中澤（2）

【戦績】　関東２部：最下位　１勝１分５敗　→　関東３部 降格

東大	農大	日体大	上智	順天堂	青学	成城
● 0 - 3	○ 3 - 2	● 0 - 3	△ 3 - 3	● 1 - 4	● 0 - 2	● 0 - 3
9/18	9/29	10/2	10/8	10/15	10/23	10/29

＊試合会場不詳

【順位】1 日体大　2 農大　3 成城　4 順天堂　5 上智　6 東大　7 青学　8 一橋
★入替戦：一橋 vs 国士舘（関東３部１位）　● 0 - 4

【記事】
第５戦あたりからチームの調子が落ち、結果は最下位。
３部との入替戦でも国士舘に為す術なく破れてしまった。昭和 39 年の東京五輪以降、
関東大学リーグに加盟する大学が増え、我々の頃は１部から８部まであったが、
２部以上の国立大といえば東大と我が校だけで、それが３部降格という結果になってしまい、
２部を維持してきた先輩及び後輩に大変申し訳なく思った。

昭和 42 年度 （1967）

★主将：高峯文世（4）/ GM：小林純一（4）/ マネージャー：佐藤盛夫（4）
★最高学年：高場恭幸（旧姓可部） / 馬場達夫 / 松崎和夫

高場・小林・高峯・馬場
松崎・佐藤

【試合メンバー】

FW 高場（4）・高峯（4）・清水幸（3）・内村（2）・土井（2）・小島（1）・柴田（1）
BK 馬場（4）・松崎（4）・天野（3）・有田稔（3）・出原（2）・種田（2）・吉川実（2）
渡辺恵（2）・竿代（1）
GK 中澤（3）・高橋（2）

【戦績】 関東３部：３位　３勝２分２敗

関東学院	防衛大	学習院	自由	学芸	千葉大	成蹊
○ 1 - 0	△ 3 - 3	△ 0 - 0	○ 1 - 0	● 0 - 2	○ 2 - 1	● 2 - 3
10/15 学芸	10/22 小平G	11/2 小平G	11/5 学芸	11/12 学芸	11/19 学芸	11/23 成蹊

＊他校の順位不詳

【記事】

前年度、無念にも３部へ転落した１年目であり、悔しさと２部復帰にかける全部員の激しい闘志の中で春先から急ピッチな練習となったが、従来から悩み続けていた基本的な体力、技術力、精神力、高度な戦略と現実のアンバランスに結論を出さないままに、さらに中心選手の故障が相次ぐ中で、リーグ戦に突入せざるを得なかった。結果は３位に終わり、念願の入替戦の出場権を獲得することができず、有田を中心とする後輩に涙の申し送りをすることとなった。

東京都大学サッカーリーグ　Ⅰ期

昭和 43 年度　(1968)

★主将：有田 稔 (4) / 副主将兼 GM：清水幸男 (4) / マネージャー：佐藤哲太郎 (4)
★最高学年：天野四郎 / 鈴木秀美 / 中澤泰二

最前列　天野・清水幸・有田稔・佐藤・中澤・鈴木

【試合メンバー】

FW　清水幸 (4) ・内村 (3) ・岡 (3) ・土井 (3) ・川合 (2) ・小島 (2)

BK　天野 (4) ・有田稔 (4) ・鈴木秀 (4) ・出原 (3) ・種田 (3) ・吉川実 (3) ・渡辺恵 (3)
竿代 (2) ・丸山 (2)

GK　中澤 (4)

【戦績】　東京１部：２位　６勝１分２敗

自由	都立大	学習院	亜細亜	専修	成蹊	武蔵	東工	商船大
● 1 - 3	○ 5 - 1	○ 1 - 0	● 0 - 1	△ 2 - 2	○ 2 - 0	○ 4 - 1	○ 3 - 1	○ 2 - 1
10/6 小平G	10/10 小平G	10/13 小平G	10/20 小平G	10/27 小平G	11/3 小平G	11/10 武蔵	11/17 小平G	11/23 小平G

【順位】１ 自由　２ 一橋　・・ 他校の順位不詳

★関東大会１回戦：一橋 vs 順天堂（千葉県リーグ１位） ● ２ - ３　12/1 於藤沢　→　東京１部 残留

【記事】

本年度は「関東大学サッカーリーグ」の編成替えが実施された年で、1・2部は従来通りだが、3部以下は、東京都・千葉県・神奈川県・埼玉県の地域ごとに4つのリーグが結成される。そして各リーグの1-2位計8チームがトーナメントで争い（以下、関東大会と称す）、上位2チームが関東リーグ2部の7–8位と入替戦を戦う。

前年度「関東リーグ3部」だった一橋は「東京都リーグ1部」からのスタートになった。初戦を落としたが、第2戦の都立大戦では3年生が奮起し、土井が2得点、吉川・岡・種田もゴールを決め快勝した。この試合を契機に、また当時のチームがゲームをやりながら上達したこともあって最終的に2位となり入替戦トーナメントに出場した。1回戦の相手は千葉県リーグ代表で去年まで関東2部だった順天堂。前半押され気味だったが40分にPKをゲット。チーム随一のテクニックを誇る3年の土井にキッカーを託したが惜しくもはずし、前半は両チーム無得点に終わる。後半の立ち上がりに1点先取されるも、31分、39分と執念の反撃により逆転。準決勝進出は確実と思われた。しかし勝利の女神は残り5分に順天堂に微笑み、再逆転されてしまったのである。今でもこの試合を思い出すたびに、悔しさと反省で胸がしめつけられる。なぜ最高責任者の主将がPKを蹴らなかったのか、最後の5分間を守りに徹する指示をしなかったのか、主将としての最後の試合で悔いを残すことになってしまった。

昭和44年度　(1969)

★主将：土井徳秋（4）/ 副主将：吉川 実（4）/ マネージャー：望月公雄（4）
サブマネージャー：矢尾板健二（1）

★最高学年：出原和正 / 内村 透 / 岡 猛夫 / 種田勝正 / 渡辺 恵

内村・渡辺恵・出原・岡
種田・土井・吉川実・望月

【試合メンバー】

FW　内村（4）・土井（4）・川合（3）・小島（3）・柴田（3）

BK　出原（4）・岡（4）・種田（4）・吉川実（4）・渡辺恵（4）
竿代（3）・丸杉（3）・丸山（3）・有吉（1）

GK　吉川敏（3）・本田（3）

【戦績】　東京１部：５位　４勝１分４敗　　＊試合会場は明学・小平Ｇ・自由の３ヶ所 / 試合日不詳

明学	亜細亜	専修	拓大	東工	成蹊	学習院	都立大	自由
△ 1 - 1	○ 1 - 0	● 1 - 4	● 1 - 3	○ 5 - 1	● 0 - 2	● 0 - 2	○ 5 - 2	○ 1 - 0

【順位】１ 拓大　２ 成蹊　３ 学習院　５ 一橋　・・ 他校の順位不詳

【記事】

昨年に続きリーグ戦の前に、当時日本の大学相手に連勝記録を更新中の朝鮮大学と練習試合をした時のこと。同校のグラウンドで朝鮮大生のほとんどが見守る中、２-２の大接戦となった。そのままタイムアップという感じであったが、朝鮮大レフェリーのホイッスルは一向に鳴らず、かなりタイムオーバーしたところで遂に力尽き１点を許すと、すぐに終了のホイッスルが鳴った。武蔵野の陽が落ちる直前であった。秋のリーグ戦は、初戦の明学戦で押しまくりながら追加点を奪えず引き分けたこと、専修大・拓殖大といった新興勢力の大学に破れたことが痛く、関東リーグ復帰の目標は果たせなかった。

昭和 45 年度　(1970)

★主将：小島 収（4）/ GM：柴田 暁（4）/ マネージャー：吉川敏一（4）
★最高学年：宇野哲夫 / 江見吉信 / 川合 哲 / 竿代興志 / 関 榮一 / 本田和夫
丸杉孝三郎 / 丸山清八

【試合メンバー】

FW　江見（4）・川合（4）・関（4）・矢野（2）・松沼（1）・山崎（1）

MF　小島（4）・新福（2）・高垣（1）

BK　宇野（4）・丸山（4）・吉川敏（4）・宮内（3）・湯浦（3）・大江（1）・小山（1）・宮（1）

GK　竿代（4）・本田（4）

【戦績】　東京１部：５位　３勝３分３敗　　＊試合会場は 小平Ｇと自由 / 試合日不詳

専修	拓大	学芸	学習院	成蹊	亜細亜	明学	駒沢	自由
○ 1 - 0	● 0 - 1	△ 1 - 1	△ 0 - 0	● 1 - 3	○ 4 - 1	△ 1 - 1	● 0 - 2	○ 3 - 2

【順位】１ 亜細亜　５ 一橋　・・ 他校の順位不詳

川合・丸山・江見・吉川敏・本田・関
竿代・柴田・小島・宇野

【記事】

大阪万国博覧会が開催されていたこの年、長野県戸狩及び東大検見川グラウンドでの２回に及ぶ夏合宿の後、リーグ戦が９月下旬から 11 月中旬まで行われた。前半は強豪相手に健闘したが、成蹊大に大敗を喫したのが痛く、その後は調子に乗り切れずにズルズルと後退し、関東大会に出場できる上位４校から脱落してしまった。戦術的には４-３-３、４-４-２、さらにはスイーパーを置く１-４-３-２といった守備に重点を置いたシステムが流行し始め、全員守備・全員攻撃が要請されると共に、FW のキープ力・MF の個人技と判断力がものをいう時代が訪れ始めていた。その中で一橋は技術的レベルの立ち遅れが痛感されたが、その割には何とか現状維持で踏みこたえたと心ひそかに思っている。

昭和 46 年度 （1971）

★主将：湯浦俊一（4）/ GM：宮内正敬（4）/ マネージャー：矢尾板健二（3）
★MGR：猿渡啓子（津田塾 2）/ 河野恵美子（武蔵野音大 2）・・ 我が部史上初の女子マネージャー

【試合メンバー】

FW 矢野（3）・杉山（2）・山崎（2）
HB 新福（3）・小山（2）・高垣（2）
BK 宮内（4）・湯浦（4）・大江（2）・宮（2）
GK 笠間（1）

井上・田沼・高垣・松沼・大久保・小島・鍵本・古市・緒方
北出・笠間・太田
杉山・宮内・湯浦・小山・大島

【戦績】 東京１部：４位 ３勝２分２敗

駒沢	明学	青学	亜細亜	自由	成蹊	学習院
△ 0 - 0	○ 2 - 1	○ ?	△ 0 - 0	● ?	● ?	○ 4 - 1
小平G	青学	小平G	小平G	明学	駒沢	自由

＊試合日不詳

【順位】1 駒沢 2 成蹊 3 青学 4 一橋 ・・ 他校の順位不詳

★関東大会１回戦：一橋 vs 独協（千葉県リーグ１位） ● 0 - 2 11/13 於駒大 → 東京１部 残留

【記事】

本年より「東京都リーグ１部」はチーム数が 10 から８に減り、上位４チームは、神奈川・千葉・埼玉・北関東（栃木・群馬）各リーグ１位と、入替戦の切符を争う関東大会に進む。一方、下位４チームは東京２部との入替戦が義務づけられたため、何としても４位以内に入る必要があった。諸先輩のご努力で古河電工の内野正雄氏（1956 メルボルン五輪日本代表）をコーチに迎え、システムは穴のできぬようゾーンを採用。中盤を厚くするために４-３-３とし、攻撃は山崎の突破力が頼みだった。リーグ戦前に当時日本リーグ上位の日立の胸を借り、ハーフを２失点に抑え何とか自信らしきものを得たが、得点王の松永の胸板の厚さに上半身強化の必要性を痛切に感じた。

リーグ前半は新福・山崎のコンビよく、明学大に逆転勝ちするなど昨年の上位チーム全てから勝ち点をあげ、一時はトップに立った。これに安心したのか、お客さんの自由・成蹊に連敗。最終戦に勝って、やっと目標の４位を達成した。しかし関東大会では当然勝てると思っていた埼玉県リーグ１位の独協大にあっけなく破れ、シーズンを終えた。

創部 50 年目の本年は、我が部にとって種々の画期的な事柄があった年でもあった。
１つには、初めての女子マネが２名出現したこと。ラグビー部とサッカー部を間違えて入部したそうだ。おかげで雰囲気が和やかになり、１年生のＫなどは、その内の１人に熱を上げていた。また春にはグラウンドの向きを 90 度変える改修工事があった。そのため春の合宿は国立で行い、これが格好の気分転換となり夏合宿もこれまでとは違う山中湖でやった。さらに外部から本格的にコーチを招いたのも初めてでたくさんのことを学んだ。最も印象的だったのは青学との練習試合で CF にサッカー歴が半年足らずの１年生を起用したことである。とても試合に出る段階ではないと誰もが思っていたが、始まってみるとチームで一番キープ力があり、相手 BK は恐慌状態に陥った。内野氏の慧眼に恐れ入ると同時に、人をみること、評価することの難しさを考えさせられた。

昭和 47 年度　(1972)

★主将：新福 正（4）/ 副主将：矢野進一（4）/ GM：押本俊明（4）
　　マネージャー：矢尾板健二（4）
★MGR：猿渡啓子（津田塾 3）/ 河野恵美子（武蔵野音大 3）　・・　本シーズン終了後に退部

【試合メンバー】

FW　杉山（3）・山崎（3）・高橋良（1）
HB　押本（4）・新福（4）・遠藤（3）
BK　小山（3）・高垣（3）・宮（3）・笠間（2）
GK　大江（3）

【戦績】　東京１部：７位　２勝５敗

自由	亜細亜	学習院	明学	駒沢	成蹊	青学
● 3 - 4	○ 2 - 1	○ 2 - 1	● 0 - 1	● 1 - 2	● 1 - 2	● 0 - 2
9/24 小平G	10/1 小平G	10/8 小平G	10/15 明学	10/22 小平G	10/28 小平G	11/5 小平G

【順位】１ 駒沢　２ 成蹊　３ 青学　７ 一橋　・・ 他校の順位不詳

★入替戦：一橋 vs 東洋（東京２部２位） ○ 4 - 1　11/5 於小平Ｇ　→　東京１部 残留

＊リーグ最終戦 vs 青学 終了後　於小平グラウンド

寺尾・大江・大島・北出・山崎・笠間・池田篤・武井・高橋良
谷口・河内・吉岡・鈴木正・大久保・宮・池田克・猿渡・河野・宇田
佐藤健・小山・塚原・中野・内田守・倉田・木内・高垣・杉山・瀬川・古市
緒方・押本・松沼・矢野・新福・矢尾板・遠藤

【記事】

３年生の大部分は、すでに２年生から（一部は１年生から）レギュラーとして活躍していたし、中学時代からのサッカー経験者であったことから期待が持たれた年だった。当時の一橋サッカー部は東京１部の真ん中から少し下が定位置になっており、やれ麻雀だ、やれガールフレンドだという周囲の状況の中、何のために苦しい練習をするのかという心からの納得感が得られず、関東リーグ復帰の掛け声も建前だけの空回りになりがちだった。そこで主将の新福と GM 押本は、部員の一人ひとりをその気にさせる極めて具体的な方策を練りに練った。日々の練習は、ほんのわずかでもいいから「昨日に比べてここが良くなった」という自覚が持てるようにし、試合が近くなると、予め撮影しておいた相手チームの顔写真を部室にズラリと張り出し、利き足はどちらか、フェイントの癖はどうかなど誰でも気がついたことを書き込めるようにするとか、色々やった。

春合宿・三商大戦と上々のコンディションのうちに過ぎ、
「相当やれるぞ」という確信のもとに入ったリーグ戦だったが、戦いが進み、秋が深まるにつれ、
４連敗。茫然たる気持ちに襲われた。それでも今だに１つだけ誇れるのは、そうした中にあっても
部内に不協和音や対立が全然起こらなかったことだ。伊豆で行った最後の追いコンで、無論、
酒のせいもあるが、下級生のほとんどがボロボロ涙をこぼして「来年」を誓ってくれた時、
そしてその約束通り、翌年あの大宮サッカー場で上智を２-０で下し、悲願の関東リーグ復帰を
果たしてくれた時、多勢の賢弟に恵まれた我々愚兄４人は、全く、この上なく幸せだった。

昭和 48 年度　(1973)

★主将：山崎彰人 (4) / GM：宮 辰也 (4) / マネージャー：大島 正 (4)
★最高学年：遠藤 環 / 大江 健 / 緒方 徹 / 杉山正敏 / 高垣健治 / 古市正興
松沼英昭 / 吉岡基夫
★MGR：今関真理子 (1) / 今井なつ子 (1) / 杉江陽子 (1)　・・ 全員 津田塾

吉岡・小山・遠藤・大江・宮・大島・高垣・松沼
緒方・杉山・山崎・古市

【試合メンバー】

FW　遠藤（4）・杉山（4）・山崎（4）・池田克（2）・高橋良（2）

HB　高垣（4）・松沼（4）・内田守（3）・福本（1）

BK　小山（4）・宮（4）・大久保（3）・笠間（3）・池田篤（2）・河内（2）・加藤（1）

GK　大江（4）・木内（2）

【戦績】　東京１部：４位　４勝１分３敗

自由	立教	明学	青学	学習院	駒沢	成蹊	専修
○ 2 - 0	○ 2 - 1	△ 0 - 0	● 1 - 5	○ 2 - 1	● 1 - 6	● 2 - 3	○ 4 - 1
9/16 小平G	9/23 小平G	9/30 小平G	10/7 小平G	10/14 学習院	10/21 ？	10/28 小平G	11/5 小平G

【順位】１ 明学　２ 青学　３ 立教　４ 一橋　５ 駒沢　６ 専修　７ 自由　８ 成蹊　９ 学習院

★関東大会：１回戦　一橋 vs 群馬　△ 1 - 1　/　PK 戦　○ 4 - 1　於明学

準決勝　一橋 vs 明学　△ 1 - 1　/　PK 戦　○ 4 - 2　於御殿下

決　勝　一橋 vs 青学　● 0 - 1　於駒沢競技場

★入替戦：一橋 vs 上智（関東２部７位）○ 2 - 0　於浦和駒場　→　関東２部 昇格

【記事】

４月の春合宿から片山 洋氏（三菱重工 1964 東京・1968 メキシコ五輪日本代表）を
コーチに迎えて指導を受けた。リーグ戦の序盤は順調な滑り出しを見せたが、中盤に失速。
関東大会進出は最終の対専修大戦の結果次第となる。先取点を許したものの主砲の山崎に
やっと当たりが戻り、オーバーヘッドシュートを含むハットトリックで一蹴。
４位を確保すると共にムードも一転して上向いた。

続く関東大会は我々にとって初めての経験。そのせいか固さがとれず、
1 回戦、準決勝とも PK 戦にもつれ込む。しかし日頃から PK 戦の練習を欠かさず、
また 1 年 BK 加藤のツキや GK 大江の冴えわたる読みで勝利を収め、
決勝の青学戦には敗れたものの念願の入替戦の切符を手にした。
その入替戦は浦和駒場競技場で行われ、我々は前日から当地に乗り込み、
テレビの「うわさのチャンネル」を見ながらリラックスしていた。

試合当日は穏やかに晴れわたり、枯れた芝生を晩秋のやわらかい日差しが包んでいた。
開始直後から激しいチェックを試みるわが軍の気魄が勝り、前半半ば、右サイド内田からの
センタリングを胸で落とした山崎がドライブのかかったボレーシュートをゴールに突き刺すや、
敵は完全に浮き足立った。さらに遠藤のゴール右からのドリブルシュートで追加点を奪う。
後半は控え選手も一丸となったチームワークで２点を守り抜き、待望の「関東２部復帰」を
成し遂げた。試合終了後、まるで自分のことのように感極まり喜んでいた外岡監督を
皆で胴上げし、涙したことも忘れられない。その夜は駆けつけた OB の方々のご好意に甘え、
我々の謳う「武蔵野深き」が一晩中盛り場の空にとどろきわたったという。

関東大学サッカーリーグ Ⅱ期

昭和 49 年度 （1974）

★主将：大久保 寧（4）/ GM：内田 守（4）/ マネージャー：宇田 均（4）
★最高学年：岡田孝一 / 笠間昭彦 / 遠藤 環 / 宮 辰也
★MGR：今関真理子（2）/ 今井なつ子（2）/ 杉江陽子（2）/ 遠藤美子（1）・・ 全員 津田塾

深谷・栗原・内田泰・養田・西田・山根・福本・池田克・小林・渡辺・森・渋谷・佐藤嘉
古荘・池田篤・斎藤：阿部・佐藤健・河内・池田泰・今関・遠藤美
寺尾・道正・瀬川・高橋良・木内・永田・安部・浅井・今井
岡田・木村・宮・笠間・内田守・遠藤環・大久保・宇田・田中耕・杉江

【試合メンバー】

FW 池田克（3）・高橋良（3）・安部（2）・道正（2）・小林（1）
HB 内田守（4）・遠藤（4）・内田泰（2）・福本（2）
BK 大久保（4）・笠間（4）・宮（4）・池田篤（3）・河内（3）・加藤富（2）
GK 岡田（4）・木内（3）

【戦績】 関東２部：７位 ３勝４敗

順天堂	日大	国士舘	成城	東大	拓大	青学
● 1 - 2	● 0 - 3	● 0 - 5	○ 1 - 0	● 0 - 2	○ 3 - 1	○ 1 - 0
教育大	御殿下	教育大	教育大	浦和駒場	法政	駒沢第二

＊試合日不詳

【順位】1 日大 2 順天堂 3 国士舘 4 拓大 5 青学 6 東大 7 一橋 8 成城

★入替戦：一橋 vs 駒沢（東京１部２位） ○ 1 - 0 於駒沢競技場 → 関東２部 残留

【記事】

期待と不安で迎えた本年、まず我々が目標としたのは関東リーグ２部残留だった。
夏合宿はコーチである片山 洋氏（三菱重工）の指導のもと長野県菅平高原で行い、その後、
恒例の関西遠征にてヤンマーやヤマハ発動機など強豪チームと練習試合を持ち、リーグ戦へと
向かっていった。結果は３勝４敗とまずまずの戦績だったが、不運にも得失点差により７位に
甘んじ入替戦となってしまった。相手は実力では我々より上である駒沢大で、苦しい試合展開では
あったものの１-０で破り、残留を決めた。前年の関東２部昇格を果たした試合同様、今回も
終了の笛が鳴ると同時にお互い抱き合い、涙を流さんばかりに喜んだ。つい昨日のことのように
浮かんでくる。以後、残念ながら、あれほどの興奮と感激を味わうことはできていない。

一橋大学ア式蹴球部は、プロのサッカー選手の集団ではない。
小学生の時からずっとサッカーをやっている部員もいれば、健康のため大学に入ってから初めて
サッカーをやる部員もいる。高校時代に全国大会に出た選手もいれば、出ると負けのチームの無名
選手もいる。つきっきりのコーチも監督もいない。全員がそれぞれの意見を持ち、それぞれの個性
を発揮し、運営はすべて部員に委ねられているのだ。何と素晴らしい集団だろう。１年の間には
分解寸前になることも、また強靭な一枚岩になることもあったが、幾多の試練と危機を乗り超えた
からこその、あの興奮と感激であり、あの瞬間こそが我々の全てだった。一橋大学ア式蹴球部が、
いつまでも素晴らしい集団であってほしい。そして、みんなで興奮し、感激してほしい。

昭和 50 年度 （1975）

★主将：木内秀行（4）/ GM：河内純一郎（4） 高橋良多（4）/ マネージャー：倉田 徹（4）
★最高学年：阿部匡順 / 池田 篤 / 池田克彦 / 佐藤健太郎 / 瀬川雄二 / 谷口伸一 / 寺尾 進
★MGR：今関真理子（3）/ 今井なつ子（3）/ 杉江陽子（3）遠藤美子（2）/ 佐藤博子（1）・・ 全員 津田塾

【試合メンバー】

FW 池田克（4）・高橋良（4）・安部（3） HB 内田泰（3）・福本（3）・山根（3）
BK 河内（4）・寺尾（4）・加藤富（3）・木村（3） GK 木内（4）

【戦績】 関東２部：最下位 ０勝２分５敗

順天堂	明治	拓大	東大	国士舘	青学	立教
● 1 - 2	● 1 - 3	● 0 - 1	△ 1 - 1	△ 0 - 0	● 1 - 2	● 0 - 5
9/20 御殿下	9/28 御殿下	10/4 御殿下	10/11 大宮	10/19 御殿下	10/26 御殿下	11/2 御殿下

【順位】1 順天堂 2 青学 3 明治 4 拓大 5 国士舘 6 東大 7 立教 8 一橋

★入替戦：一橋 vs 専修大（東京１部１位） ○ 6 - 2 於駒沢競技場 → 関東２部 残留

養田・杉江・今関・蒲生・内田泰・栗原・野村・山原・加藤幸・渡辺
遠藤美・安部・五座：福本・池田泰・高槌・浅井・渋谷・佐藤嘉
木村・河内・木内・池田篤・永田・篠崎・小林・古荘・大西
佐藤健・瀬川・阿部・池田克・高橋良・倉田・谷口・鈴木茂

【記事】

我々は昨年の苦しみを今年の糧とすべく、３月初めに練習を開始した。
春季１・２部オープンリーグでは早稲田・慶応・明治の名門３チームの胸を借りることができ、大敗を喫したものの、厳しい教訓として大いに役立った。その後は国公立・天皇杯・関西遠征（三商大戦含む）、そして那須での夏合宿を通じ、ファイティングスピリット溢れる激しいサッカーを身につけ、秋のリーグ戦に臨んだ。

ところが僅差での敗戦が続き、善戦むなしく最下位となってしまった。
それでも春は０-５で大敗した明治に１-３まで追撃できたし、専修との入替戦は６-２と大勝し関東２部に踏みとどまることができた。これは日々の練習の成果と関東リーグの強い当たりの中で揉まれたチームの成長を示す事実である。

昭和 51 年度 （1976）

★主将：木村武志（4）/ GM：加藤富朗（4） 養田直樹（4）
★最高学年：安部裕二 / 内田泰彰 / 蒲生芳樹 / 斎藤節雄 / 篠崎信弘 / 永田耕一
福本 浩 / 古荘健一 / 山根言一
★MGR：今関真理子（4）/ 今井なつ子（4）/ 杉江陽子（4）・・ 全員 津田塾（本年度から最高学年のみ表記）

【試合メンバー】
FW 安部（4）・道正（3）・鈴木茂（3）・篠崎（4）・小池（2）
HB 内田泰（4）・加藤富（4）・小林（3）
BK 永田（4）・木村（4）・山根（4）・福本（4）・山原（2）・渋谷（3） GK 蒲生（4）

【戦績】 関東２部：７位 １勝１分５敗

順天堂	国士舘	青学	明治	拓大	東大	立教
● 1 - 2	● 0 - 3	● 2 - 3	● 1 - 4	△ 0 - 0	● 0 - 3	○ 3 - 0
9/18 西ヶ丘	9/26 御殿下	10/2 御殿下	10/10 明治	10/16 御殿下	10/23 御殿下	10/30 御殿下

【順位】1 国士舘 2 明治 3 青学 4 順天堂 5 東大 6 立教 7 一橋 8 拓大
★入替戦：一橋 vs 専修（東京１部２位） ● 2 - 4 11/21 於駒沢競技場 → 東京１部 降格

【記事】
４年生を中心にチームワークの非常に良いチームであり、メンバーの技術も極めて高く、国公立では 13 年ぶりの優勝、三商大戦も優勝と好成績をあげていた。それにもかかわらず、リーグ戦は７位。東京１部との入替戦にも敗退し転落してしまったことは非常に残念であり、かつ不名誉であった。

東京都大学サッカーリーグ Ⅱ期

昭和 52 年度 （1977）

★主将：佐藤嘉明（4）/ GM：小林 治（4） 栗原 仁（4） 渋谷耕一（4）
★最高学年：深谷 徹 / 浅井幸一 / 池田泰秀 / 道正 栄 / 田中耕太郎
★MGR：遠藤美子（津田塾４）

橋詰・日置・加藤幸・小池・入江・大西・渋谷・寺西・石川・奥田・五座・山原・五味
鈴木茂・重松・野村・高槌・袴田・吉田・高野・青木・武田・石田
田中耕・栗原・浅井・小林・遠藤美・深谷・佐藤嘉・池田泰・道正

【試合メンバー】
FW 道正（4）・石川（3）・小池（3）・清水（2）・日置（1）
HB 小林（4）・佐藤嘉（4）・五座（3）・橋詰（1）
BK 浅井（4）・池田泰（4）・渋谷（4）・栗原（4）・山原（3）・入江（2）
GK 深谷（4）・吉田（2）

【戦績】 東京１部：７位 ２勝５敗

成蹊	立正	亜細亜	国学院	明学	駒沢	学芸
● 1 - 2	○ 1 - 0	● 1 - 3	○ 4 - 0	● 0 - 2	● 0 - 4	● 0 - 1
9/10 駒大	9/17 駒大	9/24 駒大	10/2 駒大	10/9 明学	10/16 駒大	10/23 駒大

【順位】１ 駒沢 ２ 立正 ３ 学芸 ７一橋 ・・ 他校の順位不詳

★入替戦：一橋 vs 上智（東京１部２位） ● 0 - 2 → 東京２部 降格

【記事】

前年度からのレギュラーがわずか２～３人という状況で新チームを結成しなければならなかったので、なるべく多くの試合を消化することに努め、夏の合宿（新潟県津南）、関西遠征、リーグ戦直前の調整合宿（東大検見川グラウンド）によりチームの充実を図った。敵の情報収集にも努め万全を期したのだが、リーグ戦の結果は７位。入替戦も気力が空回りし、いい所なく敗れ、東京都リーグ２部陥落という予想だにしなかった最悪の結果を招いてしまった。

勝つためのメンバーを選ぶのが GM の最大の仕事であるのは、いつの時代でも変わりはないが、実力が同じなら下級生を優先させた。これは我々が最も痛感した真剣勝負の少なさを少しでもカバーし、来年以降の試合に生かしてもらいたかったからである。４年生主体のチームであると、どうしても次代との間にギャップができてしまう欠陥を防ぎたかった。２部で戦わなければならなくなった下級生には申し訳なかったが、彼らの力が実り、翌年１部に昇格したことには感服している。

昭和 53 年度　(1978)

★主将：小池直之（4）/ GM：五座哲也（4）　山原義彦（4）
★最高学年生：石川 哲 / 野村 隆 / 高槌宏敦 / 鈴木 茂 / 高野啓太 / 加藤幸雄
大西康夫 / 寺西純之 / 五味正秀
★MGR：佐藤博子（津田塾４）

佐藤博（丸枠）　高野・鈴木茂・石川・五味・山原・野村・加藤幸
高槌・寺西・小池・五座

【試合メンバー】

FW　石川（4）・小池（4）・鈴木茂（4）・太田（2）・日置（2）

HB　五座（4）・清水（3）・坂田（2）・桜井（2）・橋詰（2）

DF　加藤幸（4）・高槌（4）・入江（3）・田口（2）・船倉（2）

GK　吉田（3）・大倉（2）

【戦績】　東京２部：優勝　６勝１分０敗　→　東京１部 昇格

成城	東工	大東大	学習院	帝京	東経	国学院
○ 2 - 1	○ 3 - 2	○ 2 - 1	○ 2 - 1	△ 1 - 1	○ 6 - 0	○ 2 - 1
9/10	9/17	9/24	9/30	10/8	10/15	10/22

＊試合会場不詳

【順位】１ 一橋　２ 帝京　３ 学習院　・・ 他校の順位不詳

【記事】

我々の年は東京都リーグ２部という、おそらく我が部史上最低の地位にあった年だった。
昭和 52 年秋、入れ替え戦敗退後、当時の４年からチームを引き継いだ時、我々は全員一致で
リーグ戦の全勝優勝を誓い合った。２年連続で下位リーグに転落し、低迷状態にあったチームを
再建することこそ我々に課せられた使命だったわけだが、そういった重圧感と同時に、
落ちるところまで落ちたという妙な居直りが同居した気分の船出だった。

春先は好調な滑り出しだったと記憶する。
６月の国公立で宿敵東大を久々に破り、余勢をかって学芸大を葬り去り優勝したあたりが、
思えばひとつの頂点だったようだ。しかし、その直後の三商大戦では思いもよらぬ２連敗。
ここで一挙に谷底に落とされてしまった。だが立ち直りも早く、夏の第１次合宿（霧ヶ峰）後の
関西遠征では、関西リーグの中堅どころを相手に３勝１敗で勝ち越して帰京。
ところがリーグ戦直前に行った練習試合中心の第２次合宿（小平）の成績は惨憺たるもの。
不安のうちにリーグ戦突入と相なった。

案の定、苦戦の連続である。
奇跡に近い逆転勝ちで、かろうじて開幕２連勝。これが効いた。その後の２試合も苦戦の末に
勝利して天王山の帝京大戦を迎えた。その時、帝京大は３勝１分で２位につけていたと思う。
この試合、結局は引き分けで、我々の全勝優勝の野望は消えたのだが、首位を保ったことで
気分的に随分楽になり、続く東経大に大勝。最後の国学院戦も後半は押しまくられながら勝ち、
優勝を決めた。良き同僚、後輩の力で得た優秀の美であったと思っている。

リーグ戦後、外岡監督と森重大先輩が１部昇格のご褒美として、
４年生を柳橋の料亭「俵屋」へ連れて行き、気前よく「粋の世界」を覗かせてくださった。
「洟垂れガキたち」にとっては忘れがたい思い出であり、改めて感謝申し上げたい。

昭和 54 年度 （1979）

★主将：入江憲二（4）/ GM：清水靖雄（4）
★最高学年：青木健太郎 / 石田暁夫 / 種岡瑞穂 / 袴田 剛 / 吉田慎二
★MGR：重松真理（津田塾４）

吉田・清水・入江・重松
青木・石田・種岡

【試合メンバー】
FW 種岡（4）・太田（3）・日置（3）・田中剛（2）
HB 清水（4）・坂田（3）・桜井（3）・橋詰（3）
DF 青木（4）・入江（4）・田口（3）・船倉（3）・吉中（2）
GK 吉田（4）

【戦績】 東京１部：６位 ２勝２分３敗

学芸	青学	自由	東大	成蹊	帝京	立教
△ 1 - 1	● 0 - 2	○ 4 - 1	△ 1 - 1	● 0 - 3	○ 4 - 1	● 1 - 3
9/8 小平G	9/15 御殿下	9/23 小平G	10/7 御殿下	10/13 御殿下	10/21 御殿下	10/27 御殿下

【順位】1 青学 2 学芸 3 成蹊 4 立教 5 東大 6 一橋 7 自由 8 帝京

【記事】
我が部は総勢およそ 35 名。
伝統である学年の隔たりを感じさせない和やかな雰囲気が、常に部室を満たしていた。
部室という所は実に面白い。あれほど汚い所もそう多くはないが、その汚さを忘れさせてしまう居心地の良さがある。何といっても楽しい。話題に事欠かず、４年生をダシにする者、前日の麻雀の結果を報告する者、中には１人で漫才をやっている者もいた。こうした和やかさに入部当時は驚かされたものだ。特に私の隣にいた先輩 K などは上級生を呼び捨てにしながら楽しそうに話をしており、それまで持っていた「体育会＝封建的社会」という概念は一掃された。

素晴らしい成績で１部リーグ復帰を果たした前年度に比べ、
今年は春季１・２部対抗戦１次リーグ予選敗退、国公立戦３位、三商大戦全敗と悲惨の一言。
黒姫高原での夏合宿や関西遠征などで強化を図ったが、試合を重ねるうちにケガ人が続出し
チームはガタガタになってしまった。それでも何とかリーグ戦までには多くがケガから復帰し、
最終的には６位で残留することができたが、先輩方の念願であった関東リーグ復帰への切符を
手中におさめることはできなかった。

昭和 55 年度　(1980)

★主将：日置慶太（4）/ 副主将：桜井真二（4）　橋詰邦弘（4）/ GM：武田治基（4）
★最高学年：大倉治彦 / 太田勝之 / 坂田智弘 / 田口 聡 / 船倉洋一
★MGR：松山久恵（津田塾４）

坂田・大倉・日置・橋詰・田口・船倉　　松山（丸枠）
桜井・太田・武田

【試合メンバー】
FW　太田（4）・桜井（4）・日置（4）・田中剛（3）・松尾（2）
HB　橋詰（4）・船倉（4）・岩田（2）・畑（2）・山木（1）・若林（1）
DF　坂田（4）・田口（4）・松村（3）・吉中（3）・都竹（2）・樋口（1）
GK　大倉（4）・杉山（2）

【戦績】　東京１部：５位　０勝６分１敗

成蹊	立教	明学	学芸	自由	学習院	東大
△ 1 - 1	△ 1 - 1	△ 0 - 0	● 1 - 3	△ 2 - 2	△ 1 - 1	△ 2 - 2
9/7 御殿下	9/13 小平G	9/21 御殿下	9/28 小平G	10/5 御殿下	10/12 御殿下	10/19 御殿下

【順位】１ 明学　２ 学芸　３ 立教　４ 東大　５ 一橋　６ 成蹊　７ 学習院　８ 自由

【記事】

４年生の９名中８名が経験豊富なレギュラーで、関東リーグ復帰への期待は例年になく大きかった。アポロエクソサイザー（筋力強化器具）や１・２軍制の導入など斬新な練習方針のもと、チームの意気は上がった。春シーズンは国公立・三商大戦に優勝し、天皇杯でもブロック優勝して都本予選に駒を進めた。練習試合で強豪明学大を降し、関東２部の拓大・専修大とも戦って１勝１分。また日本リーグの日産や日立に胸を借り、より高いレベルのサッカーに挑んだ。夏の関西遠征では３強の大商大・大体大・大経大に善戦し、チームは益々自信を深めた。しかしリーグ戦の結果は惨憺たるもので、ほとんどのゲームで優位に立ちながら勝利の女神は微笑まず不本意であった。今となっては負け惜しみにしか聞こえまいが、それは〝神がかり的〟な、そして屈辱的な〝５位〟であった。

それでも楽しかった思い出が１つある。
三商大戦を控え例年より早く関西遠征に乗り込み、京大との練習試合を終えた日のことである。同僚である大倉くんの親父さんのご好意で我々総勢 20 数名は晩餐会に招待された。その豪華さはとても言葉では表せない。それだけでも満足したが誰かが冗談で“京都に来たのだから舞妓さんに会いたい”と言ったところ大倉くんの親父さんはその場で OK し、いざ祇園へ向かったのだ。
着いた所が祇園でも特に有名な「一力茶屋」。我々は奥座敷に通された。太い柱に歴史の年輪を感じ、ここで維新の志士が集まり新撰組が作戦を練ったと思うと感無量だった。しばらくすると１人、また１人と全部で４人の舞妓さんが集まった。祇園には舞妓さんが 16 人しかいないそうで一度に４人も揃うのは年に数えるほどとのこと。我々は目の前に座った舞妓さんの姿にただ驚き、感動を越えて言葉も出ない状態で、日本女性の美の極を見る思いがした。クライマックスは「祇園小唄」の舞い。４人が小唄に合わせ銘々の舞いを演じる姿は、華麗、豪奢、可憐。
このような素晴らしい光景に巡り会えた我々は幸せ者であった。

＊小平の部室にて

昭和 56 年度 （1981）

★主将：吉中邦夫（4）/ 副主将：松村正俊（4）
★最高学年：伊地知嗣典 / 切畑年生 / 倉崎嘉幸 / 田中 剛
★MGR：柴田京子（津田塾４）

【試合メンバー】
FW 倉崎（4）・島田（3）・畑（3）・松尾（3）
HB 伊地知（4）・切畑（4）・田中剛（4）・小澤（2）・若林（2）
DF 松村（4）・吉中（4）・岩田（3）・都竹（3）・樋口（2）・山木（2）
GK 奥野（3）・杉山（3）

【戦績】 東京１部：最下位 ０勝７敗 → 東京２部 降格

東大	亜細亜	学芸	慶応	学習院	立教	成蹊
● 0 - 3	● 0 - 10	● 0 - 9	● 0 - 6	● 0 - 3	● 0 - 2	● 0 - 4
9/13 御殿下	?	?	?	?	?	?

＊東大戦以外の
試合日・会場不詳

【順位】1 亜細亜 2 学芸 3 慶応 4 学習院 5 立教 6 東大 7 成蹊 8 一橋

【記事】・・ 倉崎嘉幸

前年のリーグ戦では下馬評では関東２部昇格の最有力に上げられながら、
予想外の苦戦と１部残留。引き継いだ我々の代は人数も少なく、OB 会からもご心配があったのか
外部コーチの招聘となり、ドイツでライセンスを取得された三菱養和の品村敏明コーチのご指導を
受けることとなった。ボールは各自１個を使用。見たこともないボールリフティングやクーパー走
（12 分間走）を含む様々な練習方法とゲームでの戦術を教えて頂いた。個々人のスキルと知識は
上がったが、練習の質と量は少し落ちていたようだ。学生主体の運営の伝統から全く違う環境と
なり、チームの一体感や自分たちで相談し考える自立性など、伝統的な強みはスポイルされる面も
あったように思う。練習試合でも、なかなか結果は出なかった。

そしてリーグ戦に突入。
初戦でキープレーヤーであるセンターフォワードの３年松尾が大けが。急遽、２年の山木を代役に
起用してリーグ戦を乗り切る布陣をひいた。結果は、毎試合無得点の全敗。最後まで流れを変える
ことはできず、リーグ戦は終わり、降格。その後、１部に戻るまでに 35 年を要することとなった。
２年、３年は人数も多く、サッカー経験のある有力選手が揃っていた。戦力的には明らかに前年より
劣ったが、やり方によっては残留は十分可能だったと思う。品村コーチにも熱心にご指導を頂いた。
残念ながら、新しい制度を既存の枠組みに調和させた上で、十分に使いこなすという役割を
４年生が消化できなかったように思う。

最後にメンバーの紹介を。
吉中主将は、センターバック。高校でインターハイに出場、とはいえ精神論とは対極の緩い日常。芸能界通としても知られていた。松村副将は、名門広大付属出身のサイドバック。競馬、乗馬と多趣味？であった。切畑君は、高校で剣道３段、専修との試合では、ダイレクトのサイドキックで鮮やかな得点を挙げた。伊地知君はハーフ。運動量豊富なフェイントの名人で、法政との練習試合でも互角のボールさばきをみせた。田中君は、テクニックとスピードで、右ウィングで活躍。
私（倉崎）は、医療班、主務、ウィングの補欠。１つ上の先輩方は、毎年、東大戦の幻のゴールを肴に盛り上がりを見せておられる。我々の代は、集まっても残念ながら話題に乏しいが、いつかほろ苦い４年生の記憶を語り合えればと願っている。MGR 柴田：つぶらな瞳の湘南ガール、おけい。だらしない同期を、いつもあきれながらお世話、ごめんね。

吉中

松村

切畑

伊地知

田中剛

柴田

倉
崎

昭和 57 年度　(1982)

★主将：畑　弘志（4）/ 副主将：岩田淳一（4）　松尾俊彦（4）/ GM：松永　隆（4）
★最高学年：伊藤史郎 / 奥野真琴 / 島田喜広 / 杉山剛英 / 須藤英夫 / 滝口　修
田中　剛 / 都竹一郎
★MGR：梶浦明子（津田塾４）

【試合メンバー】
FW　田中剛（4）・松尾（4）・北山（1）・釣田（1）
HB　畑（4）・小澤（3）・樋口（3）・若林（3）・入部（1）
DF　岩田（4）・都竹（4）・山木（3）・上坂（3）・橋爪（2）・桑原（1）
GK　奥野（4）・杉山（4）

【戦績】　東京２部：４位　２勝４分１敗

帝京	成城	東工	大東大	自由	東洋	上智
△ 1 - 1	○ 4 - 0	○ 2 - 0	△ 1 - 1	△ 1 - 1	● 0 - 1	△ 1 - 1

＊試合日・会場不詳

【順位】１　東洋　２　上智　３　帝京　４　一橋　５　大東大　６　成城　７　自由　８　東工

梶原（丸枠）　　須藤・杉山・島田・奥野・松永
滝口・伊藤・松尾・都竹・畑・岩田

【記事】・・ 岩田淳一（副主将）

前年度東京１部から２部に陥落したため、当年は即１部復帰を目指し、
前年より指導いただいた品村コーチと、今シーズンの途中からプレイヤーを諦めて GM に徹して
もらった松永の元で練習に励んだ。有望な１年生も加わり、各年代からメンバーをバランスよく
配置したチーム編成となる。順調に関西遠征、三商大戦、夏の菅平合宿をこなしていくが、
４年の島田が合宿直前に交通事故に合い、生死を彷徨う重症を負ってしまった。当人の口惜しさを
皆で背負い、リーグ戦に臨む（その後、島田は強靭な生命力で武蔵野日赤病院を退院し無事生還）。

リーグ前半の４戦は２勝２分と好調で首位に立つ。
帝京戦で４年 HB 畑が、さらに成城戦でも３年 DF 山木がハーフラインから超ロングシュートを
決め、チームの雰囲気も盛り上がった。しかしリーグ後半は１敗２分で勝ちきれず４位に終わり、
１部復帰を果たすことはできなかった。引き分けの試合が多かった理由は、前半に得点しても
90 分体力が続かず、後半に集中力が切れてしまうこと。この欠点を補う戦術面での対策を
取れなかったのが残念である。

余談になるが、『100 年史』を飾る出来事（？）として、テレビ出演がある。
それも久米 宏と黒柳徹子が司会を務めていた当時の人気歌番組、「ザ・ベストテン」（TBS）。
番組のプロデュースをしていた一橋サッカー部の遠藤先輩（昭 50 卒）のたっての依頼で、
『100% … SO かもね！』を歌うシブがき隊の前で、我々４年生を中心とする部員たちが
シュートやヘディングを披露したのである。この恥ずかしくも楽しい思い出をユーチューブで
観ることができるので、ぜひ一度ご覧あれ。

https://www.youtube.com/watch?v=AI_W72p9Fpl

昭和 58 年度 （1983）

★主将：樋口哲司（4）/ 副主将：上坂卓也（4） 山木達生（4）/ GM：島田喜広（5）
★最高学年：小澤忠司 / 木下克彦 / 久木田正樹 / 栗本泰治 / 高木泰三朗
長崎 寛 / 中隈和夫 / 坂東慶正 / 舟津一郎 / 堀田 浩 / 若林紀雄
★MGR：斎藤真美（津田塾２）/ 田中明美（津田塾２）

舟津・島田・若林・木下・栗本・上坂・樋口・小澤
長崎・久木田・堀田・中隈・山木・坂東

【試合メンバー】
FW 若林（4）・北山（2）・寺田（1）
HB 小澤（4）・樋口（4）・入部（2）
DF 山木（4）・上坂（4）・橋爪（3）・桑原（2）
GK 栗本（4）

【戦績】 東京２部：最下位 ０勝３分４敗 → 東京３Ａ 降格

帝京	成蹊	国学院	亜細亜	東経	成城	大東大
△ 1 - 1	△ 2 - 2	△ 2 - 2	● 1 - 4	● 0 - 1	● 2 - 4	● 1 - 3
9/10 小平G	9/18 小平G	9/25 小平G	10/9 小平G	10/16 小平G	10/22 小平G	10/30 小平G

【順位】1 帝京 2 亜細亜 3 国学院 4 東経 5 成城 6 成蹊 7 大東大 8 一橋

【記事】・・ 樋口哲司（主将）

昭和 58 年度シーズンは前年のリーグ戦を主力として戦ったメンバーが数多く残り、
全体の底上げができれば十分昇格できるという展望をもってスタートした。
ただ結果は３分４敗の最下位で３部へ降格と、思いもよらないものになってしまった。
振り返ってみれば、個性溢れるメンバーのベクトルを１つの方向に束ねることができなかった
私のリーダーシップ不足、「今年は強い」という根拠のない思い込みによる努力不足、
GK 経験者が不在となってしまいシーズンを通してこの課題を克服しきれなかったことなど、
もっと頑張ることができたのではないかと後悔することばかりだ。時代は、田中康夫の
『なんとなくクリスタル』が発表されブランドブームの真っ只中。泥臭く努力を積み重ねるのが
格好悪いといった風潮もあり、自分たちもその雰囲気に身を委ねてしまったように思う。
プロコーチの指導を受け始めて３シーズン目。技術的にはそこそこ上達したという手ごたえは
あったが、それをさらに突き詰めていく努力、あるいはフィジカル面の強化といったものが
今ひとつ不足していた。仕事もサッカーも「努力は人を裏切らない」はずなのに努力不足だった。
それに気づくことができなかった反省を糧に、社会人生活を送るようにしている。

昭和 59 年度 （1984）

★主将兼 GM：橋爪智之（4）
★最高学年：奥村俊彦 / 尾仲秀次 / 山部信太郎
★MGR：田中明美（津田塾３）/ 藤田実穂（実践女子短２）

【試合メンバー】

FW 北山（3）・谷口（3）・村上（3） HB 釣田（3）・寺田（2）・宮脇（2）
DF 橋爪（4）・入部（3）・桑原（3）・竹田（2） GK 幸松（3）

【戦績】 東京３部Ａ：優勝 ６勝１敗 → 東京２部 昇格

電機大	水産大	都留文	日大農獣	武蔵	農工	東工
○ 5 - 2	○ 5 - 0	○ 3 - 0	○ 4 - 0	○ 4 - 3	○ 3 - 0	● 2 - 4
9/9 小平G	9/16 小平G	9/23 小平G	9/30 小平G	10/7 小平G	10/14 小平G	10/21 小平G

【順位】１ 一橋 ２ 東工 ３ 電機大 ４ 日大農獣 ５ 武蔵 ６ 水産大 ７ 農工 ８ 都留文

★順位決定戦：一橋 vs 日大文理（3部Ｂ1位） 10 月 28 日 於小平Ｇ
△ 0 - 0 / 延長 △ 0 - 0 / PK 戦 ○ 4 - 2

藤田（丸枠）　　橋爪・田中・山部
奥村・尾仲

【記事】・・ 橋爪智之（主将兼 GM）

東京都リーグ１部への復帰を目指し３年前からプロコーチを招聘したものの、結果に繋がらなかったため、この年から学生による自主運営に戻った。主力が下級生だったこともあり、彼らが「自分たちのチーム」として自覚を持ち、主体的に練習に取り組んでくれることが昇格のカギと考え全員参加のミーティングを増やし、自分たちに今欠けているものは何か、それを克服するためにはどんな練習をすればよいか等をよく話し合い、その結果を練習に反映するようにした。更に練習のための練習を排除し、試合を想定した練習を行うように心掛けた。そのためフォーメーション練習ではコンビを固定することもあった。これは或る意味レギュラーとサブをはっきり色分けしてしまうことでもあり、サブメンバーのモチベーション低下が懸念されたが、全員が本当によくついてきてくれた。また過去３年間で２度の降格を経験したので、心機一転を図るため、伝統カラーの赤だったユニホームを青・黒・白の縦縞に変更した。当時トヨタカップで優勝した南米の名門クラブ、グレミオにあやかったものである。

こうして迎えたリーグ戦は６勝１敗で優勝した。
３部Ｂの覇者、日大文理学部とのプレーオフでは（勝者は２部に自動昇格）では終始圧倒されたものの、何とか無失点で延長戦まで戦い抜き、PK 戦の末、念願の２部昇格を果たすことができた。この昇格は試合に出たメンバーのみならず腐らずにしっかりチームを支えてくれたサブメンバー、更に専任の GM がいない中タイムキーパーとしても毎日の練習を支えてくれた女子マネージャー、金銭面でのサポートのみならず、お忙しい中毎週のように試合に足を運び、現役部員を叱咤激励してくださった OB の方々全員のおかげであり、我々はまさに One Team であった。

昭和 60 年度 （1985）

★主将：北山 慶（4）/ 副主将：桑原隆人（4）/ GM：福田正司（4）
★最高学年：入部 衡 / 幸松栄夫 / 谷口 浩 / 釣田 智 / 村上浩三
★MGR：酒井智子（2）/ 滝沢英子（2）/ 田中千代子（2） / 宮村千鶴（2）・・ 全員 実践女子短

宮村・滝沢・北山・入部・幸松・桑原
谷口・釣田・村上・福田

【試合メンバー】

FW 北山（4）・村上（4）・谷口（4）・重松（2）・高橋（2）
HB 寺田（3）・宮脇（3）・星野（2）・山崎（1）
DF 桑原（4）・入部（4）・釣田（4）・高見（3）・金谷（1）・栗谷（1）
GK 幸松（4）・朝原（3）

【戦績】 東京２部：５位 ３勝１分３敗

亜細亜	東大	立教	日大文理	帝京	武蔵工	成城
○ 1 - 0	● 1 - 2	● 0 - 2	△ 4 - 4	○ 4 - 3	○ 3 - 2	● 2 - 3
9/8 小平G	9/15 小平G	9/22 小平G	9/29 小平G	10/6 小平G	10/13 小平G	10/20 小平G

【順位】 1 東大 2 立教 3 亜細亜 4 帝京 5 一橋 6 成城 7 日大文理 8 武蔵工

【記事】・・ 福田正司（GM）

昭和 60 年、一橋大学ア式蹴球部は春季１部・２部対抗戦にて優勝した。
戦績は次の通りである。

★１次リーグ：vs 専修　● 0 - 6　/　vs 上智　○ 2 - 1　/　vs 武蔵工（現東京都市大）○ 4 - 2
★準々決勝：vs 立教　○ 2 - 1
★準決勝：vs 亜細亜　○ 4 - 2
★決勝：：vs 専修　△ 1 - 1（延長含む）/　PK 戦 ○ 4 - 2

その実績もふまえて１部昇格への強い意欲をもって秋季リーグ戦に臨んだが、
結果は５位に終わった。遺憾なことこの上ないが、実は春季対抗戦時点で、当時のチームの弱点は既に顕在化していた。失点の多さである。春季・秋季の戦績を見てわかる通り、ほとんどの試合で２点以上の失点を喫している。レギュラーディフェンダーの能力が低かったというわけではない。だが…、当時は攻撃力に優れたプレイヤーを（元が FW プレイヤーであっても）デイフェンダーに起用するというチーム方針があり、結果、公式戦通算でも１試合平均２得点以上の高い攻撃力・得点力を有していたが、反面、多くの失点を喫する弱点も有していたのである。

現在の目で見れば、弱点をもたらした要因を掘り下げることができる。
元々FW プレイヤー・攻撃志向のプレイヤーは能動的な動きを本質とする。そういう選手をディフェンスラインに起用した場合、その攻撃的・能動的なプレイゆえに守備エリアにスペースができがちで、そこをつかれて失点することが多かったのである。

当時の我々は「失点が多い」という認識を持ちながらも、その弱点を是正する知識・ノウハウを追究しきれなかった。失点の多さを上回る得点でカバーしようとしており、その方針のまま秋季リーグ戦に臨んだのである。それがまるきり間違っていたとは思わないが、得点力が高いという長所、失点が多いという弱点がそのまま表れ、長所が弱点をカバーしきれない結果となってしまったのである。「守備エリアに発生してしまったスペースを組織的に埋める」ための知識・ノウハウをもう少し追究できていれば、という悔いが残る。

現在、現役諸兄はチームの長所を伸ばす・弱点を是正する戦術・知識・ノウハウ・練習法を追究するに支障のない好環境の中にあると当方は認識している。現役チームが好環境・良スタッフの存在をフルに生かして好成績を修めることを願ってやまない。そして OB としては、現役諸兄が競技にうちこめる好環境をさらに構築できるように、微力ながら支援を継続していく所存である。

昭和 61 年度 （1986）

★主将：寺田広志（4）/ 副主将：高見理人（4） / GM：岩本 潔（4）
★最高学年：朝原丈雄 / 竹田益実 / 新徳 昭 / 宮脇俊久
★MGR：亀下幸恵（津田塾４）

亀下（丸枠）
朝原・高見・岩本・竹田
新徳・寺田・宮脇

【試合メンバー】

FW 高見（4）・新徳（4）・重松（3）・高橋（3）・寺田正（1）・前田（1）
MF 寺田広（4）・宮脇（4）・星野（3）・松井（3）・山崎（2）
DF 神原（3）・竹田（4）・新谷（3）・橋本（3）・金谷（2）・栗谷（2）
GK 朝原（4）・樫原（2）

【戦績】 東京２部：６位 ２勝５敗

帝京	亜細亜	立教	大東大	明学	日大文理	成城
● 0 - 1	○ 1 - 0	● 2 - 4	● 1 - 2	○ 2 - 0	● 0 - 2	● 1 - 2
9/7 小平G	9/14 小平G	9/21 小平G	9/28 明学	10/5 明学	10/12 小平G	10/19 小平G

【順位】１ 日大文理 ２ 帝京 ３ 立教 ４ 明学 ５ 亜細亜 ６ 一橋 ７ 大東大 ８ 成城

【記事】・・ 高見理人（副主将）
「１部昇格」を目標に掲げたが、２年間不動のレギュラーだった７名が卒業で抜け、さらに１年次から攻守の要として活躍していた主将の寺田が、負傷で公式戦に出場できないまま秋季リーグを迎える。結果は２勝５敗で、６位。今思えば、チームは発展途上。「降格回避」が妥当な目標だった。

リーグ戦は実力通りだったが、個別の対戦成績では大いに悔いが残った。
第４節、７位（３部との入替戦にまわる）を争う大東文化に１-２で逆転負けし、
最終節では６戦全敗で降格が決まっていた成城に１-２で敗れ、唯一の勝ち点を与えてしまった。
下位２チームに敗れたのは痛恨の極みである。その原因は、どこにあったのか・・

第５節で上位の明治学院に２-０で勝利し、今期のベストゲームができたことを思えば、
フィジカルなコンディションはそこまで悪くなかった。下位チームに勝てなかった理由は、
試合に臨むチームのメンタルにあったと思う。逆に負ければ最下位もあった第５節に
最高のゲームができたのも、同じ理由であろう。個人的には、大東文化に負けてから第５節に
臨むまでの１週間、あのとき感じた「降格の恐怖」は、今思い出しても胸が苦しくなる。
まさに、最悪の精神状態だった。当時の僕たちがメンタル・マネージメントの概念を持ち、
チームの精神状態と勝敗がこれほど連動すると知っていたら、結果は違っていただろうか？

追伸、当時を知る方へ。
残留争いに巻き込まれたのはお前のせいだというクレームは、ナシでお願いします。

昭和 62 年度　(1987)

★主将：星野 毅（4）/ 副主将：橋本俊昭（4）　高橋政博（4）/ GM：宮木和彦（4）
★最高学年：安楽哲郎 / 川本清充 / 神原直秀 / 北尾一郎 / 新谷浩司 / 土田 聡
松井浩通 / 泰田崇義 / 柳田浩孝 / 吉村信康
★MGR：横手利恵（津田塾４）
阿部みゆき（一橋 1）/ 松本園子（一橋 1）　・・ 初めて一橋生の女子マネージャーが入部

【試合メンバー】
FW 安楽（4）・高橋（4）・寺田（2）・林（2）・山村（1）・横山（1）
MF 星野（4）・松井（4）・山崎（3）・諏訪部（2）
DF 神原（4）・新谷（4）・橋本（4）・金谷（3）・栗谷（3）
GK 樫原（3）・赤井（1）

【戦績】　東京２部：３位　２勝３分２敗

立教	東洋	帝京	明学	創価	玉川大	亜細亜
○ 3 - 1	○ 1 - 0	● 1 - 2	△ 1 - 1	● 0 - 1	△ 1 - 1	△ 0 - 0
9/13 小平G	9/20 小平G	9/27 明学	10/4 明学	10/11 小平G	10/18 小平G	10/25 小平G

【順位】１ 明学　２ 創価　３ 一橋　４ 玉川大　５ 亜細亜　６ 東洋　７ 帝京　８ 立教

星野・川本・松井・橋本・土田・柳田・吉村
北尾・泰田・神原・安楽・高橋・新谷

【記事】・・ 星野 毅（主将）
この年のチームは１年生も含め各学年から数人が先発に名を連ね、総力で戦うチームだった。
４年生は 10 人超の一大勢力で、中には小学校時代にナショナルトレセンの育成選手に選抜された者もいたが、自称「中学時代はサッカー部副将」という単なる初心者をはじめ、高校までは野球、バトミントン、 アワビ採りなどでならした様々な経歴のメンバーが集まり、控えに回る者も多かった。ただ、下級生が臆することなく力を発揮できるよう、みんながチームの雰囲気や風通し、チームワークを大切にしていた。

こうした思いが奏功したのか、秋季のリーグ戦はスタートから普段着通りの戦いができ、勢いに乗りたい１戦、２戦で勝利を収めることができた。続く３戦目も絶妙のコンビからのヘディングシュートが決まり先制した。さらに試合中盤、PK のチャンスを得た。しかし、とどめを刺すはずの私の PK はキーパーに止められてしまい、この試合はそこから流れが変わりひっくり返されてしまったのである。後から振り返れば、上に行くチャンスを逃すことになる大きな PK 失敗だった。次の４戦目で、トップを走る明治学院に何とか引き分け、最後の意地は見せたものの、開幕時の勢い、流れをどうしても取り戻すことができず、４戦目以降は３分１敗、結果３位となり昇格のチャンスを逃した。何でド真ん中に力一杯蹴り込めなかったのか・・悔やんでも悔やみきれない PK 失敗となった。

リーグ戦の最終戦が終わり、３位が確定した失望の中、一つだけ救いだったのは、試合後に OB から頂いた言葉だった。“今年の代（４年生）には傑出した選手はいなかったが、何年か見てきた中で最もまとまりのあるチームだった”という趣旨だった。
勝負には勝てなかったが、皆で築いてきたチームは、何とか思うような形に仕上がったようだ。
我が同期は 50 歳を過ぎた今もなお在京メンバーでフットサルの大会に参戦している。残念ながら、周囲の声にはまったく耳を貸さない自分勝手なおやじチームで、勝つことはほとんどない。

昭和 63 年度 （1988）

★主将：山崎 真（4）/ 副主将：金谷 斎（4） / GM：絹川直人（4）
★最高学年：樫原 隆 / 栗谷信裕 / 藤井徹也
★MGR：東 千順（津田塾４）/ 漆原律子（津田塾４）

栗谷・藤井・絹川・樫原
山崎・金谷

【試合メンバー】

FW 山村（2）・横山泰（2）
MF 山崎（4）・諏訪部（3）・野田（2）・横山昌（1）・木村（1）
DF 金谷（4）・栗谷（4）・篠田（3）・岡本（2）・本橋（1）
GK 赤井（2）

【戦績】 東京２部：５位 ２勝２分３敗

東洋	亜細亜	創価	武蔵	帝京	国学院	玉川大
○ 1 - 0	● 1 - 2	● 0 - 2	△ 0 - 0	● 0 - 4	○ 3 - 0	△ 1 - 1
9/11 小平G	9/18 小平G	9/25 小平G	10/2 小平G	10/9 小平G	10/16 小平G	10/23 小平G

【順位】１ 亜細亜 ２ 東洋 ３ 創価 ４ 帝京 ５ 一橋 ６ 国学院 ７ 武蔵 ８ 玉川大

【記事】・・ 山崎 真（主将）

前年度に久しぶりに東京都２部リーグ３位という好成績を残して臨んだ本年度は、
リーグ内に他に突出したチームもなく、競合他校と戦力を比較しても１部昇格を充分狙えるとの
意気込みでスタートしたシーズンであった。得点力に課題はあるものの、ディフェンス陣には
実力者を揃えていたので、手堅く守りながらカウンターやセットプレーにより勝ち点を積み上げ
昇格圏を狙うというのが当初の基本構想だった。

ところが、いざシーズンが始まってみると春からコンスタントにケガ人が出て、
なかなかメンバーが固定できず、ベストメンバーで挑めない試合が続き、三商大戦や夏合宿を
経ても、負けぐせがついたとまでは言わないが、「試合に勝つことで自信をつけていく」ことが
叶わないまま、不安の残るリーグ戦のスタートとなった。

苦戦が予想された初戦の東洋に辛うじて勝利。波に乗りたかったのだが、
ここからケガ人に泣かされ、毎試合先発メンバーを組むのに苦労したのを覚えている。
シーズン後半には、戦力になって間もない１年生数人がテーピングだらけで試合に出ていた。
一橋大学も近年は各学年に豊富にサッカー経験者が揃い、一定レベルの技術力・戦術力が
チーム全体で構築されているが、当時は「コンスタントに力を発揮できる戦力の層の厚さ」は
我々にとって大きな課題だった。

２戦目以降は実力校に対し苦戦が続いた。
勝ち点３を計算していた武蔵と引き分けた後、帝京に大敗を喫した。この試合は粘り強かった
ディフェンスがあっさり破られて大量得点を許した上、攻撃面でも３度あったゴール前の
フリーキックを２度もクロスバーに阻まれるなど、とにかく流れが悪かった。

こうなると昇格権争いどころではなく、降格の危機が頭をよぎる。
次節の国学院は事実上の７位争いとなり、試合前の緊張感も相当で、プレッシャーのために
動きが悪かったのだが、終わってみると３対０の完勝。今期リーグ戦のベストゲームとなった。
最終節の玉川大も得点チャンスを重ね、勝つチャンスはあったが、残念ながら引き分け。
結局、２勝３敗２分の５位でリーグ戦を終えた。

前年は最終戦に引き分けて２位を逃し悔し泣きをしたが、この年は不思議と涙は出ず、
“終わったなあ”という脱力感・解放感に包まれていたことを覚えている。
リーグ戦でのチームのやり繰りや順位争いのプレッシャーに精神的に疲れて、
自分自身も満足なパフォーマンスを出せず消化不良だったのである。

その後、我々は平成元年卒業生として社会人となったので、今期が昭和最後のリーグ戦となった。
平成の 30 年間を経て令和になった今、戦った戦場は人工芝グラウンドに生まれ変わろうと
している。記念の式典に当時のメンバーが集い、薄れゆく記憶をそれぞれ振り絞りながら、
学生時代の思い出を語らうのが今から楽しみだ。

平成１年度　(1989)

★主将：諏訪部伸吾（4）/ 副主将：篠田尚之（4）　林 道雄（4）/ コーチ：北山 慶（昭 61 卒）
金 永俊（朝鮮大学出身）

★最高学年：佐藤考洋 / 西川一郎 / 村尾祐一

★MGR：福田博美（津田塾４）/ 鈴木志野（共立女子４）/ 平山陽子（お茶の水女子４）

金・村尾・佐藤・西川
林・諏訪部・篠田

【試合メンバー】

FW　山村（3）・木村泰（2）・大石（1）

MF　諏訪部（4）・綾織（3）・野田（3）・横山泰（3）・川上（2）・横山昌（2）

DF　村尾（4）・篠田（4）・岡本（3）・川越（3）・赤星（2）・本橋（2）

GK　赤井（3）

【戦績】　東京２部：最下位　０勝２分５敗　→　東京３部Ａ 降格

帝京	創価	東洋	上智	立教	武蔵	国学院
● 0 - 1	● 0 - 4	● 1 - 2	● 0 - 4	△ 2 - 2	● 1 - 3	△ 1 - 1
9/10 小平G	9/17 小平G	9/24 小平G	10/1 小平G	10/8 小平G	10/15 小平G	10/22 小平G

【順位】１ 創価　２ 帝京　３ 武蔵　４ 立教　５ 上智　６ 東洋　７ 国学院　８ 一橋

【記事】・・ 諏訪部伸吾（主将）

前年度の 1・2 年生が相応にリーグ戦を経験し、
また社会人となられた 4 年生のレギュラーは 3 人だったこともあり、平成元年のチームは数的には多くのリーグ戦経験者が残る編成となった。また新 3 年生は部員数もレギュラーの数も最も多く、GK・DF・MF・FW 各ポジションの柱になる選手がいた学年であり、この年次を中心にチームを構成していく構想でスタートした。

また今年度は春のシーズンスタートからディフェンスのスタイルを、
これまでのマンツーマンからゾーンに転換した。豊富な運動量と厳しいボディチェックを 90 分間根気よく継続する従来のスタイルから、時代の要請に沿って、効率的なゾーンディフェンスでボールを奪取した後、バランスよくスピーディに攻撃転換するサッカーを趣向した。そのために当時の大学トップレベルだった朝鮮大学サッカー部出身で、一橋大学の聴講生だった金 永俊氏をコーチとして招聘し、その形を春から練習していった。しかしながら何事も一朝一夕には為されるはずはなく、春はなかなか結果の出ない試合が続いた。また 4 年を中心に多くの怪我人が出て、メンバーが固定できなかったことも、新しいフォーメーションを定着させる障壁となった。

リーグ戦では、ここ数年は無かった 3 点、4 点を奪われる試合も出てしまい、
また僅差の相手にも、あと 1 歩及ばないという形で苦しい展開となった。最終戦は国学院大戦で、この試合に勝てば 7 位で入替戦という大事な試合であり、前半に先制したものの、その後、同点とされ、後半は押し込む場面もあったが得点できず、そのままタイムアウト。最下位で東京都 3 部に自動降格という最悪の結果となってしまった。

もう既に当時から 30 年以上が経過しているが、こうした記事を書いていると、
申し訳なさと情けなさで当時と同様に胸が苦しくなってくる。いろいろとチームに課題はあったが一番の問題は、当時 4 年で主将だった自分がしっかりと覚悟をもってチームに、そしてメンバーの一人ひとりに向き合えなかったことだと今改めて思う。自分個人の経験としては、この経験がその後の社会人としての自分の幅を広げてくれるきっかけとなり、それなりに意味のある経験になった。しかしながら当時 1 年生だった代に、その後 3 シーズンも 3 部で戦わせてしまったことを考えると何の価値もない。改めて、この場を借りて後輩諸君にお詫び申し上げたい。
本当に申し訳なかった。

平成２年度　(1990)

★主将：赤井伸彦（4）/ 副主将：岡本 正（4）　山村 学（4）/ コーチ：山崎 真（平１卒）
★最高学年：綾織次郎 / 川腰桂三 / 川畑好一郎 / 河畑真企 / 志田一孝 / 鈴木栄三
野田純司 / 袴田守一 / 横山泰介
★MGR：阿部みゆき（一橋４）/ 松本園子（一橋４）
上田友紀子（津田塾４）/ 副田尚子（津田塾４）/ 池田陽子（実践女子大４）

川畑・野田・岡本・袴田・鈴木栄・綾織・河畑
川腰・山村・赤井・横山泰・松本

【試合メンバー】
FW　大石（2）・木村義（1）・枡田（1）
MF　野田（4）・横山泰（4）・木村泰（3）・横山昌（3）・栗原（1）
DF　岡本（4）・山村（4）・本橋（3）・河面（1）
GK　赤井（4）

【戦績】　東京３部Ａ：優勝　５勝１分１敗

高千穂	明薬	水産大	農工	東経	東工	日大農獣
○ 4 - 0	○ 8 - 0	○ 10 - 0	○ 2 - 0	○ 4 - 0	△ 2 - 2	● 0 - 1
9/2 小平G	9/9 小平G	9/16 小平G	9/23 小平G	9/30 小平G	10/7 小平G	10/14 小平G

【順位】１ 一橋　２ 東工　３ 農工　４ 東経　５ 日大農獣　６ 高千穂　７ 明薬　８ 水産
★順位決定戦：一橋 vs 大東文化（3部 B1位）△ 1 - 1 / PK 戦 ● 4 - 5
★入替戦出場決定戦：一橋 vs 成城（3部 B2位）● 2 - 3

【記事】・・赤井伸彦（主将）

前年に東京都リーグ２部から３部に降格という屈辱を味わった我々は、
１～２月の自主練期間にも、100 キロか 200 キロだったかは忘れたが、全員に走り込みのノルマを課し、雪辱の新しいシーズンをスタートさせた。春季対抗戦で準優勝した手応えもあり、優勝して１年で２部復帰することしか考えていなかった。夏場に向けて多くの有望な１年生もレギュラーに加え、前年までに馴染んできた４-４-２のフォーメーションに磨きをかけた。MF は１ボランチのひし形、DF はスイーパーを置くスタイルで、サイドバックの攻撃参加を積極的に行い、サイドを広く使って決定力のある FW２トップを活かすスタイルである。最終的なベンチ入りメンバーはすべての学年が数名ずつ入り、バランスのとれた構成になったと記憶している。

元々地力のあった守備力に加えて攻撃力を重点的に強化し、
得点力に自信をつけて挑んだ秋のリーグ戦は、５勝１敗１分（得点 30・失点３）で順調に優勝を果たした。あと１勝すれば昇格できる。AB リーグ優勝校同士の戦い、これに負けても２位同士の勝者との戦い、２回のチャンスがあった。しかし、その１勝が届かず、我々の代の学生サッカー生活は終わった。

卒業から 30 年が経ち、この戦記を書き始めたものの、主将として GK として
残念な記憶しか出て来ず筆が進まなかった。特に昇格のかかった決定戦の第２戦、自らの痛恨のミスで奪われた決勝点（不甲斐ない話だがハイボールの目測を誤り後逸してしまった）と、その後の打ち上げ会で２～３時間ずっと号泣していた記憶、それしか無かったのである。４年間、授業はできるだけサボったが練習はサボらなかったし、嬉しかったことや楽しかったことが沢山あったはずだが、ほとんどが朧げだった。本棚からリーグ戦のプログラムを発見し、ようやく記憶を掘り起こして書くことができた。残念だったけど全力を尽くしたので悔いはないし、もう一度とも思わない。ただ力が足りなかっただけだと自分には言い聞かせている。だけど、みんなごめんね。

まあでも、学生時代に全力を傾けたい事に出会えたのは良かったし、
あの時、共に戦った同期・先輩・後輩・マネージャーとは、いつ会っても、まるで昨日も一緒だったかのように話せる。そんな仲間ができたことは本当に良かった。そろそろ社会人生活も終盤に差し掛かり、子育てとかも卒業して暇になる頃だろうから、集まってゆっくり飲みたいものだ。最後に、あの苦労した土のグラウンドが人工芝になるとは思ってもみなかったことで、非常に嬉しい。現役の試合を観に行くのを楽しみにしている。

平成 3 年度　(1991)

★主将：本橋 聡（4）/ 副主将：木村泰彦（4）　赤星真一（4）/ コーチ：山崎 真（平１卒）
★最高学年：川上 耕 / 三枝正人 / 橋本直哉 / 松浦照二 / 水谷 健 / 横山昌幸
★MGR：石橋美佳子（一橋４）/ 岡田真紀子（一橋４）/ 大倉容子（実践女子大４）

川上・橋本・水谷・横山昌・木村泰・赤星
岡田・石橋・三枝・松浦・本橋

【試合メンバー】

FW　大石（3）・枡田（2）・木村義（2）
MF　栗原（2）・横山（4）・木村泰（4）・永山（1）
DF　本橋（4）・河面（2）・向畑（2）・三枝（4）
GK　松浦（4）

【戦績】　東京３部Ａ：５位　１勝４分２敗

日大商	電通大	高千穂	日大農獣	農工	東経	東工
● 1 - 2	△ 0 - 0	○ 2 - 1	△ 2 - 2	△ 1 - 1	△ 0 - 0	● 0 - 1
9/8 小平G	9/15 小平G	9/22 小平G	9/29 小平G	10/6 小平G	10/13 小平G	10/20 小平G

【順位】１　農工　２　東工　３　東経　４　電通　５　一橋　６　日大農獣　７　日大商　８　高千穂

【記事】・・赤星真一（副将）

前年に３部Ａブロックで優勝するも、その後の昇格決定戦と入替戦進出決定戦に敗れて１年での２部復帰を逃して迎えたシーズン。前シーズンとほぼ変わらない高い得点能力を有するFWと攻撃的MF、主将本橋を中心としたDFで安定した戦いを見せるはずだった。しかし初戦を１-２で落とし歯車が狂うと、攻守がかみ合わない試合が続き、勝ち点が積み上がらない。７試合での総得点が前年の30から６に激減したことは、このシーズンの不調を象徴すると共に、サッカーが繊細なチームスポーツであることの一端を示していよう。結局わずか１勝の５位でリーグ戦を終え、２部復帰は翌年に持ち越されることとなった。

平成４年度　(1992)

★主将：向畑哲也（4）/ 副主将：宮嵜弘喜（4）　大石嘉彦（4）　/ GM：安部太郎（4）
★最高学年：池内久泰 / 森田 稔
★MGR：杉山雅子（一橋４）/ 高橋郁子（津田塾４）/ 種子田 香（津田塾４）

宮嵜・安部・大石・向畑・森田・池内

【試合メンバー】

FW　木村義（3）・桝田（3）
MF　栗原（3）・中村進（2）・橋口（2）・永山（2）
DF　西郷（2）・小野田（3）・河面（3）・向畑（4）
GK　岡野（3）・重満（2）

【戦績】　東京３部Ａ：２位　４勝２分１敗　→　東京２部 昇格

電通大	東工	東経	水産大	農工	日大商	日大農獣
● 1 - 3	○ 3 - 1	△ 1 - 1	○ 12 - 0	△ 1 - 1	○ 9 - 2	○ 5 - 0
9/13 小平G	9/20 小平G	9/27 小平G	10/4 小平G	10/11 小平G	10/18 小平G	10/25 小平G

【順位】１ 東工　２ 一橋　３ 東経　４ 日大農獣　５ 農工　６ 電通　７ 日大商　８ 水産

★２位プレーオフ：一橋 vs 都立大学（３部B）　○　（スコア不詳）
★入替戦出場決定戦：一橋 vs 東京工業大学（３部Ａ）　○　（スコア不詳）
★入替戦 第１戦：一橋 vs 玉川大学（２部７位）　△ ０ - ０　於駒沢競技場
　　第２戦：一橋 vs 玉川大学（２部７位）　○ ４ - ３　於小平G

【記事】・・ 安部太郎（GM）

初戦の電通大に１-３で負けたことが全ての始まりだった。今でも鮮明に覚えている。残暑がまだ厳しい中での試合で、ディフェンスの裏にボールを蹴られては走らされる展開に次第に体力が消耗し、勝てると思っていた相手に３失点の惨敗。試合後はお通夜状態で、GMだった私は “自分たちのサッカーができなかった、リーグ戦とはやはり厳しいものだ”と痛感し、皆にかける言葉もない。後日リーグ戦直前の練習に関して“こんな暑い中で走りの練習をするなんて有り得ない、体力が消耗していた”という後輩DFの言葉を伝え聞き、初めてリーグ戦前の調整の失敗が敗因であったことに気付かされる。次週の練習からはミニゲームとシュート練習程度の軽量メニューに切り替え、体力回復とハングリー精神を今一度持って試合に臨むべく方針を転換した。それが功をそうしたか、第２戦以降はチーム本来のサッカーが復活し、無敗で２位を確保。プレーオフと入替戦の計４試合は激しい接戦が続いたが、粘り強く戦い抜き、めでたく２部昇格を勝ち取った。パスサッカーを軸とする攻撃的なチーム作りを目指した１年間の練習が、最後に実を結んだことに胸をなでおろした瞬間でもあった。

平成５年度 （1993）

★主将：栗原博昭（4）/ 副主将：木村義幸（4）/ GM：松井伸太郎（4）
★最高学年：池内久泰 / 岡野貴之 / 小野田博文 / 河面洋泰 / 向畑哲也
林田勝則 / 桝田 健 / 宮嵜弘喜 / 吉崎正彦
★MGR：倉田真由美（一橋４）

【試合メンバー】

FW 木村義（4）・桝田（4）・神谷（3）
MF 栗原（4）・永山（3）・橋口（3）・鈴木仁（1）
DF 小野田（4）・河面（4）・大場（3）・西郷（3）・志村（1）・福田泰（1）
GK 岡野（4）・重満（3）

【戦績】 東京２部：７位 １勝２分４敗 → 東京３部Ｂ 降格

亜細亜	成蹊	大東大	上智	成城	学習院	日大文理
● 0 - 1	● 1 - 2	△ 1 - 1	● 0 - 5	△ 0 - 0	○ 4 - 0	● 1 - 2
9/12 小平G	9/19 小平G	9/26 小平G	10/3 小平G	10/10 小平G	10/17 小平G	10/24 小平G

【順位】１ 上智 ２ 亜細亜 ３ 成蹊 ４ 大東大 ５ 成城 ６ 日大文理 ７ 一橋 ８ 学習院

河面・桝田・木村義・向畑・栗原・宮嵜・林田
池内・岡野・松井・小野田・吉崎

【記事】・・ 栗原博昭（主将）

27 年前のことで記憶が不確かなところもあるが、1993 年のリーグ戦を振り返ってみたい。
前年に東京都 3 部から入替戦を経て悲願の 2 部昇格を決めた一橋は、前年からの中心メンバーが多く残り、そこに 20 人近い新 1 年生を加えた布陣で秋のリーグ戦に臨んだ。4 年生も含めて初の東京都 2 部であったが、練習試合等の結果もあり 2 部でも戦える自信を感じていたように思う。

初戦は前年に 1 部から降格してきた亜細亜大で、個人技や体力的には劣勢であったものの、一橋は組織力でカバーしつつ競った展開に。最終的に 0-1 で敗れはしたが、互角に戦えたことで自信を手にした一戦であった。2 戦目以降もなかなか勝ち星を得ることができず大敗した上智戦を除くと、いずれも 1 点差の敗戦か引き分けで、もう一歩踏ん張りきれなかったという印象がある。それでも第 6 戦の対学習院戦では意地を見せ、4-0 の大勝で 2 部初勝利を記録した。最終節の日大文理戦は 2 部残留をかけての直接対決となったが、ここでも 1 点差で競り負け結果 2 部 7 位。この年から下位 2 チームを自動降格とする制度変更もあり、残念な結果となってしまった

初戦の敗戦スタートから切り替えて 2 部昇格を勝ち取った前年と異なり、
初めての 2 部で結果が出ない中、チームとしての自信が徐々に揺らいでしまったことが 7 位という結果につながったのかもしれない。それでも 4 年生は入部以来の念願であった東京都 2 部の試合を経験し、その厳しさや楽しさを感じることができた貴重なシーズンであったと思う。27 年を経て当時を振返ると、いろいろなことが思い出される。充実した 4 年間を一橋ア式で過ごすことができ幸せだった。改めて仲間たちに感謝したい。

平成 6 年度　(1994)

★主将：永山研一（4）/ 副主将：釼持隆雄（4）　西郷行保（4）/ GM：松井伸太郎（5）
★最高学年：朝倉寛行 / 粟津義一 / 井上健一 / 大場恒和 / 尾崎 真 / 角田真一 / 鎌倉一輝
神谷佳典 / 重満紀章 / 篠原弘樹 / 中村 克 / 中村 進 / 橋口晴彦 / 馬場清大
★MGR：河村里栄（一橋４）/ 白鳥由紀（津田塾４）/ 長瀬智愛（津田塾４）

【試合メンバー】
FW　鈴木宏（2）・朝倉（4）・神谷（4）
MF　永山（4）・中村進（4）・橋口（4）・西（2）
DF　西郷（4）・福田泰（2）・志村（2）・大場（4）・杉本（2）
GK　重満（4）

【戦績】　東京３部Ｂ：優勝　５勝２分０敗　→　東京２部 昇格

武蔵工	桜美林	工学院	高千穂	都立大	武蔵	自由
○ 13 - 0	○ 4 - 0	◎ 3 - 0	○ 1 - 0	△ 2 - 2	○ 5 - 0	△ 1 - 1
9/11 小平G	9/18 小平G	9/25 小平G	10/2 小平G	10/9 小平G	10/16 小平G	10/23 小平G

◎不戦勝

【順位】１ 一橋　２ 自由　３ 都立大　４ 高千穂　５ 武蔵　６ 武蔵工　７ 工学院　８ 桜美林

馬場・橋口・鎌倉・朝倉・釼持・重満・粟津
松井・神谷・角田・篠原・河村・白鳥
井上・中村克・永山・大場・中村進・西郷・尾崎

【記事】・・ 神谷佳典

永山（主将）・松井（GM）のもとリーグ優勝を目指し、
例年より早い２月中旬からシーズンイン。大場（学連担当）の手配で春・夏・秋と戦略的に
練習試合を組む。夏合宿は山中湖の三興荘にて。またシーズン当初からチームをＡＢに分け、
戦力の底上げを図る。Ｂチームの指揮は中村進（１年のブランクから復帰）と橋口が担当。
その成果もあり２年生４名がレギュラーに定着する。フォーメーションは ４-４-２ を採用した。

秋季リーグは開幕から負けなしで首位を維持し、６戦を終えて勝ち点11。
２位は勝ち点10で迫る自由学園。最終戦の直接対決は、優勝をかけた大一番となる。
試合は１点を先制され、後半も得点が奪えず苦しい展開となるが、敗北の気配が色濃くなった
後半のロスタイム、FW鈴木が倒されてPKを獲得。これをMF中村が決めたところで試合終了。
劇的な幕切れで優勝、２部昇格が決まった！ 試合後はプールの横で盛大にビールかけが始まる。
勝利を確信していた後輩たちが事前に用意していたのだ。感謝！

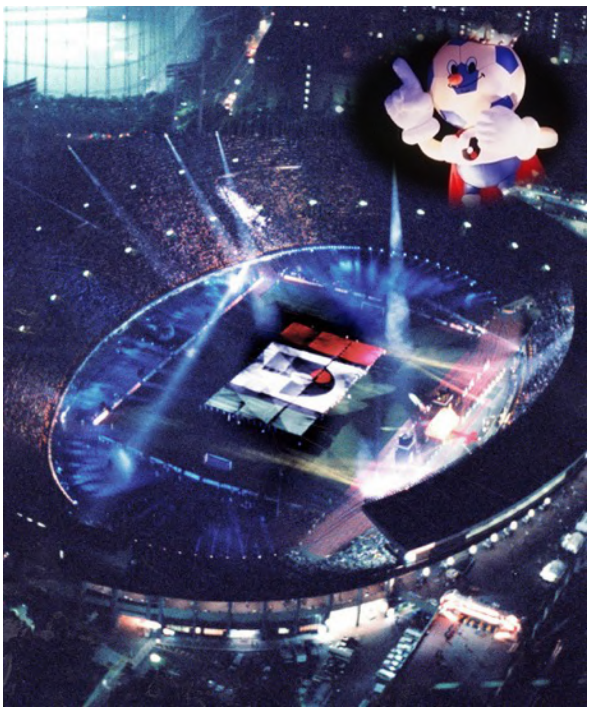
３部リーグ優秀選手には好セーブを連発した、GK重満（4）。
７戦でわずか３失点というリーグ最少失点に貢献した、DF西郷（4）・DF福田泰（2）。
そして得点・アシストを量産した、MF中村進（4）・FW鈴木仁（2）が選ばれる。

私大と違いセレクションがない国公立の大学にとって、
如何にたくさんの新入生を確保するかがチーム強化のひとつのカギになる。その点、
本年度の４年生と２年生は人数的にも人材的にも豊富で、チームの底上げに大きく貢献した。

本年度のサッカー部員は、９名の女子マネも
含めると総勢６０名近くの大所帯で、これが
チームをＡＢ２つに分けた背景にある。
また部員が増えたのは前年（1993）５月に
Ｊリーグが開幕し、それに向けての盛り上がり
効果もあったと思われる。

なお蛇足ながら、Ｊリーグ開幕式及び開幕試合
ヴェルディ対マリノスに、都学連経由の要請に
よりボランティアとして参加した。

他大学の部員が「オリジナル10」の
チーム旗を持って入場する中、我々は栄えある
メインスタンドの中央からＪリーグ旗を持って
行進した。いい思い出である。



平成７年度　(1995)

★主将：徳重泰治（4）/ 副主将：朝倉寛行（5）　深田道就（4）/ GM：船橋義也（4）
★最高学年：江尻昌彦 / 中村 克 / 船場貴文 / 町塚栄介 / 安田治靖
★MGR：三由奈都子（一橋４）/ 塩入裕子（津田塾４）/ 津浦しのぶ（津田塾４）

【試合メンバー】
FW　朝倉（4）・森（2）
MF　深田（4）・鈴木仁（3）・西（3）・山内（2）
DF　福田泰（3）・久保（3）・志村（3）・畑（3）
GK　前田（3）

【戦績】　東京２部：５位　３勝１分３敗

帝京	日大文理	明学	日大農獣	東大	東経	立教
○ 1 - 0	● 0 - 3	○ 3 - 1	○ 7 - 2	△ 0 - 0	● 0 - 2	● 0 - 1
9/10 帝京	9/24 東経	10/1 小平G	10/8 小平G	10/15 小平G	10/22 小平G	10/29 帝京

【順位】１ 日大文理　２ 東経　３ 東大　４ 立教　５ 一橋　６ 帝京　７ 明学　８ 日大農獣

＊山中湖で夏合宿

江尻・安田・船場・船橋・朝倉
徳重・深田・町塚

【記事】・・ 徳重泰治（主将）

暑い夏だった。いまでは珍しくもないが、35度超えの猛暑日が連日続いていた。
我々の代は谷間の世代。３年までにスタメンに定着している者はおらず、前年度に３部から２部に昇格した際の主要メンバーは上下の代。主力であった先輩たちはごっそり抜けてしまっている。
加えて主将であった自身は膝の靭帯断裂で1日も練習に参加できないありさま。そんな状態でリーグ戦を迎えていた。

初戦で勢いに乗った。
２年前の新人戦、決勝戦で１対９の屈辱的な大敗を喫していた帝京大学に１対０の完封勝ち。
続く第２戦は惜しくも敗れたものの３戦目・４戦目を順当に勝ち進み、４戦目終了時点で首位に立ち、１部昇格の可能性も。試合終了後の円陣で、これまでにない盛り上がり。ところがその後は尻すぼみで、引き分けをはさんで最終２戦で敗退。一時は１部昇格の夢を見ながらも、最終的には５位でシーズンを終えた。

最終戦終了後、順位が確定して、心底安堵している自分がいた。
その感覚は今でも忘れずに残っている。それは谷間の弱小世代の我々でも、先輩たちが築いた頼もしいチームを頼れる後輩たちにバトンをしっかりと渡すことができたという安堵感であった。
今回、100年史の原稿を書かせていただくにあたって、かすれた記憶を必死に呼び起こしていた。
そして改めて思った。100年の間こうしてバトンが引き継がれてきたこと、そしてこれからも引き継がれ続けるのであろうと。

平成 8 年度 （1996）

★主将兼 GM：鈴木仁也（4）/ 副主将：久保輝幸（4） 福田泰久（4）
★最高学年：宇津野智哉 / 大野彰之 / 幸木 一 / 今野一広 / 志村 亮 / 城堀真也
杉本真吾 / 鈴木宏俊 / 高橋伸介 / 田中智之 / 戸田康弘 / 丹尾彰彦
西 英俊 / 畑 洋平 / 福井 葉 / 船橋義也 / 前田 健
★MGR：町駒英里子（一橋４）/ 伊藤 綾（津田塾４）/ 村越由季子（津田塾４）

【試合メンバー】
FW 鈴木宏（4）・森（3）
MF 鈴木仁（4）・山内（3）・西（4）・吉野（2）
DF 久保（4）・福田泰（4）・志村（4）・諸石（2）
GK 宇津野（4）

志村・町駒・高橋・戸田・田中・宇津野・前田・鈴木仁・丹尾・船橋・鈴木宏
城堀・福井・久保・幸木・西・大野・町塚

【戦績】　東京２部：５位　３勝４敗

帝京	大東大	東工	成蹊	東大	立教	国学院
● 1 - 6	● 0 - 5	○ 1 - 0	○ 2 - 1	○ 1 - 0	● 0 - 2	● 1 - 2
9/15 成蹊	9/29 小平G	10/6 立教	10/13 成蹊	10/20 小平G	10/27 立教	11/3 小平G

【順位】１　国学院　２　帝京　３　立教　４　大東大　５　一橋　６　東大　７　成蹊　８　東工

【記事】・・　鈴木仁也（主将兼GM）

４年生にとって２期目の東京都２部リーグ戦は厳しいスタートとなった。
初戦の帝京大学は、当時帝京高校や清水東などサッカー名門校卒の選手が揃い、１-６で惨敗した。
その後、勝ちや引き分けを積み重ねて盛り返し、勝ち負けが均衡する中で東大との対戦を迎えた。
その結果で最終的なリーグ戦での浮き沈みが大きく左右されるという重要な一戦だった。東大は
当時から個人の基礎技術が確立しており、人工芝のグラウンドで専門の外部コーチを招聘して
戦術面でも統制のとれたスマートなサッカーをするチームであった。一橋は序盤から相手の冷静な
ボール回しにも地道にポジション修正を繰り返し、常に球際で負けず、全員が集中力を切らすこと
なく前半は０-０で終了。後半も高い集中力を保ち、自陣ゴール正面３メートル前での絶体絶命の
相手シュートも全員でゴールを死守。その直後に３年 FW 森が、高い身体能力で劇的なヘディング
シュートを決め、１-０で勝利。その後のリーグ戦も崩れることなく２部残留を確保し、シーズンは
終了した。H９年卒のメンバーは 19 人と比較的多くの仲間が１年次から切磋琢磨し、最終年度を
迎えていた。１～３年生も個性的な選手がレギュラー争いに加わる中、試合の MOM が毎回変わる
全員で戦うチームだったと思う。

平成 9 年度　(1997)

★主将：長谷川 敦（4）/ 副主将：長谷川 真（4）/ GM：山内修平（4）
★最高学年：香取健太郎 / 幸木 一 / 潮見健介 / 丹尾彰彦 / 畑 洋平 / 福井 葉 / 森 正則
★MGR：中澤陽子（一橋４）

香取・森・幸木・長谷川真・畑
潮見・福井・長谷川敦・山内・丹尾

【試合メンバー】
FW　幸木（4）・森（4）・吉野（3）
MF　潮見（4）・長谷川敦（4）・角井（3）・進藤（3）・松水（1）
DF　香取（4）・畑（4）・栗崎（3）・長谷川貴（3）・佐次（1）
GK　高山（2）

【戦績】　東京２部：最下位　０勝３分４敗　→　東京３部Ａ 降格

東大	学習院	都立大	朝鮮	創価	立教	大東大
△ 0 - 0	● 0 - 2	△ 0 - 0	● 1 - 3	● 1 - 2	△ 1 - 1	● 1 - 2
9/14 東大	9/21 小平G	9/28 小平G	10/5 小平G	10/12 小平G	10/19 小平G	10/26 立教

【順位】１ 学習院　２ 大東大　３ 朝鮮　４ 立教　５ 創価　６ 東大　７ 都立大　８ 一橋

【記事】・・山内修平（GM）
厳しい戦績が続いたものの、今振り返ってみると、毎年メンバーの変わる
大学スポーツの難しさ・楽しさを仲間と共に経験した実りある１年であった。

冬　６名という極めて少ない４年生部員でチームを引っ張る緊張感と覚悟を胸に、
シーズンイン前から新年度の方針・年間計画等、繰り返し意見を交わす。
新しいシーズンへの期待と前年までのレギュラーメンバーの大量卒業による不安が入り混じる
難しいスタートだったが、前年の４年生が数名卒業せず部に残ることを決断されたことが、
戦力面でもチーム運営面でも心強かったことを記憶している。

春　小平での春合宿。有望な１年生が多数入部し、新チームの本格始動となる。
昨年までの試合経験が少ないメンバーも多く、チームの底上げ、試合経験の積み重ねを図る。
しかしケガ人が多く、一時はフィールドプレーヤーがGKを担って試合に臨むなど、
メンバーやポジションが定まらず厳しい時期となったが、徐々にチームの結束・自信を高める。
内容の良い試合と悪い試合の差が大きいのが課題だった。

夏　チームの練度を高めるべく、山中湖合宿へ。
引き続きケガ人が多くメンバーが固まらない中、副将の長谷川（真）が率いるＢチームから
昇格したメンバーがチームに勢いを与えてくれる。リーグ戦まで残り僅かという焦りは
あったものの、チームとして成長した自信と勢いを勝ちえた合宿であった。

秋　リーグ戦の初戦は、対東大。
球際での激しさに、東大の昨年の敗戦の雪辱にかける思いが伝わる。
一橋は左サイドの吉野（3）・佐次（1）が再三チャンスを演出し、終始押し気味に試合を進めるが
勝ちきれず、０-０で終了。初戦の無得点が祟ったのか第３戦目まで得点が無く、１敗２分。
この得点力不足を解消すべく吉野（3）をMFからFWへコンバートし、森（4）とのツートップで
４戦目以降に臨む。得点力不足は解消されるものの、勝てない試合が続くまま、リーグ戦が終了。
リーグ後半からの活躍が光った1・2年生メンバーに、次年度での雪辱を託す。

戦績は振るわずとも指導してくださった赤星監督をはじめOB諸先輩方、
最後までファイトを見せ続けてくれた後輩に、この場を借りて改めて感謝の意を表します。

平成 10 年度 （1998）

★主将：吉野徹之（4）/ 副主将：栗崎知也（4）　長谷川貴久（4）/ GM：角井朋之（4）
★最高学年：上澤 淳 / 進藤潤耶 / 濱田能史 / 増田 允 / 諸石 央
★MGR：宇陀留美（一橋４）

進藤・吉野・増田・栗崎・長谷川貴
宇陀・諸石・濱田・角井・上澤

【試合メンバー】
FW　増田（4）・伊佐木（3）・川村（3）・竹内（2）
MF　進藤（4）・吉野（4）・長田（2）・松水（2）・岡田（1）・日影（1）
DF　角井（4）・長谷川貴（4）・諸石（4）・猪岡（3）・城近（3）・佐次（2）・佐藤丈（2）・示野（2）
GK　高山（3）・市村（2）

【戦績】　東京３部Ａ：優勝　６勝１敗　→　東京２部 昇格

水産大	武蔵工	電通大	武蔵	明星	山梨学院	東工
○ 8 - 0	○ 2 - 0	○ 3 - 0	● 0 - 2	○ 1 - 0	○ 1 - 0	○ 1 - 0
9/13 小平G	9/20 小平G	9/27 小平G	10/4 小平G	10/11 小平G	10/18 小平G	10/25 小平G

【順位】１ 一橋　２ 武蔵　３ 明星　４ 東工　５ 山梨学院　６ 電通大　７ 武蔵工　８ 水産

【記事】・・角井朋之（GM）

都３部で戦うこととなったシーズン、１年での２部復帰を果たすだけでなく、
関東選手権都予選（兼天皇杯予選）突破、３・４部春季対抗戦優勝も目標に取り組んだ。しかし、
関東選手権予選は明治学院大には勝利したが、２戦目で大東文化大に敗戦し、予選突破を逃した。
続く春季対抗戦は予選リーグを難なく首位通過したものの、決勝トーナメント２回戦で東大に
勝てず、敗退。秋季リーグは開幕３連勝で首位に立っていたが、４戦目の武蔵大に０-２で敗戦、
３位に後退。１位自動昇格のためには残り試合１つも落とせない状況となった。ラスト３試合に
向け、練習では球際の強さと戦術確認を徹底、明星大、山学大には１-０で勝利。最終節の東工大
戦は終了間際に交代出場選手がゴールを決め、リーグ優勝と都２部復帰を果たすことができた。
ケガ人も多く、秋季リーグ戦出場メンバーは部員の半数にも及ぶ総力戦であったが、全部員の
協力と OBOG の皆様のサポートがあり、乗り切ることができたシーズンであった。

我々の代は３年生まで ２部で戦い、最高学年になって初めて３部を経験した。
優勝し自動昇格するためには引き分けすら命取りであり、２部での３年で叩き込まれた堅守速攻を
徹底し戦力に勝る強豪校相手にしぶとく勝ち点を積み上げるスタイルを根本的に切り替える必要が
あった。試行錯誤しながらチーム作りを進めてきた GM の自分をはじめ首脳陣は、必達ともいえる
１年での２部復帰が懸かったリーグ戦開幕を前にプレッシャーを感じていた。痛恨の１敗を喫した
後に思い出したのは、１年次の帝京大との開幕戦での衝撃の完封勝ち、２年次の残留に繋がる東大
戦での辛勝等、極めて困難なミッションを達成すべくチームを鼓舞し戦われた先輩方の姿であり、
自分たちのサッカーを原点に立ち返り徹底することで優勝が果たせたのは、３年次までの諸先輩方
の下でのかけがえのない経験と、このチームに脈々と引き継がれた伝統のおかげだったと感じる。
個人的には当初掲げた目標すべては実現できなかったが、責務を全うできたのは本当に良い経験で
あり、改めて感謝を申し上げたい。また、プレーを続けるために、選手兼 GM という立場を快く
認めてくれた４年生、本当にありがとう！

平成 11 年度 （1999）

★主将：伊佐木 航（4）/ 副主将：朝倉俊明（4）/ GM：城近英司（4）
★最高学年：青井 威文 / 猪岡君彦 / 川村徳佐 / 栗崎知也 / 高山勝裕
濱田能史 / 森中 剛 / 諸石 央 / 吉野徹之
★MGR：川嶋瑠衣（一橋４）/ 中田貴子（一橋４）/ 内藤聖子（津田塾４）

【試合メンバー】

FW 伊佐木航（4）・竹内（3）・須田（2）・土屋（1）
MF 朝倉（4）・佐次（3）・長田（3）・日影（2）・原田（3）・岡田（2）
DF 城近（4）・佐藤丈（3）・示野（3）・猪岡（4）・森松（2）
GK 高山（4）

青井・川村・中田・内藤・川嶋・高山・城近
森中・猪岡・伊佐木航・朝倉・諸石

【戦績】 東京２部：６位　２勝１分４敗　→　東京３部Ｂ 降格

大東大	日大文理	立教	帝京	成蹊	日大商	東大
△ 1 - 1	○ 2 - 1	● 1 - 3	● 1 - 6	○ 5 - 3	● 0 - 2	● 0 - 2
9/12 小平G	9/19 小平G	9/26 立教	10/3 小平G	10/10 東大	10/17 小平G	10/24 小平G

【順位】１ 帝京　２ 立教　３ 東大　４ 大東大　５ 成蹊　６ 一橋　７ 日大商　８ 日大文理

★入替戦：一橋 vs 創価大（３部２位POの勝者） ● ０ - ２　11/28

【記事】・・ 伊佐木 航（主将）

昨年東都３部で優勝を果たし２部に昇格して最初の１年を、
我々は最高学年としてチームの牽引役を担った。
個々人の実力で言えば、先輩や後輩の力を借りながらのチーム作りではあったが、
一人ひとりがサッカー部に対して情熱を注ぎ、誇りと使命感を持って全員が取り組んでいた。
しかし結果としては入替戦で敗北を喫し、３部降格という結果になってしまった。
申し訳ない気持ちと悔しさで、その当時を思い出すと今でもやりきれない想いが込み上げてくる。
それでも自分たちのやってきたことを振り返れば、試合に出られる者も、出られない者も、
マネージャーを含めて全員が、サッカー部の大事なメンバーの一人として自覚を持ち、
日々の練習に、試合に臨めていたのではないか、だとすれば我々は、この部に結果以上の
大事なものを残せていたのではないか、今ではそう思うこともあり、そうであったと願いたい。

平成 12 年度　(2000)

★主将：長田健一（4）/ 副主将：佐次徹也（4）/ GM：示野功雄（4）
★最高学年：朝倉俊明 / 伊佐木 壮 / 伊藤 祐 / 木崎哲浩 / 佐々木伸太郎
佐藤丈治 / 竹内浩哉 / 原 慶一 / 原田英治 / 横山俊之
★MGR：樫本真弓（一橋４）/ 小林倫子（一橋４）/ 常深文恵（一橋４）/ 慎 裕淑（津田塾４）

＊１年次の夏合宿 山中湖のグラウンドにて

長田・佐藤丈・慎
佐々木・松水（途中退部）・原田・竹内・示野・樫本
小林・原・木崎・伊藤
伊佐木壮・佐次・市村（途中退部）・常深

【試合メンバー】

FW　伊藤（4）・木崎（4）・竹内（4）・須田（3）
MF　朝倉（4）・長田（4）・原（4）・横山（4）・岡田（3）・日影（3）・高橋進（2）
DF　佐々木（4）・佐次（4）・佐藤丈（4）・示野（4）・原田（4）・森松（3）・酒井（2）
GK　伊佐木壮（4）・大久保（2）

【戦績】 東京３部Ｂ：２位　５勝１敗

桜美林	工学院	高千穂	玉川大	外語	都立大	日大文理
○ 3 - 0	○ 3 - 2	不参加？	○ 3 - 0	○ 1 - 0	○ 3 - 0	● 0 - 3
9/10 小平G	9/17 小平G	9/24 小平G	10/1 小平G	10/8 小平G	10/15 小平G	10/22 小平G

【順位】１ 日大文理　２ 一橋　３ 外語　４ 工学院　５ 玉川大　６ 桜美林　７ 都立大

★プレーオフ：一橋 vs 成城大（３部Ａ２位）　● ０－２　→　東京３部Ｂ 残留

【記事】・・ 長田健一（主将）

平成 12 年度は、４年生を中心に１～３年生も満遍なく各ポジションに配置し、
バランスのとれたチームだった。目標は東京都２部への再昇格であり、早い段階から伝統的な
４-４-２のフォーメーションを固め、完成度の高いサッカーを目指したが、就職氷河期という
時代も重なり、春先は４年生の練習及び試合への参加が限られたことでチームの成長は停滞した。
しかしながら、６月以降は全体練習の士気が上がり始め、各メンバーも徐々に調子を上げ、
８月の波崎合宿を通して、チームを秋のリーグ戦で戦える状態にまで持っていくことができた。

リーグ戦は、毎週ヒーローが入れ替わる形で順調に白星を重ねていったが、
残念ながらリーグ終盤の天王山の一戦で勝ち切ることができず、１位昇格を逃してしまった。
また、リーグ戦後のプレーオフでも結果を残すことができなかった。あと一歩のところで目標を
達成できず、今でも悔しい思いを持つ４年生は多いが、マネージャーも含め、１年の入部時から
４年までほとんど人数が変わらず、最後まで一緒にサッカーができたこと、また強いチーム作りの
ために自ら年間計画を立てて運営できたことは大きな財産となっている。

平成 13 年度　(2001)

★主将：須田尚宏（4）/ 副主将：森松央志（4）/ GM：岡田 薫（4）
★最高学年：阿島友昭 / 安部耕平 / 武 直毅 / 塚田陽一郎 / 日影武也
★MGR：梶原千草（一橋４）/ 尾野本真由（津田塾４）/ 高岸由香里（津田塾４）/ 林 優子（津田塾４）

【試合メンバー】

FW　安部（4）・須田（4）・福富（2）・松井（2）
MF　岡田（4）・酒井（3）・高橋進（3）・土屋（3）・小林康（1）・高宮（1）・前田（1）
DF　塚田（4）・袴田（2）・林良（2）
GK　大久保（3）・中川（2）

高岸・尾野本・林・須田・阿島・安部・森松・岡田

【戦績】　東京３部Ｂ：５位　２勝２分３敗

山梨学院	都立大	玉川大	桜美林	成蹊	工学院	外語
● 0 - 3	△ 0 - 0	● 1 - 2	○ 4 - 1	● 0 - 3	○ 5 - 1	△ 1 - 1
9/2 小平G	9/9 都立大	9/16 小平G	9/23 小平G	9/30 小平G	10/7 小平G	10/14 小平G

【順位】１ 成蹊　２ 桜美林　３ 玉川大　４ 外語　５ 一橋　６ 山梨学院　７ 都立大　８ 工学院

【記事】・・ 岡田 薫（GM）

平成13年度の４年生メンバーは、入部した１年目に２部への昇格、
２年目に３部へ降格、３年目はプレーオフの末に２部への昇格を逃すという経験をしており、
４年目は当然ながら３部での優勝・昇格を目指して秋のリーグ戦に臨んだ。同じ３部Ｂリーグで
優勝争いをするであろうと考えていた成蹊大との対戦を５戦目に控え、それまでは全勝で進めて
成蹊大と直接対決をするはずだった。ところが、実際には初戦 0 - 3 の完封負けに始まり、
３戦終わった時点で２敗１分と早くも自力優勝の可能性が消滅。５戦目の成蹊大に敗退した後は
残留争いをする展開となった。

結果は３部で５位という過去にもあまり例のない悪い戦績となり、
翌年の４部降格への流れを作ってしまった。
忘れることのできない苦い思い出となったが、苦労を共にした同期との結束は強く、
20年が経った今でも集まって当時の思い出話で盛り上がる仲間となっている。

平成 14 年度　(2002)

★主将：高橋 進（4）/ 副主将：土屋雅慎（4）/ GM：林 良二郎（3）
★最高学年：稲垣祐三 / 大久保 穣 / 酒井 淳 / 長谷嘉之
★MGR：小寺暁子（一橋４）/ 宿輪小百合（一橋４）/ 山崎美和（一橋４）/ 柳沢絵美（津田塾４）

宿輪・山崎・小寺・稲垣・高橋・長谷・大久保・酒井

【試合メンバー】

FW　酒井（4）・木村英（1）・門司（1）
MF　高橋進（4）・高宮（2）・竹石（2）・團（2）・前田（2）
DF　袴田（3）・林良（3）・小林康（2）・金子（1）・溝端（1）
GK　冨田（1）

【戦績】　東京３部Ｂ：７位　１勝２分４敗　→　東京４部Ｃ 降格

桜美林	玉川大	大東大	朝鮮	山梨学院	農工	外語大
△ 1 - 1	● 1 - 2	● 1 - 2	● 1 - 5	● 1 - 2	○ 7 - 0	△ 1 - 1
9/1 小平G	9/8 小平G	9/15 小平G	9/22 小平G	9/29 小平G	10/6 小平G	10/13 小平G

【順位】１ 朝鮮　２ 玉川大　３ 大東大　４ 桜美林　５ 山梨学院　６ 外語　７ 一橋　８ 農工

【記事】・・ 高橋 進（主将）

平成14年度は、年間を通して大変厳しいシーズンであった。
秋のリーグ戦では初戦の桜美林戦で引き分けに終わり、２戦目３戦目は終了間際に失点を許す形で敗戦。４戦目の朝鮮大には力の差を見せつけられ、その後も悪い流れを変えられないまま、降格という結果になってしまった。スタメンの大半を１・２年生が占めるという例年とは異なる戦いであった中、最高学年の４年生としてチームを勝利に導けなかったことに悔しく申し訳なく、言葉にできない思いがこみ上げてくる。不甲斐ないリーグ戦となったがマネージャーを含む一人ひとりが同じ目標に向かってチーム運営に真剣に携わり、チームのことを第一に考えて行動していたことは確かなことであり、そんな仲間と同じ時間を共有し活動できたことに感謝している。

平成 15 年度 （2003）

★主将兼 GM：林 良二郎（4）/ 副主将：林 健一郎（4） 松井悠記（4）
★最高学年：永井美澄 / 中川貴弘 / 袴田賢吾
★MGR：土川 恵（一橋４）/ 品川真衣（津田塾４）/ 田口紗絵子（津田塾４）/ 築地綾乃（津田塾４）

築地・土川・品川・田口
中川・袴田・林良・松井・林健・永井

【試合メンバー】

FW　木村英（2）

MF　高宮（3）・竹石（3）・團（3）・前田（3）・門司（2）・中島智（1）

DF　林良（4）・小林康（3）・金子（2）・溝端（2）

GK　冨田（2）

【戦績】　東京４部Ｃ：優勝　６勝１分０敗　→　東京３部Ｂ　昇格

商船大	明薬	水産大	日大農獣	二松学舎	電通大	日大商
○ 6 - 0	○ 4 - 1	△ 1 - 1	○ 5 - 0	○ 6 - 1	○ 3 - 0	○ 4 - 0
9/7 小平G	9/14 小平G	9/21 小平G	9/28 小平G	10/5 小平G	10/12 小平G	10/19 小平G

【順位】1 一橋　2 日大商　3 二松学舎　4 日大農獣　5 水産大　6 商船大 7 明薬　8 電通大

【記事】・・ 林 良二郎（主将）

前年、ア式蹴球部史上、最初にして最後の４部降格という結果に終わり、
４部での戦いとなった 2003 年。「1 年での 3 部復帰」ではなく「2 年かけての 2 部昇格」を
目標におき、1 年間を戦うこととなった。無事 3 部復帰を果たしたリーグ戦のメンバーの大半は
3 年生以下で形成されており、表舞台の記録には残らないが、ア式蹴球部をより強い組織にする
ことに、他の代に勝るとも劣らない情熱を捧げたと自負している。

当時の４年生メンバーを紹介したい。

1 日 500 本欠かさずシュート板にボールを蹴り続けた、実は江戸っ子の、永井。
華麗なセーブを披露するために誰よりもドロにまみれた、中川ちゃん。
1 年次は仮病の常習犯だったが、４年次には B チームのカリスマ GM となった、袴田。
リハビリ中に黙々と筋トレを続け、サッカーでは使い切れないほどの筋肉を纏った副将、松井。
太っ腹で後輩に慕われ続けた、もう一人の副将、健一郎。
そして 3 年間チームに尽くしてくれた、マネージャーのみんな。

そんなメンバーと共に４年間注いだ情熱は何物にも代え難く、
社会に出てからも、常に自分たちを奮い立たせてくれる財産となっている。

平成 16 年度　(2004)

★主将：高宮創平（4）/ 副主将：竹石義勝（4）/ GM：前田和也（4）
★最高学年：小林康彦 / 團 章一郎
★MGR：新井理恵（一橋４）/ 甲原真帆（一橋４）/ 堀江利奈（一橋４）・・ 本年以降 女子マネ全員が一橋生

團・竹石・前田・堀江・新井・甲原・小林・高宮

【試合メンバー】

FW　溝端（3）
MF　高宮（4）・竹石（4）・團（4）・前田（4）・中島智（2）
DF　安藤（3・金子（3）・全（2）・林亮（2）
GK　冨田（3）

【戦績】　東京３部Ｂ：４位　３勝２分２敗

玉川大	東大	山梨学院	大東大	理科大	電機大	工学院
● 2 - 3	● 2 - 3	△ 4 - 4	○ 1 - 0	△ 1 - 1	○ 4 - 1	○ 5 - 0
9/5 小平G	9/12 東大G	9/19 小平G	9/26 小平G	10/3 小平G	10/10 小平G	10/17 小平G

【順位】１ 理科大　２ 東大　３ 玉川大　４ 一橋　５ 大東大　６ 電機大　７ 山梨学院　８ 工学院

【記事】・・ 前田和也（GM）

平成 16 年度は、東京 4 部からの昇格組として 3 部リーグを戦うシーズンとなった。
春の天皇杯予選では、2 部の立教大、1 部の国学院大学から金星をあげて、当時東京 1 部に
所属していた早稲田大学と対戦。0 - 2 で負けはしたものの、関東大会への出場を果たした。
（早大には、その後ＦＣ東京でプレーした徳永選手などが所属しており、レベルの高さを痛感した）
その勢いをもって春季対抗戦（3・4 部リーグ）では見事に優勝し、昇格組ながら優勝候補の
一角として秋のリーグ戦を迎えることとなった。

千葉県波崎での夏合宿では、チームの結束を高めるために、
「一発芸大会」を企画したり、選手・マネージャー「一人ひとりの応援歌」を作った。
秋のリーグ戦では 1 年生を中心とした登録外の選手による応援を初めて実施し、チームを大変
盛り上げてもらったことには感謝しかない。いわずもがな個人の応援歌は大いに活躍し、選手を
盛り立てた。我々の代で始めた、この応援の伝統が今でも引き継がれていることは、OB として
大変うれしく思っている。また本年度は、女子マネージャーが全員一橋生（13 名）となった
初めての年であることも記しておきたい。

秋のリーグ戦は、開幕前に当時の絶対的エースであった FW 木村（3）をケガで欠き、
春とは若干異なる布陣となったが、メンバーも充実し、昇格への自信をもって臨んだ。しかし
一橋が昇格組であったことから、第 1 節と 2 節の相手が玉川大と東大（2 部からの降格組）という
リーグ戦の天王山ともいえる組み合わせとなり、戦い方が定まらないまま両チームに敗戦し、
苦しい立ち上がりとなった。その後、リーグ優勝候補の一角であり個人技術に秀でた大東文化大に
何とか勝利することでチームを立て直したが、序盤の敗戦が響き、目標であった 2 位以内の昇格を
果たせず、悔しいシーズンとなった。

平成 17 年度 （2005）

★主将：溝端清悟（4）/ 副主将：冨田和成（4）/ GM：門司陽平（4）
★最高学年：金子昌史 / 木村英生 / 杉本達朗 / 鈴木雅也 / 深澤雄太 / 山盛貴史
★MGR：和泉 妙（4）/ 越後屋麻澄（4）/ 大垣真梨子（4）

【試合メンバー】

FW 木村英（4）・大久保（2）・中島聡（2）・斉藤隼（1）
MF 佐藤勇（3）・鄭（3）・中島智（3）・山本（3）・石井（2）・影山（2）・木村辰（2）
DF 金子（4）・溝端（4）・全（3）・林（3）・佐藤（2）・西村（2）・山本俊（2）
GK 冨田（4）・鈴木雅（4）

＊２部昇格を決めたリーグ最終戦後に４年生全員で　於小平Ｇ

鈴木雅・冨田・深澤・山盛・金子・杉本
木村英・和泉・大垣・門司・溝端・越後屋

【戦績】　東京３部Ｂ：優勝　６勝１分０敗　→　東京２部 昇格

明星	東工	山梨学院	杏林	大東大	桜美林	日大生資
○ 6 - 0	○ 4 - 2	○ 1 - 0	○ 4 - 2	○ 1 - 0	○ 2 - 1	△ 1 - 1
9/4 小平G	9/11 小平G	9/18 小平G	9/25 小平G	10/2 小平G	10/9 小平G	10/16 小平G

【順位】１ 一橋　２ 桜美林　３ 日大生資　４ 大東大　５ 山梨学院　６ 杏林　７ 東工　８ 明星

【記事】・・ 溝端清悟（主将）

郵政民営化法案可決、愛知万博、オシム率いるジェフの「考えて走るサッカー」が
一世を風靡した 2005 年。元北海道選抜の門司陽平 GM のもと、手堅いチームを編成。
中盤フラットな４-４-２をベースに前線の FW 木村の能力を生かし、守備では GK 冨田を中心に
粘り強く守るという、およそオシムさんに叱られそうなサッカーを展開。リーグ戦の全試合が
小平グラウンド開催という地の利も生かし、大東文化や山梨学院などの難敵に次々と勝利。
全勝で第６節を終えた。

迎えた最終節の日大生資戦。前日に大雨が降って「小平湖」と言われる巨大な水たまりが
大量発生し、「阪神園芸（甲子園球場のグラウンドを整備するプロ集団）」も白旗を上げるような
コンディションだった。一時は試合中止の噂が流れたが、メンバー外選手たちによる決死の
グラウンド整備により、みるみるうちに減っていく小平湖。無事、開催にこぎつけた。
試合は劣勢の展開も、水たまりで止ったロングボールに２年生 FW 大久保が反応。
ザ・泥試合ゴールで引き分けに持ち込み、７年ぶりの２部昇格を決めた。

“試合はない”と心に一瞬スキが生まれた相手と、“試合はある”と信じて疑わなかった一橋。
わずかだったが、そのメンタルの差が、最終的には試合に反映されたと思う。
門司・冨田・金子・木村ら、１年次から秋季リーグに出続けた４年メンバーの集大成・・
しかし振り返ってみれば、メンバー外の力が大きかった。小平湖から試合決行に持ち込んだ
「奇跡のグラ整」。そして、毎試合後に開催される国分寺の居酒屋「じゃがいも」での反省会。
今だったら試合後の飲酒はあり得ないかもしれないが、Ｂチームの４年生、杉本や山盛の
面々が盛り上げ、チーム全体のガス抜きをしてくれたのも非常に大きかった。

平成 18 年度　(2006)

★主将：全　博聖（4）/ 副主将：林　亮太郎（4）/ GM：帰山圭祐（4）
★最高学年：佐藤勇起 / 田村直哉 / 中島智昭 / 山本一史
★MGR：内田弥佳（4）/ 水澤明希（4）

水澤・内田・帰山・林亮・全・佐藤勇・中島智・田村・山本一

【試合メンバー】

FW　佐藤勇（4）・大久保（3）・中島聡（3）・斎藤隼（2）

MF　中島智（4）・山本一（4）・木村辰（3）・鄭（3）・高田（2）・高橋悠（1）

DF　全（4）・林亮（4）・佐藤怜（3）・西村（3）・山本俊（3）・阿部（1）

GK　桜井（3）・鹿島（1）

【戦績】　東京２部：４位　５勝２分２敗

東経	山梨大	上智	日大生資	桜美林	首都	東大	玉川大	理科大
△ 1 - 1	● 0 - 1	△ 3 - 3	○ 3 - 2	○ 2 - 1	○ 2 - 0	○ 2 - 1	● 0 - 1	○ 3 - 1
9/3 小平G	9/10 小平G	9/17 小平G	9/24 小平G	10/1 小平G	10/8 首都	10/15 東大	10/22 小平G	10/29 小平G

【順位】１ 東経　２ 玉川大　３ 東大　４ 一橋　５ 日大生資　６ 上智　７ 山梨大　８ 首都
　　９ 桜美林　10 理科大

【記事】・・ 帰山圭祐（GM）

平成18年度は、一橋にとって久しぶりの東京都２部リーグだった。
３年前は降格直後の４部リーグであったことを思えば、３年と１年を中心に選手数も増え、監督やマネージャーを含めたチームの強化・運営体制が徐々に洗練されてきた。リーグ２部での優勝・１部昇格という明確な目標を掲げてスタートしたシーズンは、部員一丸の新歓で１年生にも新戦力を加えることができ、春季の天皇杯予選トーナメントでは稀に見る上位進出により、１部強豪校との対峙を通じた強化が進んだ。リーグ戦直前の夏合宿で主力選手にケガが相次ぐという困難がありつつも、先発選手だけでなく交代選手も含めたポジション競争で戦力が底上げされ、開幕前はライバル校との好勝負と目標達成が期待できる状態だったと思う。

しかしながら本番は、守備良くは進められなかった。
開幕戦で不可解な判定による司令塔・山本の退場とPKの失点で引分け、続く第２戦に敗れて１分１敗と足踏みしてしまったのだ。残り６戦は５勝１敗であった結果をふまえれば、２・３戦目でリーグ下位で終わる山梨大と上智大に勝てなかったことは痛恨だった。客観的に成績を見れば、１位の東経大に１-１、２位の玉川大に０-１で、後塵を拝す４位は妥当な結果かもしれないが、８戦目の玉川大戦の失点場面、終了間際の相手スローインによるリスタートの時に守備のマークが一瞬だけズレてしまった、あのミスがなければ…という悔しさは今も強く残っている。

引退から早15年近くが経過し、当時を振り返って想うことは、
あのような熱量を共有する集団で１つの目標に懸けていくことの素晴らしさと、その目標を確実に達成する難しさや、その過程で得られる学びの大きさだ。監督・選手やマネージャーにも個性と魅力に溢れるメンバーが集まって、古川会長や土井副会長など酉松会の諸先輩方にも後押し頂いた日々はとても充実していた。残念ながら目標に近づきつつも最後の一歩が届かなかったが、当時の部員には、それぞれ大きな糧になる貴重な経験であったと信じている。

平成 19 年度　(2007)

★主将：中島聡太 (4) / 副主将：大久保隆廣 (4) / GM：木村辰徳 (4) / 副 GM：佐藤 怜 (4)
★最高学年：浅沼雄介 / 石井崇弘 / 影山 昇 / 桜井基貴 / 上甲友規
鄭 瑛淳 / 西村 聡 / 山本俊介
★MGR：伊藤菜帆 (4) / 乙黒絵里 (4) / 湊 麻里子 (4)

伊藤・湊・乙黒
浅沼・佐藤怜・影山・鄭・石井
大久保・上甲・桜井・西村・山本俊
木村辰・中島聡

【試合メンバー】
FW　大久保 (4) ・中島聡 (4)
MF　影山 (4) ・木村辰 (4) ・鄭 (4) ・高田 (3)
DF　石井 (4) ・佐藤怜 (4) ・西村 (4) ・阿部 (2)
GK　桜井 (4)

【戦績】　東京２部：９位：１勝３分５敗　→　東京３部 降格

明学	成城	日大生資	日大商	立教	創価	上智	学習院	東大
● 1 - 4	△ 0 - 0	● 0 - 2	○ 5 - 1	● 0 - 2	● 0 - 1	△ 3 - 3	△ 1 - 1	● 0 - 2
9/2 明学	9/9 東大	9/16 成蹊	9/23 小平G	9/30 成蹊	10/7 東大	10/14 成蹊	10/21 小平G	10/28 東大

【順位】1 立教　2 学習院　3 明学　4 成城　5 東大　6 上智　7 日大生資　8 創価
9 一橋　10 日大商

【記事】・・ 木村辰徳（主将）

2007 シーズンは苦しい戦いの連続だった。
前年度は、天皇杯では関東大会に出場し、秋季リーグでは惜しくも 1 部昇格を逃したが、
格上の相手に善戦することも多く、最上級生の引退後もレギュラーとして活躍した
メンバーの大半が残っていた。しかしながら主な大会では結果を残せず、
リーグ戦も 2 部から 3 部へ降格となってしまった。

特に印象に残っているのは、リーグ第 7 節の上智大学戦。
1 勝 4 敗 1 分けで後がない試合で、ケガの影響で最後の大会への出場が難しいメンバーも
声を振り絞って応援を行う中、何としても「勝ちたい」試合だった。
後半途中まで 3 - 1 とリードする展開ながらも最終的に同点に持ち込まれ、
自身のふがいなさから地面にユニフォームを投げつけたことを、今でも鮮明に覚えている。

全体を通して振り返ると失点はリーグ中位で、得点力不足が課題のシーズンだった。
１つ１つの試合で勝負強さのようなものを最後まで持てなかったことも敗因の１つであった。
現役世代が勝負強さを持ち、輝かしい成績を残すことを心より祈念している。

平成 20 年度 （2008）

★主将：斎藤隼人（4）/ 副主将：藤井 翔（4）/ GM：高田光大（4）
★最高学年：倉田嵩之 / 宮内 優
★MGR：大竹 惟（4）/ 坂本明子（4）/ 花井美穂（4）

【試合メンバー】

FW 齋藤隼（4）・松村（1）
MF 藤井（4）・高橋悠（3）・星（2）・池田（1）
DF 倉田（4）・高田（4）・宮内（4）・阿部（3）
GK 鹿島（3）

【戦績】 東京３部：３位 ４勝３分１敗

杏林	明星	東工	農工	外語	大東大	首都	日大商	東薬
○ 2 - 0	○ 4 - 0	○ 1 - 0	○ 4 - 1	△ 1 - 1	△ 1 - 1	△ 1 - 1	● 0 - 1	諸事情により棄権
8/31 小平G	9/14 小平G	9/21 小平G	9/28 小平G	10/5 小平G	10/12 小平G	10/19小平G	10/26小平G	

【順位】 1 首都 2 外語 3 一橋 4 日大商 5 大東大 6農工 7 東工 8 杏林
9 明星 東薬（棄権）

最前列　高田・宮内・倉田・齋藤隼・藤井・大竹・坂本・花井

【記事】・・ 高田光大（GM）

2008 年の秋季リーグ戦は、昨年 2 部から 3 部に降格したことを受け、
「1 年での 2 部リーグ復帰」が命題の戦いだった。

第 1 ～ 4 節

対戦相手は昨年 4 部からの昇格校と昨年の 3 部下位校であり、順当に開幕 4 連勝。

第 5 節

対東京外国語大学戦で 1 年生エースの松村が鼻骨骨折で負傷退場し、
試合は引き分けとなったものの、その後のリーグ戦の出場ができない痛手となった。

第 6-7 節

対大東文化大学戦、第 7 節の対首都大学東京戦ともに先制される展開ながら、
3 年 DF 阿部と 2 年 MF 星のゴールで引き分けに持ち込む。

最終節

日大商学部戦で勝てば自力昇格。引き分け以下で残留濃厚という状況になった。
雨の小平グラウンドで行われた試合は、前半は 0-0 で折り返したが、後半早々に失点し、
2 点取らないといけない状況になった。4 年生全員が出場し、昇格を信じて攻め込んだが、
最後までゴールを割ることができず、 0-1 で敗戦し、昇格を逃した。

平成 21 年度　(2009)

★主将：阿部真琴 (4)　/ GM：高橋悠基 (4)
★最高学年：鹿島聡志 / 草場慶太郎 / 小林悠二 / 小林優太 / 西河真也 / 堀地良佑
砂子達也 / 山田雄之助 / 吉田 充
★MGR：親川 文 (4) / 南谷友香 (4) / 山田裕佳 (4)

２列目 黄赤ユニ　鹿島・堀地・小林悠・阿部・親川・山田
最前列 赤黄ユニ　吉田・砂子・山田・西河・小林優・草場・高橋悠・南谷

【試合メンバー】
FW　山田 (4) ・松村 (2)
MF　高橋悠 (4) ・高松 (2) ・池田 (2) ・彦坂 (1)
DF　小林悠 (4) ・阿部 (4) ・星 (3) ・平林 (1)
GK　鹿島 (4)

【戦績】　東京３部：３位　７勝２敗

杏林	農工	都留文	大東大	自由	東工	創価	山梨学院	日大商
○ 2 - 1	○ 4 - 2	○ 3 - 0	○ 2 - 1	○ 5 - 1	● 0 - 1	○ 1 - 0	● 0 - 3	○ 4 - 3
8/30 小平G	9/6 小平G	9/13 小平G	9/20 大東	9/27 小平G	10/4 小平G	10/11 小平G	10/18 小平G	10/25 小平G

【順位】1 山梨学院　2 大東大　3 一橋　4 日大商　5 創価　6 東工　7農工　8 自由
9 都留文　10 杏林

【記事】・・ 阿部真琴（主将）

2009 年シーズンは、昨年の最終節での敗戦を糧に 2 部昇格を目標に掲げ、毎日の練習に励んできた。秋季リーグでは順調に勝利を重ね、難敵である大東文化大学にも星と松村のゴールで逆転勝ちを収め、昇格に手が届くところまで来ていた。しかし格下の相手で勝利が絶対条件だった第 6 節の東工大戦で、前半の失点後に、私が相手への危険行為で一発退場。数的不利の戦いを強いられ敗れてしまった。この敗戦が大きく響き、最終節の日商に勝利するも 3 位で 3 部残留となったのだ。今まで全員で積み上げてきたものを、たった一瞬の愚かな行為で台無しにし、応援してくれていた皆様の期待を裏切ってしまったことは、未だ昇華できていない大きな後悔として深く心に残っている。

2009 年のチームは GM 高橋が中心となり最高のチームを作り上げたことは間違いなく、胸を張って歴代最強であったと確信している。辛く厳しい練習も多々あったが、小平グラウンドや如水スポーツプラザで毎日仲間と切磋琢磨した日々は、本当に幸せであったと感じている。2009 年シーズンだけではなく、小平で過ごした 4 年間はあっという間であり、毎年数多くの思い出があるが、その中でもマネージャーの献身的なサポートやメンバー外となった仲間の必死の応援が、一番強く心に残っている。ピッチ上の 11 人だけではなくマネージャーやサブメンバーも含めた全員で戦う姿勢が、一橋サッカー部の伝統であると思っている。その伝統は、きっと今も後輩に受け継がれ、一橋サッカー部の礎となっていることと思う。

平成 22 年度 （2010）

★主将：星 達也（4） / 副主将：西尾隆太（4） / GM：村井佑治郎（4）
★最高学年：植村康太 / 守本朋弘 / 横溝英大
★MGR：大橋智恵美（4）

【試合メンバー】

FW 松村（3）・上塘（2）
MF 池田（3）・高松（3）・松本（3）・彦坂（2）・川副（1）・中村瞭（1）
DF 星（4）・戸谷（3）・桂（2）・大倉（1）・田代（1）
GK 鹿島（5）

【戦績】 東京３部：３位 ７勝２敗

自由	東工	ICU	創価	明薬	農工	日大生資	外語	日大商
○ 4 - 1	○ 3 - 1	○ 9 - 1	● 1 - 3	○ 6 - 1	○ 4 - 0	○ 1 - 0	○ 4 - 0	● 0 - 1
8/29 小平G	9/5 東工	9/12 小平G	9/19 創価	9/26 小平G	10/3 小平G	10/10 外語	10/17 小平G	10/24 小平G

【順位】1 日大商 2 創価 3 一橋 4 日大生資 5 東工 6 外語 7 自由 8 ICU
9 農工 10 明薬

西尾・守本・星・横溝・村井・田中（2 年次まで）・植村　　大橋（丸枠）

【記事】・・ 村井佑治郎（GM）

2010 年は、いくつもの試験的な試みを行いながらのシーズンであった。
環境面では、シーズン当初に小平キャンパス構内の「如水スポーツプラザ」が閉鎖となり、
フィジカルトレーニングや雨天時の練習の確保が困難であった。外部フィジカルトレーナーの
試験導入（要望とサービスが合わず廃止）や外部のフットサル施設利用により対策を行ったが、
継続して改善すべき課題が残った。

スカッド（試合出場メンバー）面では GK・CB 経験者が不在であり、
また個人でゲームのリズムを作る特徴を持つ選手が不在であった。無いものは無くチームに
あるものを活かすことを優先し、FW の松村・池田（3）のキープ力を軸に中央でボールを運べる
高松（3）や平林（2）でボールを展開する、極めて個人異存型のサッカーを検討していた。
しかし嬉しい誤算として、中村・川添・田代・大倉などタレント豊かな新入生が加入。
中央の素早いパス交換でプレーのリズムを作り、人数をかけたサイド攻撃で攻略する
組織的な攻撃の型を構築して秋季リーグに挑んだ。

結果は７勝２敗で、３部残留。
リーグ最多の得点を取りながら局面での守備の脆さがあり、昇格を逃した。
1 年次に降格を経験し、何としても在学中に 2 部へ戻りたいという思いが強くあったので
非常に残念であり、サッカーにおける 1 点の重みを痛感した 1 年であった。

平成 23 年度　(2011)

★主将：戸谷雄貴 (4) / 副主将：松村雅司 (4) / GM：高松 俊 (4)
★最高学年：池田圭吾ジェイスン/ 伊藤暁良 / 松本雄士 / 村上康一 / 山浦一平
★MGR：内山朋美 (4) / 山下夏実 (4)

最前列　池田・松村・高松・山浦・松本・村上・内山・山下

【試合メンバー】
FW　松村 (4) ・荒巻 (2)
MF　池田 (4) ・高松 (4) ・大倉 (2) ・中村瞭 (2)
DF　戸谷 (4) ・松本 (4) ・桂 (3) ・田代 (2) ・彦坂 (3)
GK　蛯子 (1)

【戦績】　東京３部：２位　６勝１分２敗　→　東京２部 昇格

外語	自由	都留文	海洋大	ICU	桜美林	東工	首都	日大生資
● 1 - 2	○ 3 - 0	○ 2 - 0	○ 4 - 0	○ 3 - 1	○ 2 - 0	○ 1 - 0	△ 1 - 1	● 1 - 4
8/28 小平G	9/4 小平G	9/11 小平G	9/18 小平G	9/25 小平G	10/2 小平G	10/9 小平G	10/16 小平G	10/23 小平G

【順位】1 首都　2 一橋　3 日大生資　4 東工　5 外語　6 桜美林　7 都留文　8 ICU
9 海洋大　10 自由

【記事】・・ 戸谷雄貴（主将）

2011 年シーズンは「3 年連続 3 部 3 位」という、あと 1 歩で昇格を逃し続けてきた
過去の悔しさを晴らし、「3 部優勝・2 部昇格」の命題を果たすことを目標にスタートした。
毎週 GM の高松から提示される「課題」を徹底的に意識した練習を実施し、1 週間を通じて
1 つの課題をチーム全員で克服するという練習サイクルを実践した。

しかし 3 月 11 日（金）14 時 46 分、「東日本大震災」発生。
私は部活動の後、他の部員と立川のスポーツショップへ行った時に遭遇し、非常に強い揺れに
恐怖を覚えた。当日帰宅難民になった部員もいたし、部活動も 1 週間ほど停止になったが、
家族が被災されたとか、不幸があったという部員はいなかったのが幸いである。その後、
震災の影響で天皇杯予選が 2 部以上のチームのみに限った大会となり、公式戦の機会を失った
部員のモチベーションの維持が難しい時期もあったが、夏合宿での厳しい走り込みにより、
チーム全体の基礎体力をアップして秋季リーグに臨んだ。

リーグ戦は、初戦の東京外語大に 1 - 2 で敗れるという予期せぬスタートとなった。
しかし第 2 節からは、コンパクトな守備から両サイドの MF 中村（2）と池田（4）を起点とした
ワイドな攻撃を武器に手堅く勝利を重ね、第 7 節の昇格を競う東工大戦も 1 - 0 で制した。
続く首都大との首位決戦では 1 - 1 で引き分けるも、3 位の日大生物資源が引き分けたため、
最終節を残して 2 部昇格を確定させた。最終節では日大生物資源に敗れ 3 部優勝は逃したが、
部員全員の 2 部昇格への強い思い（執念）が重要な試合で結果を残す勝負強さと運を手繰り寄せ、
1 年次からの命題をようやく果たすことができた。

2012 年以降、2 部及び 1 部というレベルの高いリーグで結果を残している後輩には、
誇りに思うと共に、より高いレベルを目指して日々切磋琢磨を続けてほしいと思う。

平成 24 年度　（2012）

★主将：上塘春生（4）/ 副主将：桂 怜人（4）/ GM：平林幸治（4）
★最高学年：秋山協太郎 / 北川雄介 / 谷 佳祐 / 彦坂達哉
★MGR：梅村 薫（4）/ 鈴木絵美（4）/ 名和千紘（4）

【試合メンバー】

FW　上塘（4）・荒牧（3）・竹本（1）
MF　彦坂（4）・中村瞭（3）・川副（3）・金田（1）
DF　桂（4）・平林（4）・田代（3）・田中（2）
GK　後藤（1）

谷・桂・平林・北川・彦坂・秋山・上塘
梅村・名和・鈴木

【戦績】　東京２部：７位　４勝５敗　　X 不戦敗

帝京	東経	成城	創価	上智	武蔵	日大商	日大文理	首都
● 0 - 4	● 2 - 3	○ 1 - 0	○ 3 - 2	● 1 - 2	○ 2 - 1	○ 1 - 0	● 2 - 4	× 0 - 3
8/26 成蹊	9/2 小平G	9/9 成城	9/16 創価	9/23 小平G	9/30 武蔵	10/7 小平G	10/14 小平G	10/21 首都

【順位】１ 東経　２ 帝京　３ 上智　４ 日大文理　５ 首都　６ 武蔵　７ 一橋　８ 創価
９ 日大商　10 成城

【記事】・・ 平林幸治（GM）

昇格初年度ではあったが、せっかく挑戦をするからには、「目標は１部昇格」ということを一人ひとりの部員とも確認し合って、シーズンが始まった。２部リーグは、当然３部より個々の選手のレベルが高まる。そんな中でも互角に戦えるよう、下記の２点を重視して取り組んだ。

＊2 部で戦う環境整備 ＝ 専門家の招聘と人工芝グラウンドの活用
＊部員一人ひとりの力の最大化 ＝ 組織力の強化

前者については、特にフィジカル面において専門家の力を借りることにした。
スポーツマッサージ「ナズー」の並木磨去光（まさみつ）氏である。けが人のケア、体幹やアジリティを鍛えるトレーニングなど、初年度から本当に多くのお力添えをいただいた。また２部の試合が行われる他大学のグラウンドが、ほぼ人工芝だったので、積極的に外部の人工芝グラウンドを借りて練習することにしたのも、この年からだった。

後者については、まず組織として目指すべき方向性を、《“賢”守速攻》というコンセプトで共通認識化した。そのための約束事を細かく言語化し、チームに落とし込んでいく際には、これまでのような GM が全ての練習メニューを決めるというやり方をやめ、それぞれの部員の強みを生かした〈セットプレーリーダー〉〈ディフェンスリーダー〉〈オフェンスリーダー〉という緩やかな役割を設計し、一人ひとりの力が最大限に発揮されるような運営を心掛けた。これらの専門家の招聘と部員全員の参加を目指したチーム運営の仕組みは、2013 年度以降から本格的に運用される「ユニット制」の礎になった。

そして 8 月末、いよいよ秋季リーグが始まる。
スタートは連敗してしまったが、第 3 節の成城戦での勝利を皮切りに、破竹の 4 連勝。一時は、本当にこのまま 1 部昇格できるのではないかと期待を膨らませた。ただ、そこから甘さが出てしまい 4 連敗。まだまだ 2 部で戦えるほどの力はついていなかった。特に最終節、首都大戦の「不戦敗」は、不覚の極みだった。通常、試合日の前にユニフォームの色が決まっていて、一橋は〈エンジ〉、首都大は〈青〉だったのだが、当日の主審が“色が判別しにくいので、どちらかがアウェイのユニフォームで試合すべき”と判断した。ところが、この時、一橋も首都大もアウェイユニフォームを持参しておらず、リーグ戦の規約に従い、前年度リーグの順位が下位だった一橋が不戦敗となってしまったのである。この試合は昇格に向けた大一番ということで、多くの OB や保護者の方々が会場に来てくださっていたにもかかわらず、期待を裏切ることになってしまった。この場を借り、改めて深くお詫び申し上げたい。

2 部残留という最低限の結果を残せたことには安心し、1 部昇格への挑戦は後輩に託してシーズンを終えた。「不戦敗」の記憶は今でも思い出したくないくらい忌まわしいものだが、以後、どんな試合でもホームとアウェー両方のユニフォームを持参することが絶対の伝統となったことは喜ばしい限りである。

平成 25 年度　(2013)

★主将：大倉佑介（4）/ 副主将：田代健太（4）/ GM：川副陽平（4）
★最高学年：荒牧耕太郎 / 大山航輝 / 小野博充 / 中村 瞭
★MGR：稲垣文佳（4）/ 小林 茜（4）

【試合メンバー】
FW　荒牧（4）・梶谷（1）
MF　川副（4）・中村瞭（4）・金田（2）・小島（2）
DF　大倉（4）・田代（4）・竹本（2）・中野圭（1）
GK　後藤（2）

最前列　大山・川副・荒牧・小野・大倉・田代・稲垣・小林

【戦績】　東京２部：４位　８勝６分４敗

	成蹊	大東大	武蔵	上智	玉川大	学習院	日大文理	首都	日大生資
春	○ 3 - 0	△ 0 - 0	△ 1 - 1	● 0 - 5	○ 3 - 2	○ 5 - 2	○ 2 - 0	○ 1 - 0	○ 2 - 0
秋	● 2 - 4	● 1 - 2	● 1 - 3	△ 1 - 1	△ 1 - 1	△ 2 - 2	○ 1 - 0	○ 1 - 0	△ 0 - 0

【順位】１ 成蹊　２ 大東大　３ 武蔵　４ 一橋　５ 上智　６ 玉川大　７ 学習院　８ 日大文理
９ 首都　10 日大生資

【記事】・・ 大倉佑介（主将）

東京都２部に昇格して２期目となる本年度は、現体制の土台を作ったと言われる「ユニット制」の２期目であると同時に、東京都リーグの「春秋２部制」がスタートした年でもあった。この２部制というのは、例年なら秋のみの１回戦総当たり方式で決定していたリーグ順位を、春・秋２回戦総当たりで決定するというもの。これらの影響により、33 年ぶりの東京１部昇格を目標に掲げる一橋大学にとっては、大きな変化を求められる１年になった。中でも注力した点が、２つある。

１つ目は、チーム作りの《スピード》。
２～４年生が 20 名強という部員数の少なさが故に、受験を終えたばかりでコンディションが整わない１年生を春の試合でトライアルし戦力化することを含め、これまではリーグ戦までのチーム作りの時間が約半年用意されていた。ところが２部制の導入に伴いリーグ開幕が８月末から４月末に早まったことで、早急にチームの型を作り、半ば公式戦を戦いながら個の戦力・組織力を強化するというやり方に変える必要があった。

２つ目は、チーム作りの《やり方》。
上記の「ユニット制」に加え、「心・技・体の外部コーチ制」という１つ上の代が作った土台を本格稼働させた。外部コーチ制においては、下記の通り非常に強力な方々のバックアップを受け、ひとりのサッカー選手としての成長にも精力的に取り組んだ。

心　辻 秀一　：Ｂリーグの東京エクセレンスを設立し、
　　Ｊリーグの V.ファーレン長崎でメンタルアドバイザーを務める。
技　霜田正浩　：日本サッカー協会技術委員長を歴任。
　　2018 - 2020 シーズン、Ｊ２レノファ山口の監督を務める。
体　並木磨去光：トルシエジャパンのアスレチックトレーナー。

春季リーグ戦は６勝２分１敗と昇格圏内の２位で折り返し、
昨季からのユニット制を受け継いだ早期のチーム作りが奏功する。夏合宿を挟み秋季リーグ戦は調子を崩しながらも何とか踏ん張り、迎えた最終節の大東文化戦。非常に多くの OB・保護者の方々の声援を受け、他会場の結果により「勝てば１部昇格」という痺れる状況だったが１－２で敗戦となり、夢は後輩たちに引き継がれることとなった。結果論になるが、後期においては敵チームの一橋対策を上回る進化・変革を遂げられなかったことが非常に悔やまれる。

我々平成 26 年卒は、目標としていた結果が出せなかったことで「不合格」の代だと思う。
だからこそ、その過程で得た７名のプレーヤーと２名の女子マネージャーいう
一生の「仲間」と共に、かけがえのない財産を与えてくれた一橋大学ア式蹴球部に、
今後も可能な限りの恩返しをし続けたいと思う。

平成 26 年度　(2014)

★主将：田中克弥（4）/ GM：小泉武広（4）
★最高学年：蝦子 樹 / 野村修斗 / 満井一成 / 宮村開人
★MGR：加藤里菜（4）/ 川口 望（4）/ 平田芽子（4）

【試合メンバー】
FW　甘利（2）・梶谷（2）・宗（1）
MF　金田（3）・小泉（4）・小島（3）・蓮池（3）・手島（2）・吉田（1）
DF　田中（4）・竹本（3）・中野圭（2）・野際（2）・吉川（1）
GK　後藤（3）

蝦子　野村　小泉　満井　田中　宮村　加藤　川口　平田

【戦績】　東京２部：８位　６勝１分11敗

	学習院	立教	武蔵	玉川大	創価	帝京	成城	日大文理	上智
春	● 0 - 3	● 1 - 2	● 1 - 5	○ 5 - 0	● 0 - 1	● 0 - 1	○ 1 - 0	○ 4 - 0	● 2 - 7
秋	● 0 - 1	● 0 - 4	● 2 - 3	● 0 - 2	○ 3 - 1	○ 1 - 0	○ 2 - 0	● 1 - 4	△ 0 - 0

【順位】1 学習院　2 立教　3 玉川大　4 武蔵　5 創価　6 帝京　7 成城　8 一橋
9 日大文理　10 上智

【記事】・・ 小泉武広（GM）

1 部昇格に向け、3 度目の正直で迎えた平成 26 年度シーズン。諸先輩方が築いてくださった
ユニット制による主体的なチーム運営に手応えを感じていた中で、新しい試みを行った。

まず戦術面では、「攻守に主導権を握るサッカー」を目指した。
他校が一橋対策をするようになり、強みであった堅守速攻が発揮できなくなったからである。
ボールの保持率を高め、より高い位置からの守備にトライした。

メンタル面では、ピッチ上での能力発揮に主眼を置き、
なでしこジャパンの主力選手をサポートされた大儀見浩介氏を招聘した。
また本年から GK コーチの望月康宏氏を招聘してキーパーの強化にも力を入れ、
技術的なアドバイス（ハイボール処理やクロス対応など）や専門的な練習方法を教えていただいた。

しかし春季リーグでは６連敗と散々な結果に終わり、
前年同様、粘り強い守備を基本とするサッカーに戻さざるを得なかった。
中断期間の夏合宿で、前線の選手の走力を生かした奪ってからの縦に速い攻撃を浸透させ、
秋季リーグを４勝４敗のイーブンで切り抜けて何とか２部残留を果たした。

前年までの積み重ねを最大限に生かせず、新たな試みが中途半端に終わったことが悔やまれる。
ただ苦しいシーズンを通し、学生主体の取り組みから生まれる一体感、最後まで戦い抜く泥臭さはア式が苦しい時に立ち返る原点なのだと再認識することができた。また、多くの下級生が公式戦の舞台を経験することができた。これを糧とし、後の１部昇格に繋げてくれたのなら嬉しい。

平成 27 年度　(2015)

★主将：蓮池就介 (4) / GM：金田大樹 (4)
★最高学年：青木 嵩 / 岩永章佑 / 大塚幸司 / 小笠原健太 / 小島秀太
後藤 守 / 榊原龍斗 / 竹本圭佑 / 横田拓郎
★MGR：橋本安未 (4) / 渡辺りお (4)

竹本・後藤・榊原・小島・大塚・小笠原・橋本・渡辺
青木・蓮池・金田・横田・岩永

【試合メンバー】

FW　蓮池（4）・梶谷（3）・宗（2）

MF　金田（4）・手島（3）・吉田（2）

DF　小島（4）・竹本（4）・中野圭（3）・野際（3）

GK　後藤（4）

【戦績】　東京２部：５位　９勝１分８敗

	東経	帝京	東大	武蔵	日大生資	玉川大	成城	創価	首都
春	● 1 - 7	● 1 - 2	● 0 - 1	○ 4 - 1	● 1 - 2	● 2 - 4	○ 2 - 1	△ 1 - 1	○ 4 - 1
秋	● 0 - 3	○ 2 - 0	○ 4 - 1	○ 6 - 1	● 0 - 2	○ 3 - 1	● 4 - 5	○ 4 - 1	○ 4 - 0

【順位】１ 東経　２ 帝京　３ 東大　４ 武蔵　５ 一橋　６ 日大生資　７ 玉川大　８ 成城
９ 創価　10 首都

【記事】・・ 金田大樹（GM）

２部に昇格して４年目、私たちは本気で１部昇格を目指してシーズンをスタートさせた。
各領域のコーチには引き続きお世話になりつつ、公式戦がすべて人工芝・天然芝になったため、
府中など人工芝 G での練習頻度も増やしていった。結果的に練習は、ほぼほぼ AM になる。
入部した時は 30 名弱だった部員も気が付けば 68 名になり、すべての人に等しく
試合に出る権利と喜びを感じてもらいつつ、B チームのレベルを高めるため、
関東リーグ中心の「I リーグ」にも参戦し始めた年でもある。

就活の関係で TOP チームは三商大戦を春先に変更し、大阪遠征だけでなく
ボトムアップ理論で広島観音高校を日本一に導いた畑先生の元へ指導を仰ぎに行ったり、
その後の波崎遠征では、前冬の選手権で活躍した流通経済大学の新人有名選手たちと
試合経験を積み勝利するなど、幸先の良いスタートを切った。
しかしながらトーナメントは 10 人になった相手を崩し切れず、早期に敗退。
前期リーグ戦も３勝５敗１分と振るわず、降格圏で折り返すという結果に終わる。

中断期間の夏合宿で立て直そうと、８月解禁の就職活動でなかなかメンバーがそろわない中、
苦労しながら練習に取り組んだ。その甲斐あって、後期は開幕から６勝２敗で進み、
最終節、因縁の成城大学に勝てば昇格という試合を迎えることができた。
ただ、ここでも良いパフォーマンスは発揮できず、４－５で敗れて昇格を逃した。

改めて振り返ると、壁を乗り越えたチームの原体験は「夏合宿」だったと思う。
まずは「ラントレ山雅」。当時、松本山雅 FC が取り入れていた地獄のランニングトレーニングで、
50 m を 8〜10 秒、100 m を 16〜20 秒・・・300 m を 48〜60 秒、これを４セットやる。
前期の敗因を「嫌なシーンから逃げる」、「組織としての一体感と壁を乗り越えた経験がない」
ことにある捉え、やると決めた。おかげで後輩からは相当嫌がられた。

さらに、自分と向き合い想いを言葉にするミーティングと書道、
女子マネもチームの一員として感じてもらう最終日のレクリエーション、
４泊５日を一緒に過ごし語り合ったあの経験こそが、遠回りでもチームを強くしたと思っている。

東京１部さらに関東リーグも見据えて試行錯誤し、よい面も悪い面も露出したシーズンだったが、
しっかりと後輩が反面教師？にしてくれ、翌年１部昇格を果たすことができた。
彼らの努力こそが全てだが、心の底から昇格を喜ぶことができたのが本当にうれしかった。

平成 28 年度　(2016)

★主将：中野圭祐（4）/ GM：大口柾文（4）
★最高学年：甘利知己 / 池田 修 / 梶谷卓矢 / 栗木春綱 / 近藤直輝 / 手島拳之介
野際大樹 / 普勝悠暉 / 松井基宏 / 森本志朗
★MGR：寺田香穂（4）/ 山崎 光（4）

山﨑・甘利・池田・梶谷・近藤・手島・松井・大口
寺田・森本・中野圭・普勝・栗木・野際

【試合メンバー】
FW　甘利（4）・梶谷（4）・宗（3）・中野正（2）・玉水（2）
MF　手島（4）・松井（4）・仁賀（3）・吉田（3）・大山（2）・戸井（2）・高山（1）
DF　中野圭（4）・野際（4）・白藤（3）・吉川（3）・岡谷（2）・右田（1）
GK　池田（4）

【戦績】 東京２部：２位　11勝３分４敗　→　東京１部 昇格

	成蹊	武蔵	上智	玉川大	学習院	成城	日大生資	理科大	山梨大
春	● 0 - 2	△ 3 - 3	○ 4 - 0	○ 2 - 0	○ 4 - 1	● 2 - 3	○ 3 - 0	○ 2 - 0	○ 6 - 0
秋	● 2 - 3	○ 3 - 1	△ 2 - 2	△ 1 - 1	○ 3 - 1	○ 3 - 0	● 0 - 1	○ 4 - 2	○ 5 - 0

【順位】1 成城　2 一橋　3 武蔵　4 上智　5 玉川大　6 学習院　7 成城　8 日大生資
9 理科大　10 山梨大

【記事】・・ 大口柾文（GM）

誰かと結婚し、子供が生まれ、帝国航空の再建をまとめあげたら、また違うのかもしれないが、
僕個人としては、首都大のグラウンドで武蔵を倒し、１部昇格を決めたあの瞬間が、
これまでの人生で一番嬉しかった。僕らの代が粒揃いだったわけではない。
先輩方の積み上げてきた文化と、後輩たちのはつらつとしたプレーのおかげで、
どの試合でもグッドゲームができたシーズンだった。
ショートカウンターと粘り強い守備を武器に、11 勝４敗３分、勝点 36。
FW 梶谷は 16 得点でリーグ MVP、リーグ最少失点の立役者である池田は優秀 GK 賞を受賞。
ピッチ外でも「良い結果は良い関係性から生まれる」という価値観のもと、
チーム理念を制定し、一体感を大切にした。80 名の大所帯だったが、
一人ひとりが良い関係性の中で切磋琢磨したからこそ、結果もついてきたと思う。

引退後、「部停」という形で後輩たちに迷惑をかけてしまったことは、
今でも申し訳が立たない。種々の問題があったが、一番は学生主体という言葉に甘え、
組織として未熟だったことに尽きる。次の 100 年に向けて、忘れてはいけないシーズンだと思う。

平成 29 年度　（2017）

★主将：吉川健也（4）/ GM：吉田圭吾（4）
★最高学年：石川達也 / 佐々木 錬 / 白藤 颯 / 宗 嵩久 / 田中才揮 / 仁賀雅之
藤井拓郎 / 藤原 慧 / 船越弘晃 / 本間恒輝
★MGR：河野香苗（4）/ 山口千尋（4）

【試合メンバー】

FW　宗（4）・中野正（3）・玉水（3）
MF　吉田（4）・城所（2）・高山（2）
DF　白藤（4）・吉川（4）・岡谷（3）・右田（2）
GK　大内（3）

山口・河野・石川・藤原・田中・本間・白藤・吉川
吉田・藤井・佐々木・宗・船越・仁賀

【戦績】 東京１部：９位　３勝３分12敗　→　東京２部 降格

	明学	立教	大東大	東経	山梨学院	成蹊大	国学院	武蔵	帝京
春	△ 1 - 1	● 0 - 2	△ 2 - 2	● 0 - 1	○ 1 - 0	△ 3 - 3	○ 5 - 3	● 2 - 4	○ 4 - 0
秋	× 0 - 3	× 0 - 3	× 0 - 3	× 0 - 3	× 0 - 3	× 0 - 3	× 0 - 3	× 0 - 3	× 0 - 3

＊「活動停止処分」により後期リーグは全て X 不戦敗

【順位】1 明学　2 立教　3 大東大　4 東経　5 山梨学院　6 成蹊　7 国学院　8 武蔵
9 一橋　10 帝京

【記事】・・ 吉田圭吾（GM）

「商大は技の劣勢を果敢なる闘志と、旺盛なる団結力で覆した」
昭和 15 年、我が部が関東リーグ１部の３強と言われた早稲田・帝大・明治を破ったとき
新聞にそう書かれたという。それから 77 年　・・・

都１部にて関東昇格を目指し臨んだ2017シーズン。前期の戦績は、３勝３敗３分。
感じたのは他校との確かな実力差と、それでもなお残されている関東昇格の可能性だった。
大切にすべき伝統は、これまでも、これからも変わることはなく、闘争心と一体感、
あえてひとつ加えるならば、泥臭さ、これらを守り続けた先に関東は待っているはずだと
１部での９試合は、その自信を深めてくれた。

残念ながら「活動停止」という形で我々の挑戦は終わりを見ることとなったが、
この空白期間に開始した地域貢献活動は有意義なものだった。極端に言ってしまえば
趣味や娯楽の延長線上にしかない我々の活動も、社会と接点を持つことで
新たな価値を持ち得るのだと気づかせてくれた。ア式が真に豊かな組織へと成長する上で、
自身の存在意義を問い直す必要不可欠なプロセスだったと思う。

活動再開後、東京都トーメントを戦い、武蔵大学を相手に敗北。2017シーズンは幕を閉じた。
前期の好調が嘘だったかのように歯車は最後まで噛み合うことなく、決して満足のいく幕切れでは
なかったが、全員でやり切ったシーズンに悔いなどあるはずもなく、今残るのは自身のわがままに
付き合い続けてくれた仲間への感謝ばかりだ。2017チームは私の誇りである。

平成 30 年度　(2018)

★主将：中野正樹（4）/ GM：岡谷真広（4）
★最高学年：池田 真 / 大内健太郎 / 大山達也 / 小野間 顕 / 加賀平朗 / 塩月航輝 / 重宗大貴
神藤悠斗 / 関澤勇人 / 田尻一真 / 玉水寛人 / 戸井純平 / 中村祐樹 / 西本優壱
根木俊輔 / 船田和佐 / 堀本陽太朗 / 松本絃輝 / 向井健太
★MGR：鹿嶋 茜（4）/ 野口明穂（4）/ 平野 優（4）/ 南 里沙子（4）

鹿島・野口・大内・根木・神藤・塩月・中村・玉水・船田・加賀・田尻・小野間・松本・関澤
平野・南・向井・岡谷・池田・堀本・西本・戸井・重宗・中野正・大山

【試合メンバー】

FW　中野正（4）・田尻（4）・玉水（4）・城所（3）・瀬山（2）・ヘルバート（2）

MF　重宗（4）・戸井（4）・高山（3）・西山（2）・名徳（2）・七篠（1）

DF　岡谷（4）・加賀（4）・大澤（3）・中西（3）・右田（3）・山本（2）・北西（1）

GK　大内（4）

【戦績】　東京２部：５位　７勝４分７敗

◎不戦勝

	東大	帝京	亜細亜	成城	玉川大	首都	武蔵	山梨大	理科大
春	● 0 - 1	● 1 - 3	○ 3 - 1	△ 0 - 0	● 1 - 2	○ 3 - 0	△ 1 - 1	△ 0 - 0	○ 3 - 0
秋	● 0 - 4	○ 2 - 1	● 0 - 1	● 0 - 1	● 0 - 1	△ 0 - 0	○ 4 - 1	○ 5 - 1	◎ 3 - 0

【順位】１ 東大　２ 帝京　３ 亜細亜　４ 成城　５ 一橋　６ 玉川大　７ 首都　８ 武蔵
９ 山梨大　10 理科大

【記事】・・中野正樹（主将）

2018シーズン、最高学年の４年生はプレーヤー21名、マネージャー４名（計25名）と部の歴史を遡っても類を見ないほど人数が多い代であった。リーグの戦いの舞台は、東京都２部。前年度の部活動停止の影響で、またも我が部が長年昇格を目指すも夢破れてきたリーグに主戦場を移す形となる。東京都１部での健闘の最中、突如サッカーを奪われ引退していった先輩方の無念を晴らすべく、１年での１部復帰を目指し闘ったシーズンであった。

しかし、東京都２部の実力は各チーム均衡しており、主力の怪我による離脱、また判定にも見放され、前期９節が終了した時点の勝ち点は12。昇格には勝ち点36以上は欲しいと言われる中で、昇格どころか降格すらもちらつく苦しい結果となっていた。後期もチーム一丸となって戦うものの、またも主力の怪我に悩まされ、なかなか勝ち点を積み上げることができず、最終的に10チーム中５位でシーズンを終えた。リーグ戦の結果は悔しいものに終わったが、練習に全力で取り組むことはもちろん、部員皆で勝利に向けて様々な工夫を凝らして行った活動は、今も強く印象に残っている。特に「食事LINE」については、様々なエピソードが生まれた為、この場を借りて紹介できればと思う。

食事LINEとは、部員同士で縦割りのLINEグループを作り、朝・昼・晩３食の写真を投稿、それを参考にマネージャーが栄養状態を管理するという取組みである。部員の食事を監視下におくことで、食事に対する意識を高めること、また学年を超えたコミュニケーションの場として機能していた。朝食は９時までに投稿、また試合前日は脂質の高いもの禁止等、なかなか厳しい基準があり、ひとり暮らしの部員は適応に苦しんでいたことを記憶している。なかでも、「ご飯写真の再利用」は稀に摘発されており、豪雨の日の朝食に、背景の窓から燦燦と照り付ける太陽が覗える写真を投稿して虚偽投稿がばれる部員がいたのは、今ではいい思い出である。

文系の大学であり、学生数も少ない、スポーツ推薦もない、そんな環境下でも勝利に向かって様々な工夫を凝らす、勝つためのアイデアが生まれてくる、そんな素晴らしい組織であったと回顧している。現役部員の皆様には、フカフカの人工芝のもと、日々技術向上に努め、悲願の関東リーグ昇格を実現してほしいと心より願っている。

平成 31 - 令和 1 年度 （2019）

★主将：右田大河（4）/ GM：高山修也（4）
★最高学年：石川 晃 / 石田 洸 / 大澤 敦 / 尾高洸祐 / 城所知希 / 小杉直輝 / 斎藤五樹
下地政太 / 杉山恭平 / 中西 望 / 藤井俊輔 / 深井雄太 / 森山裕理 / 渡邉友彬
★MGR：菅家 恵（4）/ 下川 葵（4）

下川・深井・森山・藤井・中西・下地・斎藤・杉山・小杉・菅家
石田・渡邊・城所・右田・高山・大澤・尾高・石川

【試合メンバー】

FW 城所（4）・田尻（4）・深井（4）・瀬山（3）・中田（3）・ヘルバート（3）・阿部（2）・七條（2）
MF 高山（4）・松田（3）・名徳（3）・戸田（2）・皆川（1）
DF 大澤（4）・尾高（4）・中西（4）・右田（4）・西山（3）・林（3）・山本（3）
北西（2）・櫛田（2）・戸塚（2）
GK 中野英（3）・北畠（2）

【戦績】 東京２部：４位 ９勝２分７敗

	朝鮮	成蹊	亜細亜	玉川大	武蔵	成城	首都	日大商	日大文理
春	● 0 - 3	○ 3 - 2	△ 0 - 0	○ 1 - 0	○ 3 - 1	○ 1 - 0	○ 4 - 1	○ 2 - 0	○ 3 - 1
秋	● 1 - 3	● 1 - 3	● 1 - 2	● 1 - 2	● 0 - 4	● 0 - 2	○ 2 - 0	○ 3 - 0	△ 0 - 0

【順位】1 朝鮮 2 成蹊 3 亜細亜 4 一橋 5 玉川大 6 武蔵 7 成城 8 首都
9 日大商 10 日大文理

【記事】・・ 右田大河（主将）

「１部昇格」という目標に向けてのチーム作りは、前期リーグ終了時までは理想的だった。
代替わりして最初の公式戦は「4 部のチームに負ける」というスタートだったが、
その敗戦によって生まれた危機感が、チームに良い影響を与えてくれた。
“自分たちは弱い。だからこそ全員が一丸となり、リーグ戦に向けて準備をしないといけない”、
この危機感があったからこそ、全員が向上心を持って日々の練習と試合に臨むことができ、
その結果、前期リーグ９試合を、勝ち点 22 の２位で折り返すことができた。

しかし、後期リーグではわずか２勝しかできず、最終的には４位で終えることとなった。
失速の原因は、前期リーグの結果に一定の満足感を得てしまったことだろう。
これからが勝負だと分かっていながら、どこかで“このままいけば昇格できる”という慢心が
生まれてしまっていたのかもしれない。最終的に「１部昇格」という結果は残せなかったが、
リーグ戦までのチーム作り、そして前期リーグの戦いは、36 年ぶりに１部を戦った
２年前を彷彿とさせ、多くの人の記憶に残るものとなったのではないだろうか。

令和２年度　（2020）

★主将：西山拓実（4）/ GM：山本健太（4）/ コーチ：戸田和幸（元日本代表）
★最高学年：雨宮一郎 / 江口雄介 / 太田悠斗 / 木田力斗 / 達 康大 / 瀬山謙人
中田裕之 / 中野英司 / 八田健吾 / 林 遼太朗 / ヘルバート弥呂
松田悠太郎 / 宮林佑汰 / 名徳泰地
★MGR：木村映美（4）

木村・八田・木田・太田・中野英・宮林・雨宮・林・西山
達・中田・山本・松田・名徳・江口

【試合メンバー】

FW　中田（4）・瀬山（4）・ヘルバート（4）・七條（3）・阿部（3）・東明（2）

MF　松田（4）・名徳（4）・戸田（3）・皆川（3）

DF　西山（4）・山本（4）・林（4）・北西（3）・戸塚（3）・櫛田（3）

GK　中野英（4）・北畠（3）

【戦績】東京２部：６位　５勝６敗

◎不戦勝

	亜細亜	東大	上智	玉川大	武蔵	成城	理科大	都立大	東工
秋	● 0 - 1	○ 3 - 1	● 0 - 1	● 0 - 1	● 1 - 2	△ 1 - 1	● 0 - 1	◎ 3 - 0	○ 2 - 0
	―	―	―	―	―	△ 0 - 0	● 1 - 2	○ 2 - 1	○ 6 - 0

【順位】1 亜細亜　2 東大　3 上智　4 玉川大　5 武蔵　6 一橋　7 成城　8 理科大
9 都立大　10 東工

【記事】・・ 山本健太（GM）

今シーズンは新型コロナウイルスの感染拡大により、例年とは大きく変わった１年となった。
１月、例年通り冬オフを挟み、新たなシーズンに向けて活動をスタートした。２月から本格的に、
元日本代表の戸田和幸コーチに指導をしていただくようになり、関西遠征などを経てチームの
成熟度も少しずつ高まっていった。しかし３月、コロナ禍拡大のためリーグ戦の前哨戦である
アミノバイタルカップは中止。そして私たちも、３月頭から大学より活動の自粛を求められる。

緊急事態宣言の発令もあり、８月中旬に大学から正式に活動を認められるまでは、
オンラインでのフィジカルトレーニングを皆で行いつつ、それぞれの場所で再びサッカーができる
日々が来ることを祈りながら精進する毎日だった。４月末に開幕予定であったリーグ戦も、９月
からの開幕となり、試合数を例年の 18 試合から 13 試合へと減らす形で実施されることになった。
幸いにも３試合すべてに出場することができたが、結果としては２部リーグ６位で終了し、
目標であった１部昇格は叶わなかった。

新たな指導者のもと新たなスタイルで試行錯誤する毎日であり、個人として、
そしてチームとしての力不足を痛感する 13 試合だった。十分にトレーニングや練習試合を
行えないままリーグ戦に臨みシーズンが終了してしまったことには、やはり悔いが残る。
しかしながら、これまでとは 180° 生活が変わってしまった中でも最高学年としてのシーズンを
より良いものとするために取り組んでくれた同期や、イレギュラーな活動状況になっても、
必死についてきてくれた後輩など、周りの人の存在に助けられる場面が非常に多かった。
そういった方々のおかげで自身の学生生活、そしてサッカーライフが成り立っていることを
改めて認識することができた。

そして何より、2020 年シーズンのみならず、
４年間ご支援、ご声援をいただいた OB・OG の皆様に感謝を申し上げたい。
リーグ戦の応援に来ていただいた方はもちろん、寄付回り等でお話しさせていただいた方からは
様々な刺激を受け、ピッチ内外での原動力となった。本当にありがとうございました。

酉松会 会則

第１条（名称）　本会は酉松会と称する。

第２条（目的）　本会は一橋大学体育会ア式蹴球部の育成、発展と
会員相互の親睦向上を図ることを目的とする。

第３条（所在地）　本会は事務所を一橋大学体育会ア式蹴球部に置く。

第４条（事業）　本会は第２条の目的達成のため次の事業を行う。

① 現役部員に対する指導、育成、援助
② 親睦会、OB・現役対抗戦
③ 会員名簿の作成、発行
④ 会報の発行
⑤ 総会及びその他の会の開催
⑥ その他目的達成上必要なる事業

第５条（会員）　本会は一橋大学体育会ア式蹴球部に在籍した者及びこれに準ずる者で
総会において認められた者をもって組織する。

第６条（役員）１ 本会は次の役員を置く。

① 会長　１名
② 副会長　３名以内
③ 幹事　１５名以内

２ 会長は本会を代表し、本会を総理し、総会、役員会を招集する。
３ 副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時はこれを代行する。
４ 幹事より代表幹事を１名選出する。代表幹事は会長がこれを指名する。
５ 代表幹事は会務を掌握し、幹事は会務を処理する。
６ 役員の任期は年次総会より１ヶ年とする。ただし、任期満了の後も
次期役員が選任されるまでの間はその任にあたる。役員の再任を妨げない。
７ 必要のある時は総会の決議により名誉会長及び顧問を置くことができる。

第７条（総会及び役員会）

1　総会は毎年３月に開催し、会長がこれを招集する。
　会長が必要と認めた時は臨時総会を開催する。

2　総会は次のことを決定する。
　① 本会の規約の制定及び変更
　② 予算と決算の承認及び会務の報告
　③ 役員の選任
　④ その他重要な事項

3　役員会は会長、副会長及び幹事により構成する。

4　役員会は役員の発意により会長がこれを招集する。

第８条（会計）1　本会の経費は会費、寄附金、その他の収入をもってこれにあてる。

2　会費及びその徴収方法、時期については、役員会が別途これを定める。

3　本会会計年度は毎年１月１日から12月31日までとする。

第９条（附則）　本会則に規定しない細目は役員会で決定する。
　重要事項については総会の承認を得るものとする。

酉松会 会員名簿

↑物故会員

大12卒
↑ 兵藤 世平治
昭3. 5. 30
（在学中物故会員）
↑ 神戸　力
↑ 拜司 隆一
↑ 萩屋 英夫
↑ 島　吉郎
↑ 林（台湾の人）

大13卒
↑ 北尾 義人（専）
昭53. 11. 21

大14卒
↑ 進藤 静太郎
平16
三宅 定夫（専）

大15卒
猪瀬 弁一郎
↑ 川村　通
昭20. 7. 8
↑ 松本 正雄
平8. 1. 4
↑ 藤井　泰（専）
昭32. 6. 17

昭２卒
↑ 明石　毅
平7. 2. 4
↑ 高橋 朝次郎
昭51. 8. 5
↑ 桧垣 延樹

昭３卒
三宅 弘方
澤田 安二（専）
山下　保（専）
↑ 王　熙宗
昭50. 4. 27

昭４卒
↑ 瀬社家 力
昭60. 8. 6
↑ 小川 謙一郎（専）
昭38. 8. 20

昭５卒
↑ 伊藤 健吉
↑ 近藤 豊太郎
↑ 城島 直也（鎮雄改）
昭45. 3. 11
↑　森　緑
↑ 渡辺 甚吉（村吉改）
昭47. 5. 25
↑ 渡辺　弘

昭６卒
↑ 恵藤 勤一
昭7. 4. 24
↑ 津田 弘精
平11
↑ 豊田 達治
平6. 1. 31
↑ 平松 宣夫

昭７卒
↑ 安野 元章
（半沢貞治改）
↑ 栗山 健三
昭11. 7. 27
↑ 酒井 孝吉
昭9. 1. 8
↑ 高橋 啓次郎
昭45. 2
↑ 高橋 重弥
昭20. 11. 23
↑ 西川 善一郎
平6. 12. 12
星野 弘一

昭８卒
勝田 一郎
↑ 小林 昌一
↑ 西田 嘉兵衛
平5. 2. 7
↑ 橋本 林三
昭52. 12. 8

昭９卒
↑ 長瀬 東作
昭12. 10. 21
↑ 吉村 豊三
平15

昭10卒
↑ 後藤 博基
昭54. 8. 12
↑ 二階堂 謹二
平17

昭11卒
↑ 神野 光司（清一郎改）
昭20. 6 戦死
↑ 水島　茂
昭59. 5. 14

昭12卒
↑ 浅枝 彦太郎
昭20. 8. 6
↑ 荒井 文雄
昭13. 11. 3 戦死
角田　昇
↑ 田島 輝重
昭46. 5. 7
↑ 森田 昭之
平5. 4. 8
枝村 藤三郎（養）

昭13卒
浅田英三
↑ 大掛 隆之
昭39. 2. 29

昭13卒
↑ 重見 敏之
昭49. 1. 14
↑ 鈴木　彰
昭60. 4. 6
林田　毅
村井 恒典

昭14卒
岩崎 寛貞
↑ 後藤 虎雄
平18
↑ 小西 正夫
昭20　戦死

昭15卒
↑ 池尾 隆二
昭19. 8. 2
↑ 狩森 正雄
昭20. 6. 2　戦死
菅瀬 十朗
↑ 二階堂 清三
平2. 2. 11
↑ 米山 大三
昭17. 2. 17　戦死

昭16卒
4月
↑ 荒川 守之助
↑ 石割 知之
平7. 4. 12
↑ 金井 雄吾
平18
↑ 清水 睦美
昭59. 2. 22
↑ 高橋 道太郎
↑ 早野 広太郎
平8. 10. 31
↑ 堀尾 貞一
昭60. 3. 30
↑ 吉澤 貞雄
平9. 11. 27
↑ 吉田 富彦
平7. 10. 18
↑ 折下　章
平11. 5. 17

昭16卒
12月
↑ 片山 光夫
昭60. 4. 23
↑ 鈴木 英二
昭61. 10. 28
↑ 茂木 利孝
昭19. 2. 17　戦死
↑ 松岡 義彦
昭49. 11. 23

昭17卒
9月
↑ 居川 達一
平1. 8. 21
藤塚 亮策
宮沢　力
↑ 水島　行
昭19. 9. 16　戦死
↑ 村木 杉太郎
平7. 1. 19
↑ 山田 久寧
昭20. 12. 26　戦病死
山本 孝次

昭18卒
9月
↑ 瀬藤 俊雄
平8. 5. 12
土屋 五郎

昭19卒
9月
↑ 青木育郎
平19. 12. 28
↑ 太田 賢三
平4. 9. 18
↑ 西内 碩男
昭62. 1. 29
安田 興三郎
鷲埜 和夫

昭21卒
9月
↑ 荒川 正三郎
昭19　戦病死
↑ 奥村 一郎
平28. 7. 5
加藤 春樹
↑ 金原　実
昭20　戦病死

昭21卒
9月
↑ 川端 良三
平20. 10. 30
↑ 高橋 三善
平13. 12
↑ 西浦 正吾
昭21

昭22卒
↑ 松浦　巌
昭55. 11. 28

昭23卒
↑ 加藤　省
令2. 3. 24
↑ 小島　壽
平27. 1. 6
↑ 佐藤 裕之
平10. 12. 24
↑ 鈴木 哲夫
平26. 9. 1
↑ 外岡 諒三郎
平28. 5. 18
↑ 高柳　晋
平6. 5. 21
↑ 永倉 真平
平6. 7. 17
↑ 布谷 由之
平25. 11. 20
↑ 丸山 節生（専）
平19. 9. 2

昭24卒
↑ 蛯子 義文
平22. 8. 14
↑ 森重 利直
平22. 4. 10

昭25卒
↑ 森　一美
昭63. 4. 9

昭26卒
↑ 石川 正和
平20. 6. 29
松本 由之

昭26卒　↑ 渡辺 俊夫
平5. 2. 28

昭27卒　↑ 井田 登也
平4. 10. 1
↑ 鵜飼　質
平22. 9. 11
↑ 木滑　勇
平28. 12. 11
↑ 小林 達夫
平29. 2. 8
篠宮　清
↑ 吉沢 弘泰
平4. 10. 6

昭28卒　↑ 石井 弘志 新4
↑ 斎藤　隆 新4
平29. 4. 26
高田 菊夫 新4
↑ 高橋 敬蔵 本3
平8. 3. 16
↑ 田原 洋二 新4
平24. 9
↑ 堤　光義 本3
昭47. 4. 6
針谷　操 本3

昭29卒　↑ 神代 祥男
平30. 10. 28
↑ 高末　隆
平20. 5. 1
↑ 田中 豊二
平21. 10. 24
↑ 本田 忠勝
昭28. 1. 28
↑ 宮田 幸三
平28. 10. 26
↑ 森　康全
平18. 3. 5
↑ 山下 誠一
平25. 8. 19

昭30卒　石井　徹
↑ 高田 勝巳
平27. 3. 30

昭31卒　石原 慎太郎
↑ 志摩 憲一
令2. 4. 17
中岡 敬雄
橋本 昭一
↑ 馬場　猛
平20. 3. 2
↑ 福江 睦郎
平28. 10. 15
松丸 鉱市
↑ 桃井 晴光（昭二改）
平8. 6. 6

昭32卒　浅井 浩夫
佐竹 明和
嶋田 英司
↑ 中路　信
平25. 6. 28
↑ 日方 大三郎
平24. 4. 14

昭33卒　岩坂 朔郎
↑ 清水　裕
平24. 4. 25
中田 鉄弥
↑ 林　祐三
平28. 3. 10
檜山 博隆

昭34卒　大石　仁
駒井　康
酒井 敏行
↑ 鈴木 久也
平24. 3. 30

昭35卒　石原 良三
小野 輝夫

昭35卒　↑ 小杉 泰夫
平27. 1. 29
斎藤 哲雄
↑ 田中 高峯
平24. 3. 1
古河　洋
三田 達也
鎗田 良昭

昭36卒　飯沼 八洲彦
今村 秋夫
↑ 小澤 純一
平27. 1. 21
小林 成古
笹田 泰正
高柳 雄一
土井　鼎
村上 信勝

昭37卒　秋山 和夫
梅田　清
↑ 大野 章雄
平21. 9. 6
柿澤 光郎
↑ 久保田 秀一
平29. 6. 6
清水 邦男
瀬戸　泰
日巻 久匂男

昭38卒　石井 暢生
山内（伊藤）光生
↑ 岡田 紀雄
平26. 2. 21
川村 英夫（韓 英澤）
清水　擴
↑ 野上 圭一
平20. 1. 3
↑ 細野 宣昭
平24. 7. 21
吉田 弘司

昭39卒　池田　致
石井 光雄
↑ 石綿 浩之
平28. 12. 5
大橋 祥勝
↑ 菊池 英輔
平24. 11. 14
斎藤 国雄
中村　肇
原賀 英明
松島 源吉
森岡 義久

昭40卒　↑ 朝来野 紀生
平10. 7. 17
白石 治紀
寺西 重郎
↑ 古川 和正
平26. 6. 20
永山 在紀
村林 昌二
山田 充夫

昭41卒　斎藤 泰敏
相良 保彦
↑ 清水 征四郎
令1. 10. 13
田中 好輔
堀江 正郎

昭42卒　有田　誠
市川 彰夫
栗又 俊二
↑ 槇田 元生
令2. 9. 13
丸山 克久
三浦 侯宣

昭43卒　小林 純一
高場（可部）恭幸
高峯 文世

昭43卒　馬場 達夫
松崎 和夫

昭44卒　天野 四郎
有田　稔
佐藤 哲太郎
清水 幸男
中澤 泰二

昭45卒　出原 和正
内村　透
岡　猛夫
佐藤 盛夫
鈴木 秀美
種田 勝正
土井 徳秋
↑ 望月 公雄
吉川　実
渡辺　恵

昭46卒　宇野 哲夫
江見 吉信
川合　哲
小島　収
竿代 興志
柴田　暁
関　榮一
本田 和夫
丸杉 孝三郎
↑ 丸山 清八
平8. 8. 29
吉川 敏一

昭47卒　宮内 正敬
湯浦 俊一

昭48卒　押本 俊明
↑ 新福　正
平5. 6. 21
矢尾板 健二
矢野 進一

昭48卒　猿渡 啓子
河野 恵美子

昭49卒　大江　健
緒方　徹
大島　正
小山　修
杉山 正敏
高垣 健治
古市 正興
松沼 英昭
山崎 彰人
吉岡 基夫

昭50卒　宇田　均
内田　守
遠藤　環
大久保 寧
岡田 孝一
笠間 昭彦
宮　辰也

昭51卒　阿部 匡順
池田　篤
↑ 池田 克彦
平26. 2. 6
木内 秀行
北出　晃
↑ 倉田　徹
平23. 12. 22
河内 純一郎
佐藤 健太郎
瀬川 雄二
高橋 良多
谷口 伸一
塚原　徹
寺尾　進

昭52卒　↑ 安部 裕二
平30. 5. 15
内田 泰彰

昭52卒
加藤 富朗
蒲生 芳樹
木村 武志
斎藤 節雄
篠崎 信弘
永田 耕一
土方 周明
福本　浩
古荘 健一
村上　仁
山根 言一
養田 直樹
今井 なつこ
今関 真理子
杉江 陽子

昭53卒
浅井 幸一
池田 泰秀
栗原　仁
小林　治
佐藤 嘉明
渋谷 耕一
田中 耕太郎
道正　栄
深谷　徹
遠藤 美子

昭54卒
石川　哲
大西 康夫
加藤 幸雄
小池 直之
高槌 宏敦
五座 哲也
鈴木　茂
高野 啓太
寺西 純之
野村　隆
↑ 山原 義彦
平17. 9. 11
佐藤 博子

昭55卒
青木 健太郎
石田 暁夫
↑ 入江 憲二
昭59. 5
五味 正秀
清水 靖雄
種岡 瑞穂
袴田　剛
吉田 慎二
重松 真理

昭56卒
大倉 治彦
太田 勝之
坂田 智弘
桜井 真二
田口　聡
武田 治基
橋詰 邦弘
日置 慶太
船倉 洋一
松山 久恵

昭57卒
伊地知 嗣典
切畑 年生
倉崎 嘉幸
松村 正俊
吉中 邦夫
柴田 京子

昭58卒
伊藤 史郎
岩田 淳一
奥野 真琴
杉山 剛英
須藤 英夫
滝口　修
田中　剛
都竹 一郎
畑　弘志
松尾 俊彦
松永　隆
梶浦 明子

昭59卒
上坂 卓也
小澤 忠司
木下 克彦
久木田 正樹
栗本 泰治
島田 喜広
高木 泰三朗
長崎　寛
中隈 和夫
坂東 慶正
樋口 哲司
舟津 一郎
堀田　浩
山木 達生
若林 紀雄
斎藤　真美

昭60卒
↑ 奥村 俊彦
平29. 6. 10
尾仲 秀次
橋爪 智之
山部 信太郎
田中 明美
藤田 実穂

昭61卒
入部　衡
北山　慶
桑原 隆人
幸松 栄夫
谷口　浩
釣田　智
福田 正司
村上 浩三
酒井 智子
滝沢 英子
田中 千代子
宮村 千鶴

昭62卒
朝原 丈雄
岩本　潔
高見 理人

昭62卒
竹田 益実
寺田 広志
新徳　昭
宮脇 俊久
亀下 幸恵

昭63卒
安楽 哲郎
川本 清充
神原 直秀
北尾 一郎
新谷 浩司
高橋 政博
土田　聡
橋本 俊昭
星野　毅
松井 浩通
泰田 崇義
柳田 浩孝
吉村 信康
横手 利恵

平１卒
樫原　隆
金谷　斎
栗谷 信裕
藤井 徹也
↑ 宮木 和彦
平13. 11
山崎　真
東　千順
漆原 律子

平２卒
絹川 直人
佐藤 考洋
篠田 尚之
諏訪部 伸吾
西川 一郎
林　道雄
村尾 祐一
鈴木 志野
平山 陽子
福田 博美

平３卒
赤井 伸彦
綾織 次郎
岡本　正
川腰 桂三
川畑 好一郎
河畑 真企
志田 一孝
鈴木 栄三
野田 純司
袴田 守一
山村　学
横山 泰介
阿部 みゆき
池田 陽子
上田 友紀子
副田 尚子
松本 園子

平４卒
赤星 真一
川上　耕
橋本 直哉
松浦 照二
水谷　健
本橋　聡
↑ 横山 昌幸
平10. 6. 22
石橋 美佳子
大倉 容子
岡田 真紀子

平５卒
安部 太郎
大石 嘉彦
木村 泰彦
三枝 正人
森田　稔
杉山 雅子
高橋 郁子
種子田 香

平６卒
池内 久泰
岡野 貴之

平６卒
小野田 博文
河面 洋泰
木村 義幸
栗原 博昭
林田 勝則
桝田　健
宮嵜 弘喜
向畑 哲也
倉田 真由美

平７卒
粟津 義一
井上 健一
大場 恒和
尾崎　真
角田 真一
鎌倉 一輝
神谷 佳典
釼持 隆雄
重満 紀章
篠原 弘樹
西郷 行保
中村　進
永山 研一
橋口 晴彦
馬場 清大
松井 伸太郎
吉崎 正彦
河村 里栄
白鳥 由紀
長瀬 智愛

平８卒
朝倉 寛行
江尻 昌彦
徳重 泰治
中村　克
深田 道就
船場 貴文
安田 治靖
塩入 裕子
津浦 しのぶ
三由 奈都子

平９卒
宇津野 智哉
大野 彰之
久保 輝幸
志村　亮
城堀 真也
杉本 真吾
鈴木 仁也
鈴木 宏俊
高橋 伸介
田中 智之
戸田 康弘
丹尾 彰彦
西　英俊
福井　葉
福田 泰久
船橋 義也
前田　健
町塚 栄介
伊藤　綾
町駒 英里子
村越 由季子

平10卒
香取 健太郎
幸木　一
潮見 健介
長谷川 敦
長谷川 真
畑　洋平
森　正則
山内 修平
中澤 陽子

平11卒
上澤　淳
角井 朋之
今野 一広
進藤 潤耶
長谷川 貴久
宇陀 留美

平12卒
青井 威文
伊佐木 航

平12卒
猪岡 君彦
川村 徳佐
栗崎 知也
城近 英司
高山 勝裕
濱田 能史
増田　允
森中　剛
諸石　央
吉野 徹之
川嶋 瑠衣
内藤 聖子
中田 貴子

平13卒
朝倉 俊明
伊佐木 壮
伊藤　祐
木崎 哲浩
佐々木 伸太郎
佐次 徹也
佐藤 丈治
示野 功雄
竹内 浩哉
長田 健一
原　慶一
原田 英治
横山 俊之
樫本 真弓
小林 倫子
常深 文恵
慎　裕淑

平14卒
阿島 友昭
安部 耕平
岡田　薫
須田 尚宏
武　直毅
塚田 陽一郎
日影 武也
森松 央志
尾野本 真由

平14卒
梶原 千草
高岸 由香里
林　優子

平15卒
稲垣 祐三
大久保 穣
高橋　進
土屋 雅慎
小寺 暁子
宿輪 小百合
山崎 美和
柳沢 絵美

平16卒
酒井　淳
永井 美澄
中川 貴弘
袴田 賢吾
長谷 嘉之
林 良二郎
松井 悠記
品川 真衣
田口 紗絵子
築地 綾乃
土川　恵

平17卒
小林 康彦
竹石 義勝
林 健一郎
前田 和也
新井 理恵
甲原 真帆
堀江 理奈

平18卒
金子 昌史
木村 英生
杉本 達朗
鈴木 雅也
高宮 創平
團 章一郎
冨田 和成
深澤 雄太

平18卒
門司 陽平
山盛 貴史
和泉　妙
大垣 真梨子

平19卒
帰山 圭祐
佐藤 勇起
全　博聖
田村 直哉
中島 智昭
林 亮太郎
溝端 清悟
内田 弥佳
越後屋 麻澄
水澤 明希

平20卒
浅沼 雄介
石井 崇弘
影山　昇
木村 辰徳
桜井 基貴
佐藤　怜
上甲 友規
中島 聡太
西村　聡
山本 一史
山本 俊介
伊藤 菜帆
乙黒 絵里
湊　麻理子

平21卒
大久保 隆廣
倉田 嵩之
斎藤 隼人
高田 光大
鄭　瑛淳
宮内　優
大竹　惟
坂本 明子
花井 美穂

平22卒
阿部 真琴
草場 慶太郎
小林 優太
高橋 悠基
西河 真也
藤井　翔
山田 雄之助
吉田　充
親川　文
南谷 友香
山田 裕佳

平23卒
鹿島 聡志
小林 悠二
星　達也
堀地 良佑
砂子 達也
村井 佑治郎
守本 朋弘
大橋 智恵美

平24卒
伊藤 暁良
植村 康太
高松　俊
西尾 隆太
松村 雅司
松本 雄士
横溝 英大
山浦 一平
内山 朋美

平25卒
池田 圭吾 ジェイスン
北川 雄介
戸谷 雄貴
彦坂 達哉
平林 幸治
村上 康一
梅村　薫
鈴木 絵美
名和 千紘
山下 夏実

平26卒
荒牧 耕太郎
大倉 佑介
小野 博充
桂　怜人
上塘 春生
田代 健太
谷　佳祐
稲垣 文佳
小林　茜

平27卒
大山 航輝
川副 陽平
田中 克弥
中村　瞭
野村 修斗
満井 一成
宮村 開人
加藤 里菜
川口　望
平田 芽子

平28卒
秋山 協太郎
岩永 章佑
蝦子　樹
大塚 幸司
小笠原 健太
金田 大樹
小泉 武広
小島 秀太
後藤　守
竹本 圭佑
蓮池 就介
横田 拓郎
橋本 安未
渡辺 りお

平29卒
青木　嵩
池田　修
大口 柾文
梶谷 卓矢
栗木 春綱

平29卒	近藤 直輝
	榊原 龍斗
	中野 圭祐
	普勝 悠暉
	森本 志朗
	寺田 香穂
	山崎　光
平30卒	甘利 知己
	石川 達也
	佐々木 錬
	白藤　颯
	宗　嵩久
	手島 拳之介
	野際 大樹
	藤原　慧
	船越 弘晃
	本間 恒輝
	松井 基宏
	吉川 健也
	吉田 圭吾
	山口 千尋
平31卒	池田　真
	大内 健太郎
	大山 達也
	岡谷 真広
	小野間 顕
	加賀 平朗
	塩月 航輝

平31卒	重宗 大貴
	神藤 悠斗
	関澤 勇人
	田尻 一真
	田中 才揮
	玉水 寛人
	戸井 純平
	中野 正樹
	中村 祐樹
	仁賀 雅之
	西本 優壱
	根木 俊輔
	藤井 拓郎
	船田 和佐
	堀本 陽太朗
	松本 紘輝
	向井 健太
	鹿嶋　茜
	河野 香苗
	野口 明穂
	平野　優
	南　里沙子
令２卒	石川　晃
	石田　洸
	大澤　敦
	尾高 洸祐
	城所 知希
	小杉 直輝
	斎藤 五樹

令２卒	下地 政太
	杉山 恭平
	高山 修也
	中西　望
	藤井 俊輔
	深井 雄太
	右田 大河
	森山 裕理
	渡邉 友彬
	菅家　恵
	下川　葵
令３卒	雨宮 一郎
	江口 雄介
	太田 悠斗
	達　康大
	瀬山 謙人
	中田 裕之
	中野 英司
	西山 拓実
	八田 健吾
	林 遼太朗
	ヘルバート 弥呂
	木田 力斗
	松田 悠太郎
	宮林 佑汰
	名徳 泰地
	山本 健太
	木村 映美

注）↑物故会員は令和３年４月末時点で判明している方のみ表記

注）平 30 卒～令４卒の OBOG については実際の卒年と一致しない場合あり

注）女子マネージャー（他大学・中途退部を含む）は現役当時の名前で表記

【参考および引用資料】

＊ 部誌『蹴球』第1巻 ～ 第9巻 （昭和9年～16年刊・昭和57年復刊）
＊『一橋大学ア式蹴球部60年史』（昭和57年２月24日刊）
＊ 各年代OB諸氏（昭57卒以降）の寄稿・所蔵写真
. . . . . .
＊ 歴代の卒業アルバム （一橋大学附属図書館所蔵）
＊ 東京都大学サッカーリーグ 公式プログラム （OB 諸氏所蔵）
. . . . . .
＊『東京大学のサッカー 闘魂 90 年の軌跡』（平成 20 年 12 月 19 日刊）
＊『東京都サッカー協会五十年史』（平成８年９月 14 日刊）

一橋大学ア式蹴球部 100 年史 Vol. 2 戦記
令和３年６月 28 日　発行　（非売品）

発行者　酉松会
　　会長　緒方 徹
編集人　酉松会新聞編集長　福本 浩
装　丁　辻　聡
制　作　出窓社

Hitotsubashi University Association Football Club

100th

1921-2021